

# 古 郡 家 遺 跡

一般県道国安桂木線緊急地方道路整備事業に伴う  
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査

2004.7

財団法人 鳥取市文化財団

# 序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しており、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えております。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した古郡家遺跡の調査は、一般県道国安桂木線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査として、平成14年度、15年度と調査を行いました。この遺跡は大路川上流の古郡家・久末集落周辺に展開します。この地域は圃場整備に伴う昭和48年の調査で弥生時代中期の掘立柱建物、大路川改修工事に伴う昭和50年の調査で縄文時代晩期の貯蔵穴などが明らかとなっておりますが、それ以降本格的な発掘調査が行われておらず、実態が不透明な遺跡のひとつでした。今回の調査は集落の中心部とはやや離れた位置でしたが、掘立柱建物、井戸、土坑、溝状遺構などが見つかるとともに、弥生時代中期から古墳時代にかけての多くの土器、木製品などが出土しました。これらの資料は、当地域の歴史を探る上で、大きく役立っていくものと確信いたします。ささやかな冊子ではありますが、研究者のみならず広範な市民各位による郷土の歴史究明など、関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成16年 7 月

財団法人 鳥取市文化財団  
理 事 長 石 谷 雅 文

## 例 言

1. 本書は、一般県道国安桂木線緊急地方道路整備事業の事前調査として実施した古郡家遺跡<sup>ここおげ</sup>の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、鳥取県鳥取地方県土整備局の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成14年度、15年度に実施した。
3. 発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市古郡家字畑ケ田、湯ノ口である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地実測・写真撮影、遺構図面の浄書は、調査員、補助員を中心に発掘調査参加者の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測・浄書は、下多みゆき、濱橋博子を中心として行った。一部土器実測について杉谷美恵子氏の協力をいただいた。本書の執筆、編集は谷口恭子が担当した。
6. 現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。特に出土石製品の石材同定を鳥取市文化財審議会委員 山名 巖 先生にお願いし、お手を煩わせた。厚く感謝いたします。

## 凡 例

1. 本書における方位は、座標北の第1・2図を除いて磁北を示す。また、レベルは海拔標高である。
2. 本書で使用した遺構の略号は、掘立柱建物；SB、井戸；SE、土坑；SK、溝状遺構；SD、ピット；P である。
3. 今回の調査によって出土した遺物は、調査年度、調査区、遺構名、遺物台帳登録番号、取り上げ年月日を基本的に注記し、写真や図面などの記録類も同様である。

(例；2002 古郡家 SK-15 No11 2002. 07. 21)

# 本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 発掘調査の経緯	
第1節 発掘調査にいたる経緯	1
第2節 発掘調査の経過	1
第3節 調査の組織・体制	3
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	
1. 古郡家遺跡の位置	4
2. 遺跡の歴史的環境	4
第3章 調査の結果	
第1節 平成14年度調査区と平成15年度調査区の立地と層序	15
第2節 平成14年度の調査	
1. 掘立柱建物	16
2. 井戸	18
3. 土坑	22
4. 溝状遺構	30
5. その他の遺構と遺物	36
第3節 平成15年度の調査	
1. 土坑	39
2. 溝状遺構	40
3. その他の遺構と遺物	52
(出土遺物観察表)	55
第4節 まとめ	58
写真図版	

# 插图目次

第1图 古郡家遺跡調査地位位置図……………2	第28图 平成14年度 S D-02~08実測図……………31
第2图 古郡家遺跡周辺遺跡分布図……………7	第29图 平成14年度 S D-02出土遺物実測図……………32
第3图 平成14年度調査区断面図……………8	第30图 平成14年度 S D-03出土遺物実測図……………32
第4图 平成15年度調査区断面図……………9・10	第31图 平成14年度 S D-09~12実測図……………34
第5图 平成14年度調査区全体図……………11・12	第32图 平成14年度 S D-14・15・16実測図……………34
第6图 平成15年度調査区全体図……………13・14	第33图 平成14年度 S D-17実測図……………34
第7图 平成14年度 S B-01実測図……………16	第34图 平成14年度 土器溜1 実測図……………36
第8图 平成14年度 S B-02実測図……………17	第35图 平成14年度 土器溜1 出土遺物実測図……………36
第9图 平成14年度 S B-03実測図……………17	第36图 平成14年度 土器溜2 実測図……………37
第10图 平成14年度 S B-04実測図……………18	第37图 平成14年度 集石遺構 実測図……………37
第11图 平成14年度 S E-01実測図……………19・20	第38图 平成14年度 遺構外出土遺物実測図……………38
第12图 平成14年度 S E-01出土遺物実測図……………21	第39图 平成15年度 S K-01実測図……………39
第13图 平成14年度 S K-01実測図……………22	第40图 平成15年度 S K-02実測図……………39
第14图 平成14年度 S K-02実測図……………23	第41图 平成15年度 S K-03実測図……………39
第15图 平成14年度 S K-02出土遺物実測図……………23	第42图 平成15年度 S D-01実測図……………40
第16图 平成14年度 S K-03実測図……………24	第43图 平成15年度 S D-02実測図……………41
第17图 平成14年度 S K-04実測図……………24	第44图 平成15年度 S D-02出土遺物実測図……………42
第18图 平成14年度 S K-05実測図……………25	第45图 平成15年度 S D-03実測図……………43
第19图 平成14年度 S K-06実測図……………26	第46图 平成15年度 S D-04実測図……………44
第20图 平成14年度 S K-06出土遺物実測図……………26	第47图 平成15年度 S D-04出土遺物実測図……………45
第21图 平成14年度 S K-07出土遺物実測図……………26	第48图 平成15年度 S D-05実測図……………47・48
第22图 平成14年度 S K-07実測図……………27	第49图 平成15年度 S D-05出土遺物実測図(1)……………49
第23图 平成14年度 S K-08実測図……………28	第50图 平成15年度 S D-05出土遺物実測図(2)……………50
第24图 平成14年度 S K-08出土遺物実測図……………29	第51图 平成15年度 S D-05出土遺物実測図(3)……………51
第25图 平成14年度 S K-10実測図……………29	第52图 平成15年度 S D-05出土遺物実測図(4)……………52
第26图 平成14年度 S D-01実測図……………30	第53图 平成15年度 遺構外出土遺物実測図……………52
第27图 平成14年度 S D-01出土遺物実測図……………30	

# 図 版 目 次

- 図版 1 調査地遠景  
(北東上空から大路川及び  
久末・古郡家集落を望む)  
平成14年度調査区全景(南西上空から)
- 図版 2 平成14年度調査区全景(南東上空から)  
平成15年度調査区全景(北西上空から)
- 図版 3 平成14年度調査区断面C1杭周辺  
(北東から)  
平成14年度調査区断面C2～C3杭周辺  
(北東から)  
平成14年度 Tr-1北東壁面(南西から)
- 図版 4 平成14年度 S B-01検出状況(北西から)  
平成14年度 S B-02検出状況(南東から)  
平成14年度 S B-03検出状況(北東から)  
平成14年度 S B-03内P-193断面(北から)
- 図版 5 平成14年度 S B-03内P-207検出状況  
(北から)  
平成14年度 S B-04検出状況(西から)  
平成14年度調査区南西端部Pit検出状況  
(北西から)
- 図版 6 平成14年度 S E-01断面(北西から)  
平成14年度 S E-01井筒検出状況  
(北東から)  
平成14年度 S E-01井筒検出状況  
(北西から)
- 図版 7 平成14年度 S E-01井筒下部(南西から)  
平成14年度 S E-01井筒下溜木検出状況  
(北西から)  
平成14年度 S E-01井筒完掘状況  
(北東から)
- 図版 8 平成14年度 S K-01検出状況(西から)  
平成14年度 S K-02検出状況(北から)  
平成14年度 S K-03検出状況(北東から)  
平成14年度 S K-04検出状況(北東から)
- 図版 9 平成14年度 S K-05検出状況(北東から)  
平成14年度 S K-06検出状況(南東から)  
平成14年度 S K-07遺物出土状況  
(南東から)  
平成14年度 S K-07完掘状況(南東から)
- 図版10 平成14年度 S K-08断面(南西から)  
平成14年度 S K-08遺物出土状況  
(南東から)  
平成14年度 S K-08完掘状況(南東から)
- 図版21 平成15年度 S D-02(南部分)検出状況  
(南西から)  
平成15年度 S D-02遺物出土状況  
(北東から)  
平成15年度 S D-03断面 b-b'(南西から)
- 図版22 平成15年度 S D-03(南部分)検出状況  
(南西から)  
平成15年度 S D-04断面(南西から)  
平成15年度 S D-04検出状況(北から)
- 図版23 平成15年度 S D-04遺物出土状況  
(北東から)  
平成15年度 S D-05断面(北から)  
平成15年度 S D-05上層遺物出土状況  
(南西から)
- 図版24 平成15年度 S D-05上層遺物出土状況  
(南東から)  
平成15年度 S D-05上層遺物壺出土状況  
(南東から)  
平成15年度 S D-05完掘状況(北東から)
- 図版11 平成14年度 S K-08完掘状況(北東から)  
平成14年度 S K-08内P-238断面  
(北東から)  
平成14年度 S K-08内P-239断面  
(南東から)
- 図版12 平成14年度 S K-10断面(南西から)  
平成14年度 S K-10検出状況(南東から)  
平成14年度 S D-01検出状況(南西から)  
平成14年度 S D-02検出状況(北東から)
- 図版13 平成14年度 S D-03検出状況(南から)  
平成14年度 S D-04検出状況(北から)  
平成14年度 S D-06～08検出状況  
(北東から)
- 図版14 平成14年度 S D-09検出状況(南西から)  
平成14年度 S D-10検出状況(南東から)  
平成14年度 S D-11検出状況(北東から)

- 平成14年度 S D-12検出状況（南西から）
- 図版15 平成14年度 S D-13検出状況（南西から）
- 平成14年度 S D-14・15検出状況  
（南西から）
- 平成14年度 S D-16検出状況（北西から）
- 平成14年度 S D-17検出状況（北東から）
- 図版16 平成14年度 土器溜1 検出状況（南東から）
- 平成14年度 土器溜2 検出状況（南東から）
- 平成14年度 土器溜2 遺物出土状況状況  
（南東から）
- 平成14年度 集石遺構検出状況（北西から）
- 図版17 平成15年度調査区全景（北から）
- 平成15年度市道東調査区全景（北西から）
- 平成15年度市道西調査区全景（南東から）
- 図版18 平成15年度市道東調査区断面  
C 7 N10杭周辺（北東から）
- 平成15年度市道西調査区断面  
C 10 N10杭周辺（北東から）
- 平成15年度市道西調査区 Tr-1東断面  
（北西から）
- 図版19 平成15年度 S K-01検出状況（北西から）
- 平成15年度 S K-02断面（北東から）
- 平成15年度 S K-03検出状況（北西から）
- 平成15年度 S K-03検出状況（北東から）
- 図版20 平成15年度 S D-01断面 c-c'（南東から）
- 平成15年度 S D-01検出状況（北から）
- 平成15年度 S D-02断面（北東から）
- 図版25 平成14年度 S E-01出土遺物
- 平成14年度 S K-02出土遺物
- 平成14年度 S K-06出土遺物
- 平成14年度 S K-07出土遺物
- 平成14年度 S K-08出土遺物
- 図版26 平成14年度 S D-01出土遺物
- 平成14年度 S D-02出土遺物
- 平成14年度 S D-03出土遺物
- 平成14年度 土器溜1 出土遺物
- 平成14年度 遺構外出土遺物
- 平成15年度 S D-02出土遺物
- 図版27 平成15年度 S D-02出土遺物
- 平成15年度 S D-04出土遺物
- 平成15年度 S D-05出土遺物
- 図版28 平成15年度 S D-05出土遺物
- 図版29 平成15年度 S D-05出土遺物
- 図版30 平成15年度 S D-05出土遺物
- 図版31 平成15年度 S D-05出土遺物
- 平成15年度 遺構外出土遺物

# 第1章 発掘調査の経緯

## 第1節 発掘調査にいたる経緯

古郡家遺跡は、鳥取市古郡家に所在する。古郡家集落北東の標高10～15mの微高地、大路川の左沿岸部を中心に展開する。この一帯はそれぞれの明確な範囲は不明瞭ながら、古郡家遺跡、久末遺跡、大路川遺跡が広がる。背後丘陵上には大小様々な古墳が分布するが、中でも六部山3号墳、古郡家1号墳など因幡でも古手の大形前方後円墳が分布することで知られた地域でもある。平野部での発掘調査は、圃場整備に伴い昭和48、49年に久末遺跡、古郡家遺跡の調査が、大路川改修工事に伴い昭和50年に大路川遺跡の調査が行われている。久末、古郡家遺跡では弥生時代中期の布掘りをもつ掘立柱建物や古墳時代前期の土坑などが、大路川遺跡では縄文時代晩期の堅果類の貯蔵穴を検出するなどの調査成果が得られている。

今回の発掘調査の契機となった一般県道国安桂木線緊急地方道路整備事業は、念仏橋の架け替えと周辺部の道幅拡張などの道路整備として計画されたものである。工事範囲内は古郡家遺跡の広がる微高地の北東延長上に位置し、遺跡の範囲が工事予定地内へ及ぶことが予想されることから、鳥取市教育委員会が平成13年12月に試掘調査を実施した。調査の結果、県道東側の第1トレンチで溝や弥生時代後期の土器群が検出され、県道西側でも第2トレンチで大規模な溝状遺構が検出された。鳥取地方県土整備局と鳥取市教育委員会は協議を行い、記録保存で対応することとなった。

## 第2節 発掘調査の経過

古郡家遺跡の発掘調査は、鳥取地方県土整備局の委託を受け、財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センターが平成14、15年度に現地調査および整理作業を、16年度に報告書作成作業を行った。

平成14年度は県道八坂・正連寺線東側の調査対象地の調査を行った。7月から調査準備に取りかかったが調査地内に所在する残土などの関係で、本格的な調査は9月から開始した。試掘調査の結果から、標高10.7m付近に遺構面が確認されているが耕作土下は遺物包含層であることから、現地表面下10～15cm程度の耕作土および床土を重機によって掘り下げ、これより下層については作業員による手掘りで対応することにした。また、工専用センター杭No24からNo23を見通したラインを基準ラインとし10m毎に方眼を設定、調査杭(C1～C5杭ほか)を設け測量基準とした。

調査は大路川寄りの東側からとりかかり、順次西側へと進めていった。途中調査地内に所在する残土や構造物の移転・撤去などで耕作土の鋤取りは計3回に渡った。

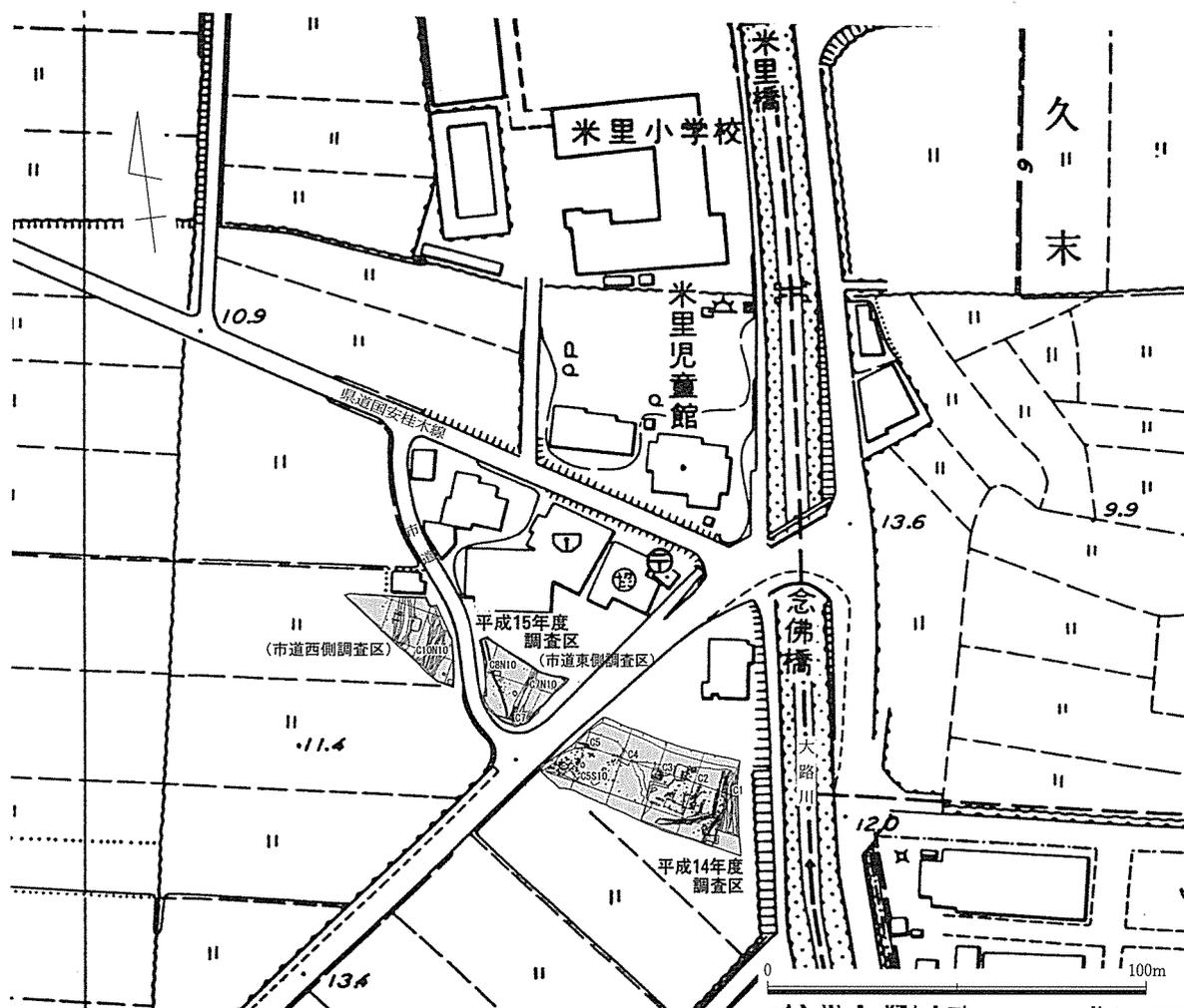
調査の結果、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて掘立柱建物、井戸、土坑、溝状遺構、土器溜り、集石遺構、ピットを検出した。出土遺物は内法54×34×20cmの容量をもつコンテナ36箱分である。このうち調査区のほぼ中央に位置する井戸S E-01は、堅穴住居の可能性を残す隅丸方形の大形土坑SK-08の3m西に配置し、外径約40cmの削り抜き井筒と井筒下に自然木を配置していた。井筒内下層および井筒下の出土遺物は、古墳時代前期と中期の二時期とがみられた。また、井筒は取り上げ後保存処理を専門業者に委託した。こうして平成15年1月末日に現地調査を終了し、3月まで整理作業を行った。

平成15年度は県道八坂・正連寺線西側の調査対象地の調査を行った。7月から調査準備に取りかかり、調査地の中央部を通る市道部分については生活道であることから調査対象から除いた。市道東側の調査区を「市道東側調査区」、西側を「市道西側調査区」と呼称し、市道東側調査区から取り掛かることとした。重機による耕作土除去の後、7月下旬から本格的な調査を開始した。

調査の結果、古墳時代中～後期の遺構面を検出し、土坑、溝状遺構、ピットを、また、弥生時代中期、古墳時代前期の溝状遺構を検出した。このうち幅6m、深さ1.5mを測る古墳時代前期の大規模な溝S

D-05は大量の砂礫で埋没しており、上層で古墳時代中期の完形に近い甕や小壺が集中する範囲が見られた。出土遺物は内法54×34×20cmの容量をもつコンテナ約25箱分である。こうして11月中旬に現地調査を終了し、3月まで整理作業を行った。

調査を通じて検出した遺構、遺物については適宜写真撮影や実測して記録をとり、各調査区で全体の遺構検出状況の写真撮影を行った。出土した遺物と写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、土器については水洗いの後注記、接合作業を行った。また、平成16年4月より順次報告書作成作業にかかり、平成16年7月末に終了した。



第1図 古郡家遺跡調査地位置図 (S = 1 : 2,000)

### 第3節 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成14年度

調査主体 財団法人 鳥取市文化財団  
理事長 竹内 功 (鳥取市長)  
副理事長 福田 泰昌  
副理事長 中川 俊隆 (鳥取市教育長)  
常務理事 小谷 莊太郎 (事務長兼務)  
調査指導 鳥取市教育委員会 文化課  
事務局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
所長 前田 均  
調査事務 秋田 澄世  
白岩 千足  
水戸口 直美  
調査担当 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
主幹 山田 真宏  
調査補助員 神谷 伊鈴  
高垣 恵巳子  
矢芝 泰伸

平成15年度

調査主体 財団法人 鳥取市文化財団  
理事長 石谷 雅文 (鳥取市副市長)  
副理事長 中川 俊隆 (鳥取市教育長)  
三田 三香子  
常務理事 小谷 莊太郎  
調査指導 鳥取市教育委員会 事務局庶務課文化財室  
事務局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
所長 前田 均  
調査事務 秋田 澄世  
白岩 千足  
調査担当 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
調査員 谷口 恭子  
調査補助員 木原 美和  
小杉 雄貴

平成16年度

調査主体 財団法人 鳥取市文化財団  
理事長 石谷 雅文 (鳥取市副市長)  
副理事長 中川 俊隆 (鳥取市教育長)  
三田 三香子  
常務理事 小谷 莊太郎  
調査指導 鳥取市教育委員会 事務局庶務課文化財室  
事務局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
所長 前田 均  
調査事務 秋田 澄世  
白岩 千足  
調査担当 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
調査員 谷口 恭子  
調査補助員 木原 美和  
杉本 利子  
下多 みゆき  
濱橋 博子

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

### 1. 古郡家遺跡の位置

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25km<sup>2</sup>、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域の三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。地域の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文時代前期の縄文海進時には入り組んだ内湾状を呈していたと見られ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

古郡家遺跡は、JR鳥取駅の南南東約4km、鳥取平野南部の鳥取市古郡家、久末地内に所在する。越路谷の入り口にあたり、遺跡は大路川によって形成された扇状地および沖積微高地、標高10.5～12m前後に立地する。遺跡の中央部には県道八坂・正連寺線が通り、遺跡前方北1kmには標高105mの独立丘陵である大路山、その北東には同じく標高100m弱の面影山がそびえる。現在、遠く北西に市街地を臨みながら圃場整備された水田が北一面に広がるものの、舌状の微高地先端を中心に古くは大路川の氾濫を受けるなどして現在とはやや異なった微地形が展開していたものと想像される。

遺跡の周辺はのどかな田園地帯であるが、1.7km北側に1995年（平成7）、大路山の北東裾および的場、南吉成を通る国道29号線津ノ井バイパスが開通し、その沿線に市民病院などの福祉施設、各種店舗や事業所が進出するなど市内において最も開発の著しい地域となっている。また、宅地造成も大路川を越えて徐々に南へと波及しており、大路川北東対岸の津ノ井工業団地からの流れも合わせ、今後の遺跡周辺の状況は数年後には一変する可能性が考えられる。

### 2. 遺跡の歴史的環境

**【縄文時代】** 鳥取平野周辺で最初に人の足跡がたどれるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。続く縄文時代早期の遺跡として、平成14年、中国山地山間部に位置する智頭町智頭枕田遺跡が挙げられる。早期および中期末から後期初頭の竪穴住居多数が発見され、内6棟に石囲埋甕炉が遺存するなど10万点を越す土器・石器などを含め、西日本最大級の縄文集落として注目されている。鳥取平野周辺では、同年、鳥取市域の西端、白兎海岸から1km内陸の内海中所在遺跡で前期中頃磯ノ森式土器が後期の土器とともに採集されている他、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵上の立地する美和古墳群下層遺跡、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡から微量ながら出土している。中期の遺跡としては断片的ながら砂丘地に立地する栃木山、追後、天神山遺跡が挙げられる。この他、砂丘後背地の低湿地に立地しそれぞれ前期、中期から始まる福部村栗谷遺跡、同村直遺跡、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡、布勢第1遺跡、湖山池に浮かぶ青島遺跡が後期を中心とする縄文遺跡として有名である。桂見遺跡ではこれまで数度に渡る調査で、平成6、7年度に相次いで全長7.2、6.4mの丸木舟が相次いで出土し話題となった。布勢第1遺跡では木組みをもった水路、漆塗りの木製広口壺・腕輪が出土し、高度な技術が示されている。千代川右岸では古郡家遺跡に東接する大路川遺跡が縄文遺跡として有名で、1975年（昭和50）の調査で、地表下1.5～2.0mの地点で晩期前半の貯蔵穴5基が検出されており、土製耳飾、後期～晩期の土器、石皿の他にトチ、アラカシなどの堅果類が出土している。この他に千代川右岸では、自然堤防上の標高5mの古市遺跡で晩期の比較的まとまった土器が、同じく標高6.5mの自然堤防上に立地する宮長竹ヶ鼻遺跡、大路山北西山裾に展開する西大路土居遺跡で僅かながら突帯文土器が出土している。なお、千代川対岸の古海遺跡や布勢第1遺跡では後期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移しており、弥生時代を迎えるにあたり遺跡は自然堤防上、平野中心部の微高地へと進出する傾

向が窺えるが、右岸ではそれを裏付けるだけの資料は乏しいのが現状である。

**【弥生時代】** 弥生集落の状況は、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるようで前期の遺物を断片的に出土し中期へ継続しない傾向がみられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡は千代川平野の自然堤防上の砂洲を中心とした微高地に立地し、現在のところ県東部で最も古い要素をもつ弥生土器が出土しており、鳥取平野で最初に稲作を導入した遺跡と考えられている。中期中頃には山ヶ鼻、服部、秋里遺跡など自然堤防上に遺跡が出現し、一部岩吉遺跡の分村的な遺跡と考えられている。中期後葉になると段丘状の微高地に進出する遺跡が目立ち始め、後期に入ると遺跡数は飛躍的に増加しそれぞれ古墳時代へと営まれていく。千代川右岸では前期の遺跡として富安遺跡、西大路土居遺跡があり、富安遺跡は標高6mの袋川自然堤防上に立地し、前期末～中期の土器が出土している。西大路土居遺跡は二度に渡る調査から、前期中～中期前葉の土坑群が検出されており、一部土壙墓との指摘もなされている。中期中葉に竪穴住居1棟が検出されているが後葉、後期と時期が下るにつれ竪穴住居、遺物の数が増加傾向にある。古郡家遺跡では中期後葉の土器や石庖丁、石斧類、布掘り構造のある掘立柱建物を含めた6棟が出土している。また、袋川自然堤防上に立地する国府町安田遺跡でも中期中葉～後葉のまとまった土器が出土している。近年の古墳に伴う調査から、丘陵上においても弥生中期後半を中心とする遺跡の調査例が知られてきており、千代川左岸丘陵の標高30～50mで竪穴住居数棟、75、100m付近で遺物が出土している。右岸では中期において丘陵上の遺跡は周知されていないが、後期初頭に美和32号墳墳裾の標高47～50mで竪穴住居および段状遺構が、六部山5・42・44号墳墳丘下で後期後半の掘立柱建物および土坑、大規模な調査の行われた津ノ井地区では丘陵裾の標高25～30、37mの緩斜面に立地する津ノ井生山大池遺跡、23mの津ノ井宇祢遺跡、紙子谷遺跡では標高33mでいずれも後期後半から古墳時代初頭期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。また、この地域で忘れてはならないのは、越路の果樹園で偶然発見された高さ44.5cmを測る横帯二区流水文をもつ外縁紐2式に分類される越路銅鐸と、西大路土居遺跡で包含層より出土した細形銅剣であろう。

弥生時代の墳墓については、西大路土居遺跡で調査された前期中～中期中頃の土坑が一部土壙墓の指摘がなされており、中期の土壙墓が下味野古墳群の調査で明らかとなっている。中期中葉に郡家町万代寺遺跡で方形周溝墓とみられる土壙墓群が調査されているが鳥取平野における中期の様相は不透明な部分が多い。後期初頭の土壙墓が六部山古墳群の調査で検出されており、後期前葉に滝山猿懸平2号墳、中葉に郡家町下坂1号墓、紙子谷門上谷1・2号墓が、終末期に国府町糸谷四隅突出型墳丘墓が造営される。このうち紙子谷門上谷1号墓は、長辺24mの規模で26基の埋葬施設をもち、ガラス管玉や鉄刀、河内、吉備、北陸系土器を出土している。これに対し、千代川左岸では後期中葉に湖山池南東岸地域で布勢鶴指奥1号墳丘墓、西桂見墳丘墓、桂見墳丘墓など累代的に墳丘墓が築造されており右岸との様相をやや異とするようである。

**【古墳時代】** 古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、遺物散布地の分布状況などから丘陵裾の現集落と重なり営まれたと推察されている。弥生時代から続く古郡家遺跡、津ノ井生山大池遺跡、や前期の津ノ井宇祢遺跡、紙子谷遺跡、広岡西矢谷遺跡などがある。いずれも大集落といかず微高地に住居が点在するといった状況で、千代川左岸の西桂見遺跡の調査から、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵斜面へ下りていくとされる。西大路土居遺跡では古墳時代に入ると遺構数が減少し中期中葉になって再びみられるようになり古式須恵器の時期に竪穴住居が増加傾向となる。中・後期の集落はこの他にまとまった調査例があまりない。この時期の特徴的な遺跡として秋里遺跡をあげることができる。古墳時代を中心として祭祀色が強く、特に多量の土師器、各種模造土・石製品を出土する土器溜土坑が特徴的である。また、七谷池湖畔の古式須恵器が採集されている七谷窯、大路川右岸の丘陵地には越路窯跡群が所在し、重要な生産遺跡として挙げられる。

平野縁辺の丘陵上には、当初弥生時代の系譜を引く方（形）墳が営まれ、小地域単位で新しい要素を

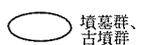
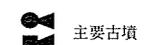
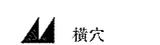
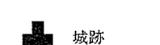
導入し展開していった様相が窺える。現在のところ、湖山池南東岸の桂見2号墳（長辺28m）、鳥取平野南部の美和32号墳（長辺30m）が当期の首長墓とみられる。古郡家遺跡の周辺では美和、広岡、六部山、面影山古墳群などで前期古墳が調査されている。畿内影響下の前方後円墳・六部山3号墳（全長63m）が前期後半の築造とされ、古郡家1号墳（全長90m）が中期の前方後円墳としてその系譜を引く。左岸では里仁29号墳（全長59m）、桝間1号墳（全長92m）が展開する。六部山3号墳は円筒埴輪棺や変形獣首鏡が出土し、竪穴式石槨や陶棺の存在が推定されている。古郡家1号墳は粘土槨や箱式石棺が調査されており、八ツ手葉形青銅鏡や短甲などが出土している。近年調査された横枕古墳群、倭文古墳群周辺では横枕13号墳（全長70m）の存在を絡め、湖山池南東岸地域や鳥取平野南部地域に匹敵するような地域勢力の存在が指摘されている。後期になると空山、八坂古墳群に代表される横穴式石室をもつ群集墳が丘陵斜面や裾に造営される。空山古墳群では石室の内部の鳥・木葉・舟・幾何学模様などの線刻を有し「中高天井」の石室構造とともにこの地域の後期古墳の特徴となっている。この他に家形石棺の残る橋本古墳が注目される。

**【歴史時代】** 律令体制下、この地域は因幡国邑美郡に組み込まれている。古郡家1号墳の北側に所在する式内社、中臣崇建神社は古郡家1号墳を遙拝するような神廟のない形式や「美和」の地名などから大和三輪神社（明神）との関連が指摘されている。邑美郡美和郷が大和三輪氏の部曲で三輪部一神部にかかわると推定される因幡神部の本拠地であることを示す文献資料として、延喜5年（905）「東大寺因幡国高庭庄券第二坪付」には「神部牛丸」「神雄手」「神国足」「神緒平」などの人名が見られる。いずれにしても、式内社三社が周辺に所在していること、郡衙の所在を美和郷内とする説、近辺の因幡国府跡などの存在を考え合わせれば、鳥取平野南部は早くから中央との結びつきを強め、その勢力下にあって消長していった地域であったと言えるだろう。なお、歴史時代の調査例として、千代川右岸沿岸の自然堤防上に立地する古市遺跡では7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物と奈良三彩小壺、墨書土器が、条里が推定されている宮長竹ヶ鼻遺跡では荷札状木簡、人形が溝から出土しているのをはじめ中世の溝や土坑などが検出されている。この他、伊勢谷・湯谷遺跡、古郡家遺跡、西大路土居遺跡で掘立柱建物および奈良・平安時代、中世の遺物が、大杖鐘鋳谷遺跡では江戸時代の梵鐘の鋳型廃棄土坑が検出されている。このように歴史時代の調査例も徐々に増える傾向にあり、今後新しい資料を提供してくれるであろう。

#### 引用・主要参考文献

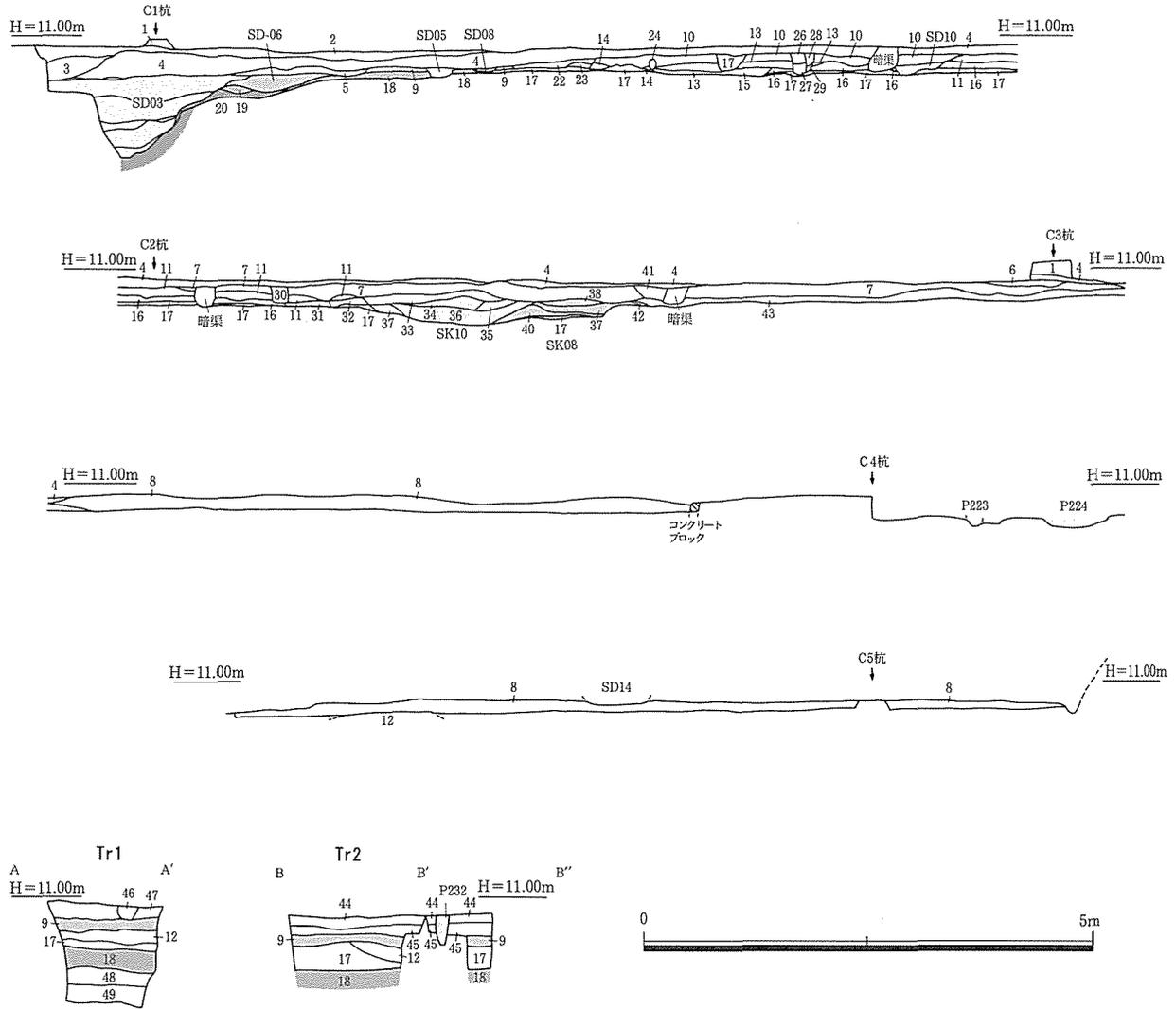
- 鳥取県『鳥取県史 第1巻』1972年  
 鳥取市『新修鳥取市史 第1巻古代・中世篇』1983年  
 平凡社『日本歴史地名大系第32巻 鳥取県の地名』1992年  
 鳥取市教育委員会『久末・古郡家遺跡発掘調査報告書』1974年  
 （財）鳥取市教育福祉振興会『西大路土居遺跡Ⅱ』1997年

#### — 第2図 遺跡名称 —

- |  |  |   |   |  |
|--|--|---|---|--|
| <p>A. 追後遺跡<br/>         B. 覚寺第2遺跡<br/>         C. 円護寺坂ノ下遺跡<br/>         D. 柳木山遺跡<br/>         E. 秋里遺跡<br/>         F. 岩吉遺跡<br/>         G. 布勢第1遺跡<br/>         H. 大桝遺跡<br/>         I. 古海遺跡<br/>         J. 山ヶ鼻遺跡<br/>         K. 北村恵儀谷遺跡<br/>         L. 本高門ノ前遺跡<br/>         M. 古市遺跡<br/>         N. 宮長竹ヶ鼻遺跡<br/>         O. 西大路土居遺跡<br/>         P. 西大路遺跡</p> | <p>Q. 橋本遺跡<br/>         R. 湯谷遺跡<br/>         S. 伊勢谷遺跡<br/>         T. <b>古郡家遺跡</b><br/>         U. 大路川遺跡<br/>         V. 広岡遺跡<br/>         W. 生山大池遺跡<br/>         X. 津ノ井宇祿遺跡<br/>         Y. 安田遺跡<br/>         Z. 立川遺跡</p> | <p>1. 古海古墳群<br/>         2. 釣山古墳群<br/>         3. 服部遺跡<br/>         4. 下味野古墳群<br/>         5. 篠田古墳群<br/>         6. 横枕古墳群<br/>         7. 倭文古墳群<br/>         8. 八坂古墳群<br/>         9. 橋本古墳群<br/>         10. 美和古墳群<br/>         11. 古郡家古墳群<br/>         12. 園原古墳群<br/>         13. 越路古墳群<br/>         14. 六部山古墳群<br/>         15. 船木古墳群<br/>         16. 広岡古墳群<br/>         17. 空山古墳群</p> | <p>18. 紙子谷古墳群<br/>         19. 生山古墳群<br/>         20. 海蔵寺古墳群<br/>         21. 桂木古墳群<br/>         22. 杉崎古墳群<br/>         23. 大路山古墳群<br/>         24. 面影山古墳群<br/>         25. 立川古墳群<br/>         26. 馬場古墳群<br/>         27. 雁金山古墳群<br/>         28. 円護寺古墳群<br/>         29. 覚寺古墳群<br/>         30. 開地谷古墳群</p> | <p>— 凡例 —</p> <p> 集落遺跡、<br/>遺物散布地</p> <p> 墳墓群、<br/>古墳群</p> <p> 主要古墳</p> <p> 横穴</p> <p> 城跡</p> |
|--|--|---|---|--|

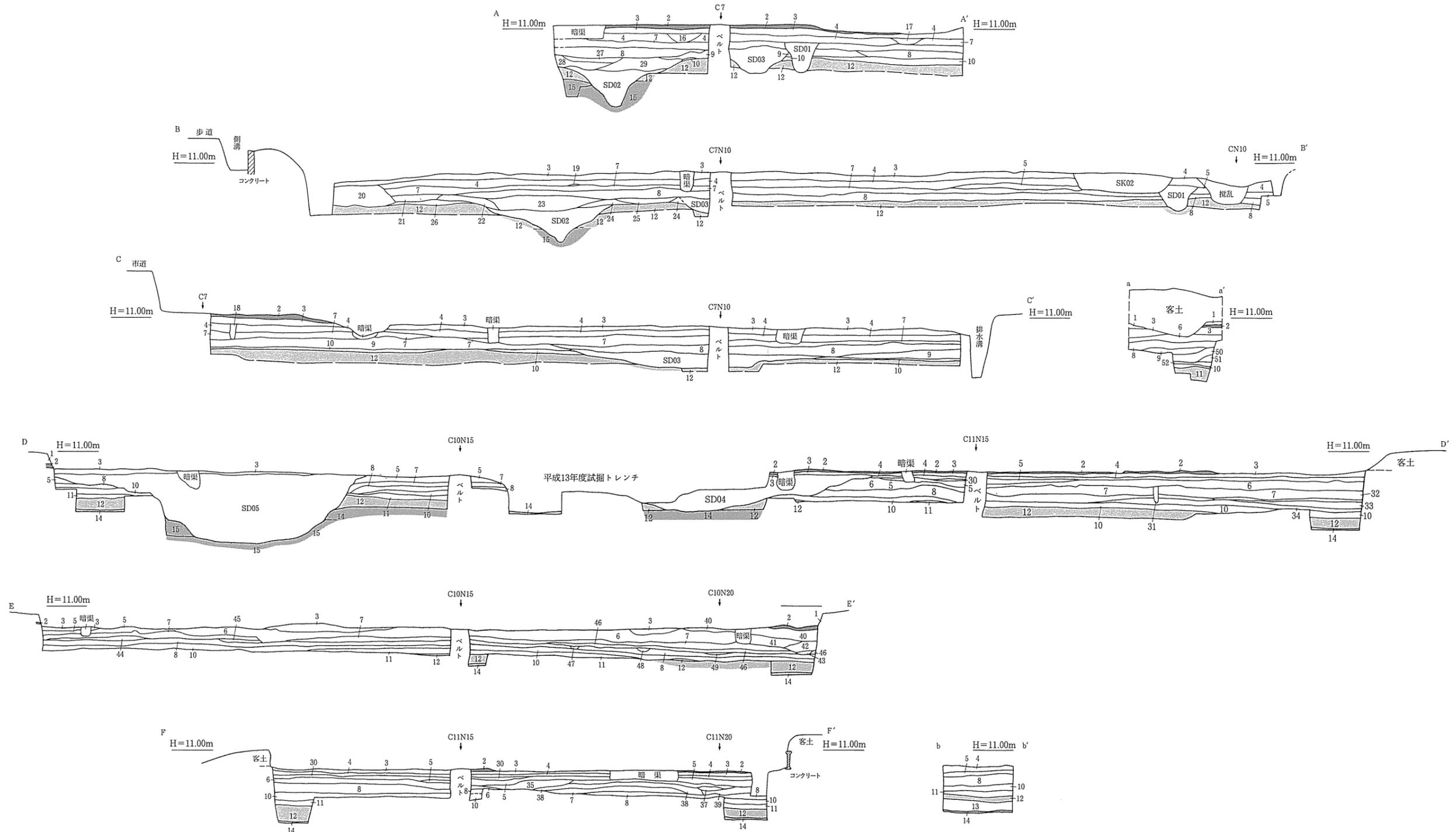


第2図 古郡家遺跡周辺遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)



- |  |  |
|--|--|
| <p>1 暗褐色粘砂質土 (0.5~5cm大の礫を含む。耕作土)</p> <p>2 にぶい黄褐色粘砂質土 (0.5~10cm大の礫を含む。耕作土)</p> <p>3 褐色粘質土 (0.5~2cm大の礫を含む。)</p> <p>4 灰黄褐色粘砂質土 (0.5~5cm大の礫及び土器片を含む。)</p> <p>5 灰黄褐色粘砂質土 (0.5~2cm大の礫を含む。4より暗。)</p> <p>6 にぶい黄褐色粘砂質土 (0.5~3cm大の礫を含む)</p> <p>7 黄褐色粘砂質土 (0.2~1cm大の礫を含む。明黄褐色土ブロック及び暗褐色土ブロックを含む)</p> <p>8 黄褐色粘砂質土 (7より明)</p> <p>9 褐色粘砂質土 (無機質分沈着。第6図第8層対応層)</p> <p>10 明黄褐色粘砂質土</p> <p>11 にぶい黄褐色粘砂質土</p> <p>12 褐色粘砂質土 (0.3~5cm大の礫を密に含む。第6図第9層対応層)</p> <p>13 にぶい黄褐色粘砂質土 (黄褐色土ブロック。褐色土ブロック及び暗褐色土ブロックを含む)</p> <p>14 黒褐色粘質土 (18より明)</p> <p>15 褐色粘砂質土 (24よりやや暗。0.2~1cm大の砂利層。褐色粘砂質土を含む)</p> <p>16 暗褐色粘質土 (25よりやや暗)</p> <p>17 黒褐色粘質土 (14よりやや明。第6図第10層対応層)</p> <p>18 黒褐色粘砂質土 (第6図第12層対応層)</p> <p>19 黒褐色粘質土</p> <p>20 にぶい黄褐色粘土 (2より明)</p> <p>21 褐色粘砂質土 (12より暗)</p> <p>22 にぶい褐色粘砂質土 (暗褐色土ブロックを含む)</p> <p>23 褐色粘砂質土 (にぶい褐色土ブロック及び暗褐色土ブロックを含む)</p> <p>24 褐色粘砂質土 (0.2~0.5cm大の小礫を含む)</p> <p>25 暗褐色粘砂質土 (黒褐色土ブロックを含む)</p> <p>26 暗褐色粘砂質土 (土器片及び褐色土ブロックを含む)</p> | <p>27 黒褐色粘質土 (18より明。土器細片を含む)</p> <p>28 褐色粘砂質土 (明黄褐色土ブロックを含む)</p> <p>29 にぶい黄褐色粘質土</p> <p>30 灰黄褐色粘砂質土 (0.2~0.5cm大の小礫。黄褐色土ブロック及び褐色土ブロックを含む)</p> <p>31 黒褐色粘質土 (褐色土ブロック及び2cm大の礫を含む)</p> <p>32 黒褐色粘質土 (31よりやや暗。褐色土ブロックを含む)</p> <p>33 灰黄褐色粘砂質土 (0.5~1.5cm大の礫を含む。SK-10埋土)</p> <p>34 褐色粘砂質土 (0.5~2cm大の砂利層。灰黄褐色土を含む。SK-10埋土)</p> <p>35 褐色粘砂質土 (34より暗。灰黄褐色土ブロック及び0.5~1.5cm大の礫を含む。SK-10埋土)</p> <p>36 黒褐色粘質土 (18より明。褐色土ブロックを多く含む。0.5~1cm大の礫を含む。SK-10埋土)</p> <p>37 黒褐色粘質土 (36よりやや明。褐色土ブロック及び0.5~1cm大の礫を含む。SK-10埋土)</p> <p>38 褐色粘砂質土 (0.5~1cm大の砂利層。灰黄褐色土を多く含む。SK-08埋土)</p> <p>39 黒褐色粘砂質土 (褐色土ブロック。褐色土ブロック及び0.5~1cm大の礫を含む。SK-08埋土)</p> <p>40 黒褐色粘質土 (36よりやや暗。SK-08埋土)</p> <p>41 灰黄褐色粘砂質土 (0.5~1.5cm大の礫を多く含む)</p> <p>42 浅黄褐色粘土</p> <p>43 黒褐色粘砂質土 (0.5~2cm大の礫及び土器片を多く含む)</p> <p>44 黄褐色粘質土</p> <p>45 にぶい黄褐色粘質土 (暗褐色土ブロック及び土器片を含む)</p> <p>46 にぶい黄色シルト (炭片及び1cm大の礫を僅かに含む)</p> <p>47 灰色シルト (第6図第5層対応層)</p> <p>48 褐色粘土 (第6図第13層対応層)</p> <p>49 灰色粘土 (第6図第15層対応層)</p> |
|--|--|

第3図 平成14年度調査区断面図 (S = 1 : 80)

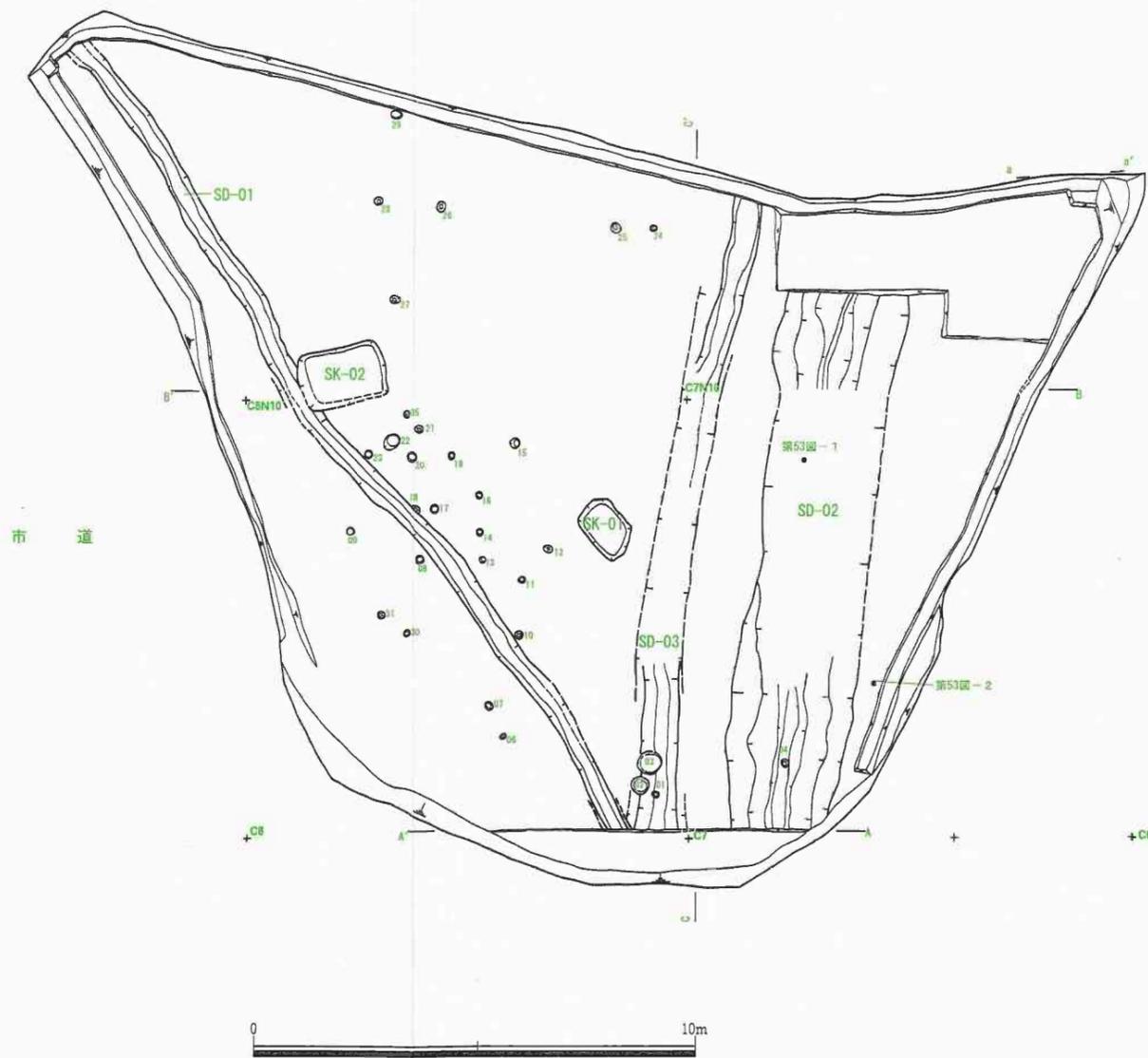
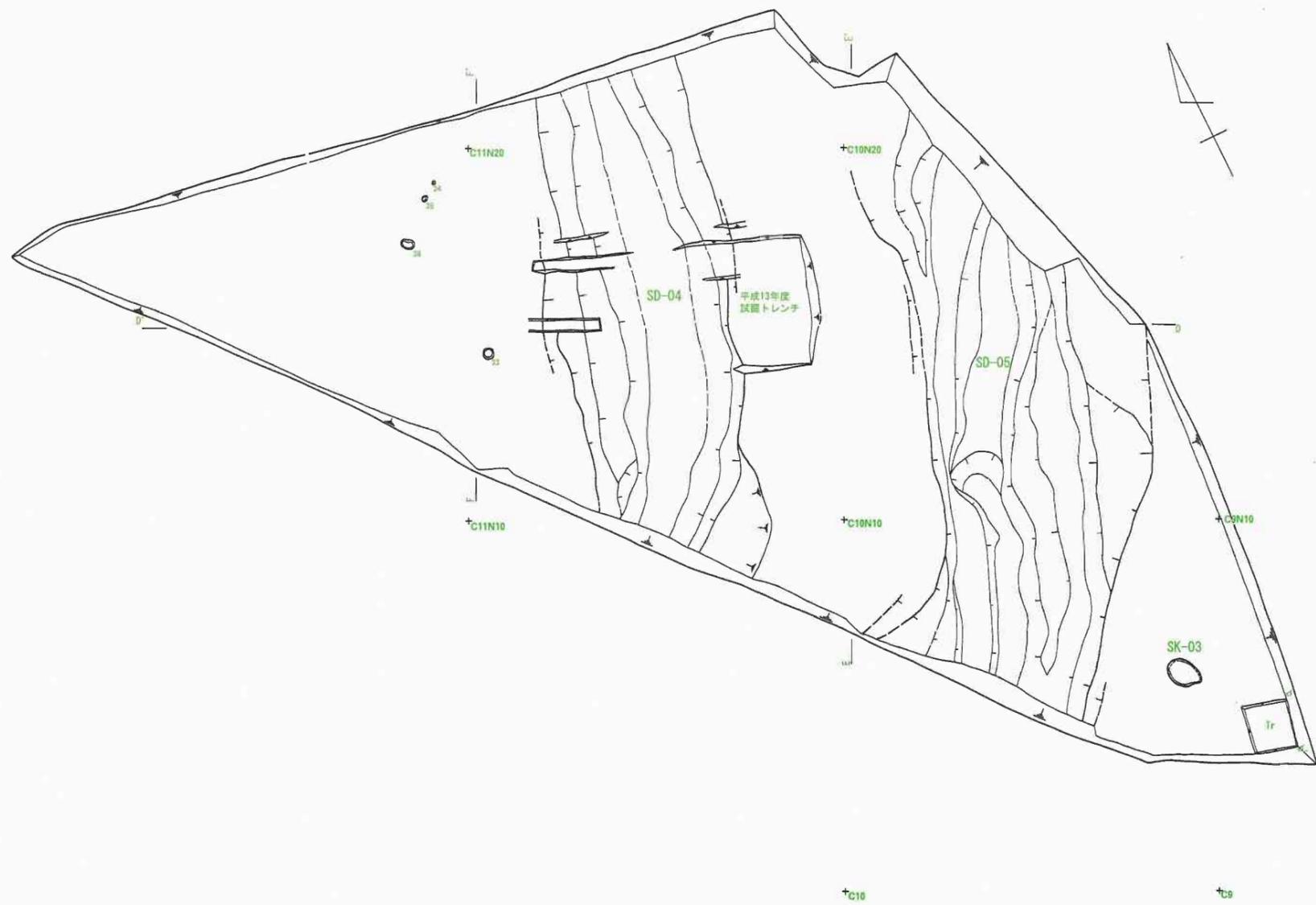


- |                                      |  |  |   |                                    |
|--------------------------------------|--|--|---|------------------------------------|
| 1 褐色粘質土 (耕作土)                        | 13 緑灰色粘土 (黒褐色粘土の混じりあり)                             | 24 褐灰色粘砂質土 (炭片を含む。砂と粘土の混じった層)              | 35 黄灰色シルト (0.2cm大の細砂を多く含む。砂質)               | 45 褐灰色砂 (0.2cm大の砂層。灰黄褐色シルトを含む)     |
| 2 褐灰色粘質土 (褐色の沈着有。床土)                 | 14 浅灰色粘質土 (黄褐色ローム)                                 | 25 灰黄褐色砂礫 (0.5~3cm大の砂礫層)                   | 36 黄灰色砂礫 (0.2~3cm大の砂礫層。しまる)                 | 46 褐灰色砂 (0.2~0.5cm大の砂層。灰黄褐色シルトを含む) |
| 3 黄褐色粘質シルト (明黄褐色かかる。褐色の沈着若干有)        | 15 緑灰色粘土 (13より明)                                   | 26 褐灰色粘砂質土 (やや褐色かかる)                       | 37 黄灰色シルト (やや粘質。褐色土を若干含む)                   | 47 褐色シルト (8より若干明。黄褐色土を若干含む)        |
| 4 黄褐色シルト (3より褐色の沈着大。褐灰色土を含む)         | 16 褐灰色粘質シルト  | 27 黄灰色シルト (やや粘質。褐色土を若干含む)                  | 38 黄灰色シルト (やや粘質)                            | 48 褐色シルト (8より明。0.2~1mm大の砂礫を含む)     |
| 5 灰褐色シルト (1~2cm大の砂礫を多く含む)            | 17 褐灰色シルト (0.5~1cm大の砂礫を多く含む)                       | 28 黄灰色砂 (27より暗。1mm大の砂層。3cm大の礫有)            | 39 灰黄褐色シルト (0.2~0.5cm大の砂礫を若干含む)             | 49 褐色シルト (8より若干明。黄褐色土を若干含む)        |
| 6 黄灰色砂礫 (0.5~6cm大の砂礫層。黄灰色粘質シルトを若干含む) | 18 灰褐色粘質シルト (炭片を含む。4・7より灰色かかる)                     | 29 赤~褐黄色 (1~4cm大の礫を多く含む。褐色シルトを含む)          | 40 黄褐色シルト                                   | 50 褐灰色シルト (わずかに褐色の沈着有。炭片を含む)       |
| 7 灰黄褐色シルト (褐灰色かかる。褐色の沈着有。4より砂質)      | 19 灰黄褐色砂礫 (0.5~1cm大の砂礫を多く含む)                       | 30 黄灰色粘質シルト (炭片を含む。0.5~8cm大の砂礫を若干含む)       | 41 灰褐色シルト (灰色かかる。0.5~1cm大の砂礫を多く含む)          | 51 灰色砂礫 (0.5~3cm大の砂礫を含む)           |
| 8 褐色シルト (褐色の沈着強。しまる)                 | 20 灰褐色砂礫 (0.5~8cm大の砂礫層。よくしまる。褐色シルトや砂を含まない。23より礫が密) | 31 灰色砂礫 (灰色シルトを含む)                         | 42 黄褐色シルト (0.2~1cm大の砂礫を含む。5cm大の礫有)          | 52 灰色粘土 (炭片を含む。暗灰色粘土を若干含む)         |
| 9 褐灰色砂礫 (0.5~6cm大の砂礫層)               | 21 灰褐色シルト  | 32 灰黄褐色砂礫 (0.5~1cm大の砂礫層。灰黄褐色シルトを含む)        | 43 黄灰色砂礫 (42より暗。0.2~3cm大の砂礫層。黄灰色シルトを含む。しまる) |                                    |
| 10 褐灰色粘土 (褐色の沈着若干有。シルト混じり)           | 22 褐灰色砂礫 (1~4cm大の砂礫層。褐色シルトを含む)                     | 33 黄灰色シルト (褐色の沈着若干有。やや粘質。わずかに0.3cm大の砂礫を含む) | 44 褐色シルト (8より黄色かかる)                         |                                    |
| 11 黒褐色粘土 (10より暗で粘質強)                 | 23 褐灰色砂礫 (0.5~5cm大の砂礫層。しまる。褐色シルトを含む)               |  |   |                                    |
| 12 黒褐色粘土 (混じりなし)                     |  |  |   |                                    |

第4図 平成15年度調査区断面図 (S=1:80)



第5図 平成14年度調査区全体図 (S = 1 : 150)



第6図 平成15年度調査区全体図 (S = 1 : 150)

## 第3章 調査の結果

### 第1節 平成14年度調査区と平成15年度調査区の立地と層序

古郡家遺跡は、鳥取平野南部、古郡家および久末集落の背後丘陵から北東へ舌状に延びる台地状の微高地を中心とした標高10.5～12m前後に展開する遺跡である。この微高地の東側には大路川が流れ、この大路川の堆積により形成された平野が北東に広がる。縄文遺跡として知られる大路川遺跡はこの大路川の自然堤防上に営まれた遺跡である。

今回調査を行った調査区は、この微高地の北東先端部、外縁付近にあたる。微高地の中央部分に県道八坂・正連寺線が通り、平成14年度調査区はこの県道東側から大路川との間の水田部を、平成15年度は県道西側のそれぞれ調査対象区域の調査を行った。平成15年度調査区は中央部を市道が通り、便宜上、県道から市道までの間を「市道東側調査区」、市道西側の調査区を「市道西側調査区」と呼称した。

平成14年度調査区は、調査前の地目は既に圃場整備を終えた水田で、調査前の標高は11～11.1mである。調査区内大路川寄りに設定された工事用センター杭No23を基点に、杭No24を見通したラインを基準ラインとし、10m毎に調査用測量杭（C1～C5杭）を設定した。層序の観察はこのC1～C5杭ラインに土層観察用の土手を設けて断面で行うとともに、調査区南西および北西部にテストピット（Tr1・Tr2）を掘り入れ下層層序の観察を行った。調査区は10cm程度の耕作土を鋤取りすると、大路川側のC1～C3杭の辺りまで圃場整備の際の客土とみられる礫混じりの第2～4層が広がり、調査区は北側辺の最大6m幅、調査区中央部を幅2mにわたる大規模な攪乱を受けていた。調査区東側は溝状遺構が錯綜する状態で検出され、その西側に掘立柱建物や井戸、土坑、中央部の攪乱部分は遺構密度が少なく、西側で再び掘立柱建物や土坑、ピットが群在する。遺構面としては二面が認められ、第6～11層上面の標高10.7～10.8m前後で第1遺構面、第16～20層上面の標高10.6～10.7m前後で第2遺構面を検出した。テストピット（Tr1・Tr2）を掘り入れた調査区西側では、地形が北西側へ下る様子が観察され、東側に比べ比較的安定した土層の堆積が観察される。Tr2第44層上面が第1遺構面とみられ、Tr1およびTr2に見られる第9層褐色粘砂質土（無機質分沈着）は特徴的な層で褐色の沈着が著しく、その下層の第12層礫層、漸移層において第18層黒褐色粘砂質土、第48層褐灰色粘土、第49層灰色粘土（緑灰色粘土）に対応する層序は平成15年度調査区においても確認された。

平成15年度調査区は、「市道東側調査区」、「市道西側調査区」ともに元々の地目は水田であるが、「市道東側調査区」は建造物建設の際、大規模な客土および整地を行っており、調査前は一面砂利が敷かれ標高11.2～11.6mを測る。平成14年度の調査状況から遺構が広がる標高10.8m程度まで重機による鋤取り予定であったが、予想外に客土が多く施され、厚さ30cmにも及ぶコンクリート基礎が内包する箇所や攪乱が耕作土下へ深く及ぶ部分もみられた。「市道東側調査区」は調査前の標高10.7～11mを測る。本格的に調査を始めるにあたり、平成14年度との整合性を考慮して、前年度設定した工事用センター杭No23からNo24を見通した基準ラインを延長してC8杭を復元（工事業者による）、それをもとに10m毎の方眼を設定した。層序の観察は、「市道東側調査区」はC1～C5杭ライン延長上のC7杭周辺と、それから10m北側のC6N10～C8N10杭ライン、それらと直交するC7～C7N15杭ラインで行い、「市道西側調査区」ではC9N15～C12N15杭ライン、それと直交するC10N6～C10N2杭およびC11N10～C11N20杭ラインで行った。層序の観察は、「市道東側調査区」は取り掛かり当初、調査区北東端で排水用の溜枘を深く掘り込み、その際断面の観察を行い、平成14年度での無機質分沈着した第9層やその下層の礫層、第18層の黒褐色粘土が「市道東側調査区」においても確認された。平成15年度の調査区は平成14年度の調査区に比べ全般的に低く、「市道東側調査区」では北東方向へ、「市道西側調査区」では北西方向へ地盤の下がり方が認められる。基本的な層序は、第1層耕作土、第2層床土、第3層黄

褐色粘質シルト、第4層黄褐色シルト、第5層灰褐色シルト、第6層砂礫層、第7層灰黄褐色シルト（褐色の沈着弱）、第8層褐色シルト（褐色の沈着強）、第9層砂礫層、第10層褐灰色粘土（褐色の沈着微、シルト混じり）、第11層黒褐色粘土（10より暗で粘質強、締まる）、第12層黒褐色粘土（黒色粘土、混じりなし）、第13層緑灰色粘土、第14層浅黄色粘質土（黄褐色ローム）、第15層緑灰色粘土である。このうち第4層上面が平成15年度における第1遺構面で古墳時代後期、第5層上面が第2遺構面で古墳時代中期、第7層上面が同じく古墳時代中期、第9・10層が弥生時代中期面と考えられる。

平成15年度調査区は平成14年度調査区と比較すると、比較的安定した層序が観察される。それに対し、平成14年度の特に大路川寄りでは遺構面となる基盤が複雑な堆積で、同一面の検出であっても時期が異なることや遺構の遺存状況などからも、各期において流失および削平を繰り返したと考えられる。また、平成15年度第13および15層に対応する灰色粘土層がS D-03の壁面で確認され一部第12層に対応するとみられる黒褐色粘土層も薄くわずかながら観察されていることから、その黒褐色粘土の対応層の各調査区における状況から、大路川寄りで地盤が高く徐々に北西側へ下り、特に「市道西側調査区」でそれは顕著となる状況が明らかである。遺構密度などからも、大路川の自然堤防上が最も活用されてきた状況が層序から推察される。

## 第2節 平成14年度の調査

### 1. 掘立柱建物

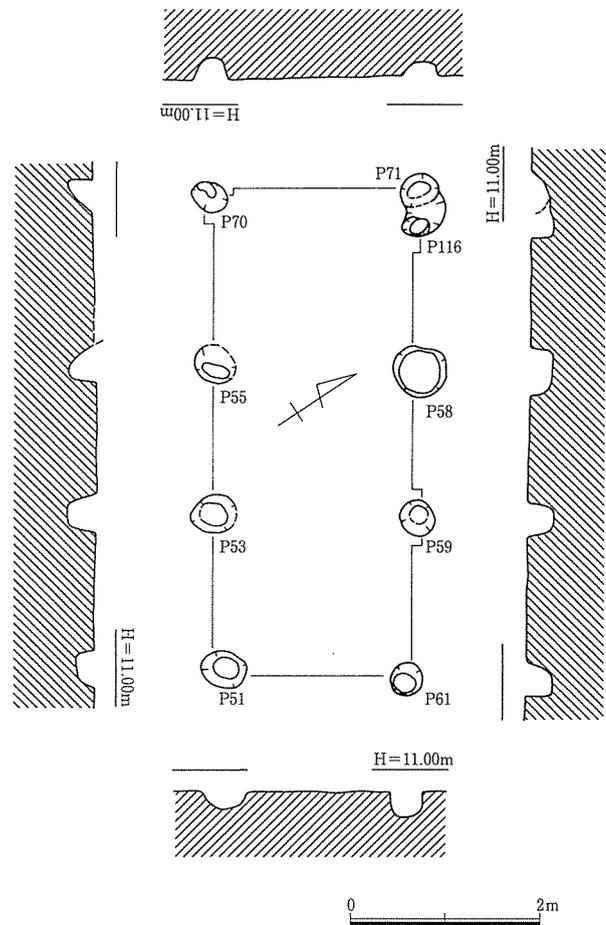
#### SB-01（第5・7図、図版4）

調査区中央北西寄り、C2S10杭北西の標高10.77mで検出した。北東端でSB-04と切り合う。桁行3間、梁行1間の建物である。主軸はN-57°-Wを振る。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が5.20m、梁行1間が2.15mを測る。建物面積は11.2㎡である。柱間寸法は桁行が1.98~1.52m、梁行が2.15~1.96mを測り、平均すると桁行1.73m、梁行2.09mである。柱穴の平面形はすべて円形および楕円形で、現状で径35~56cm、深さ16~30cmを測る。土層断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も認められる。P53では径13cm程度、P58では15cm程度である。

遺物はP51、53、58、59、70でいずれも埋土から土器細片が出土している。

#### SB-02（第5・8図、図版4）

調査区中央南東寄り、C4杭周辺の標高10.72mで検出した。北側一帯は大規模な攪乱により不明であり、更に北東へ延びる可能性をもつ。現況で桁行2間、梁行1間の建物である。主軸はN-34°-Eを振る。建物の平面形は北東へ延びた場合長方形を呈するが、桁行2間で終わった場合正方形となる。桁行2間が3.00m、梁行1間が3.00mを測る。建物面積は9.0㎡以上が考えられる。柱間寸法は桁行が1.40mと1.60m、



第7図 平成14年度SB-01実測図（S=1:80）

平均すると桁行1.53mとなり、梁行が3.00mを測る。柱穴の平面形はすべて円形および楕円形で、現状で径32～49cm、深さ22～44cmを測る。土層断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も認められる。P107で径13cm程度、P219で9cm程度である。

遺物はすべての柱穴の埋土から土器細片が出土しており、P105では古墳時代中後期の土師器片、P107から須恵器高杯細片、土師器赤彩高杯片がみられる。

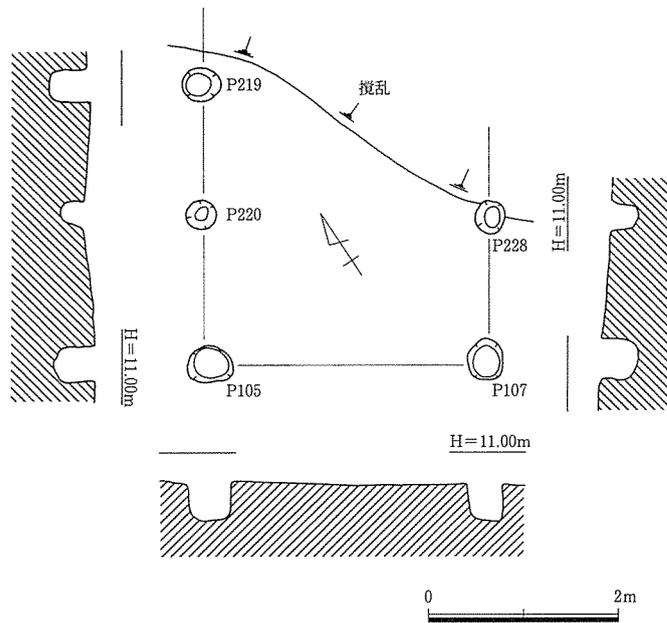
#### SB-03 (第5・9図、図版4・5)

調査区南西端、C5S10杭北西の標高10.75mで検出した。南側一帯は崩落を考慮して未調査であり、更に南西へ延びる可能性をもつ。現況では主軸をN-32°-Eへ振る桁行2間、梁行1間の長棟建物であるが、柱根をもつP180を考慮すると、主軸をN-57°-Eに振る桁行2間、梁行2間の建物が想定され、場合によっては総柱建物の可能性も考えられる。建物の平面形は南西へ延びた場合正方形に近く、桁行2間が3.30m、梁行2間が3.15mを測る。建物面積は10.4m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行が1.55～1.60m、平均すると桁行1.62mとなり、梁行が1.55mと1.60m、平均すると桁行1.58mを測る。柱穴の平面形はすべて円形および楕円形で、現状で径34～47cm、深さ21～39cmを測る。P180、193、209で径10cm弱の柱根が遺存し、土層断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も認められる。

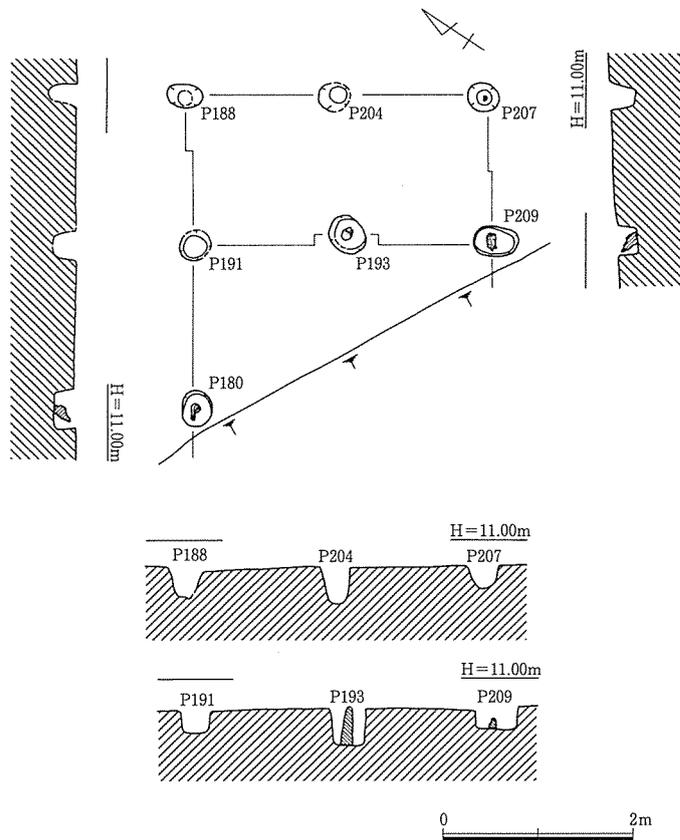
遺物はP180、191、204、207、209でいずれも埋土から土器細片が出土している。このうちP191、204では古墳時代中後期の赤彩高杯片、P207では置竈片が認められる。

#### SB-04 (第5・10図、図版5)

調査区中央南東寄り、C2S10杭北側の標高10.75mで検出した。南西端でSB-01と切り合う。また、西側の桁行に沿って上層でSD-09が検出されている。桁行2間、梁行1間の建物である。主軸はN-15°-Eを振る。建物の平面形は長方形を呈



第8図 平成14年度SB-02実測図 (S=1:80)



第9図 平成14年度SB-03実測図 (S=1:80)

し、桁行2間が3.50m、梁行1間が2.90mを測る。建物面積は10.2m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行が1.65～1.80mで平均すると桁行1.74m、梁行が2.90mである。柱穴の平面形はすべて円形および楕円形で、現状で径40～75cm、深さ37～55cmを測る。P125以外は三日月状のテラス部をもち一段深くなる掘り方である。土層断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も認められ、P240では径13cm程度である。

遺物はP62、64、119、125、127でいずれも埋土から土器細片が出土している。このうちP64では弥生土器甕および蓋片、P127では鼓形器台片が出土している。

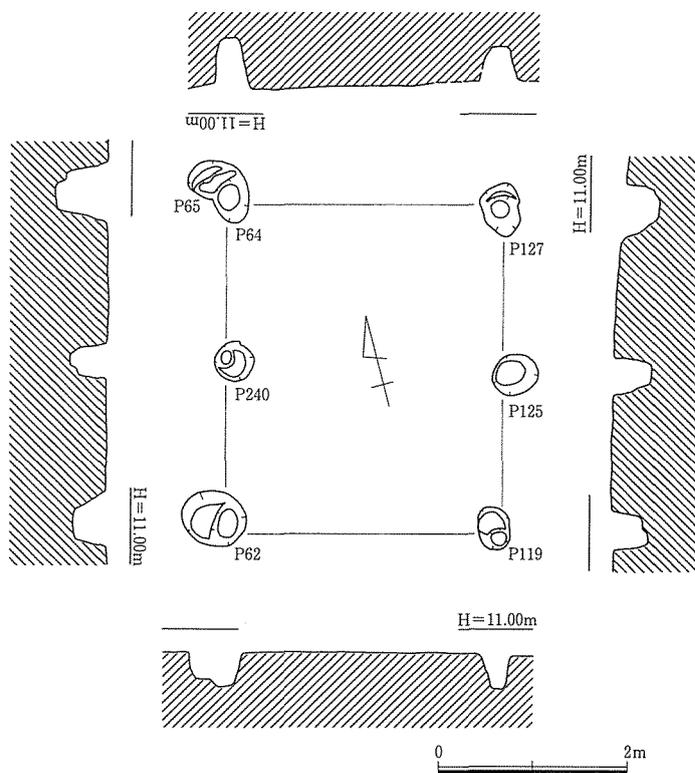
## 2. 井戸

### SE-01 (第5・11図、図版6・7・25)

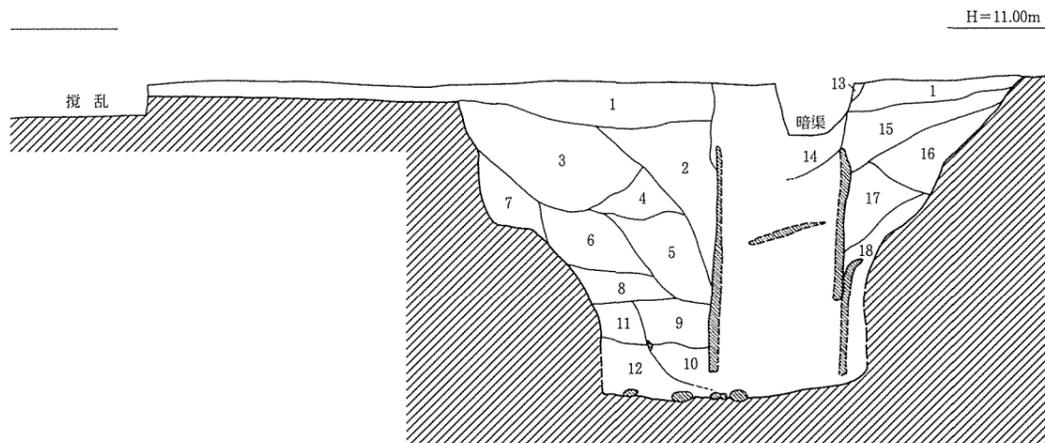
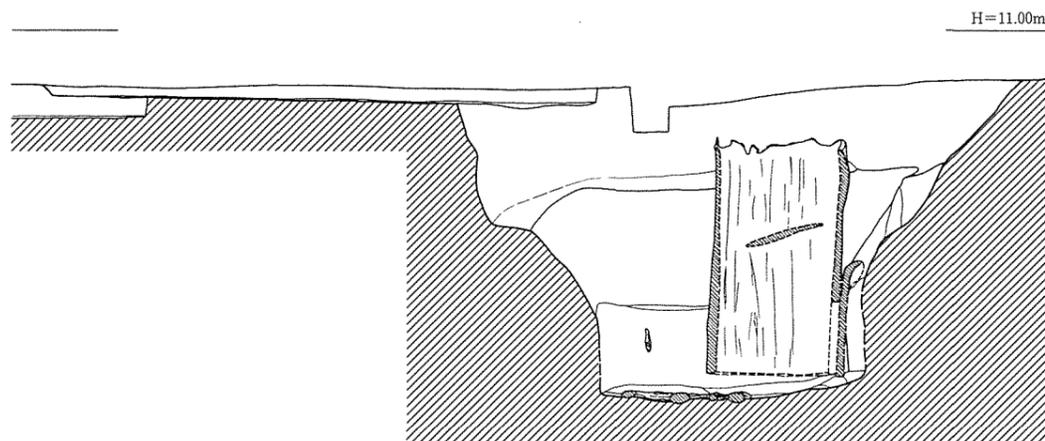
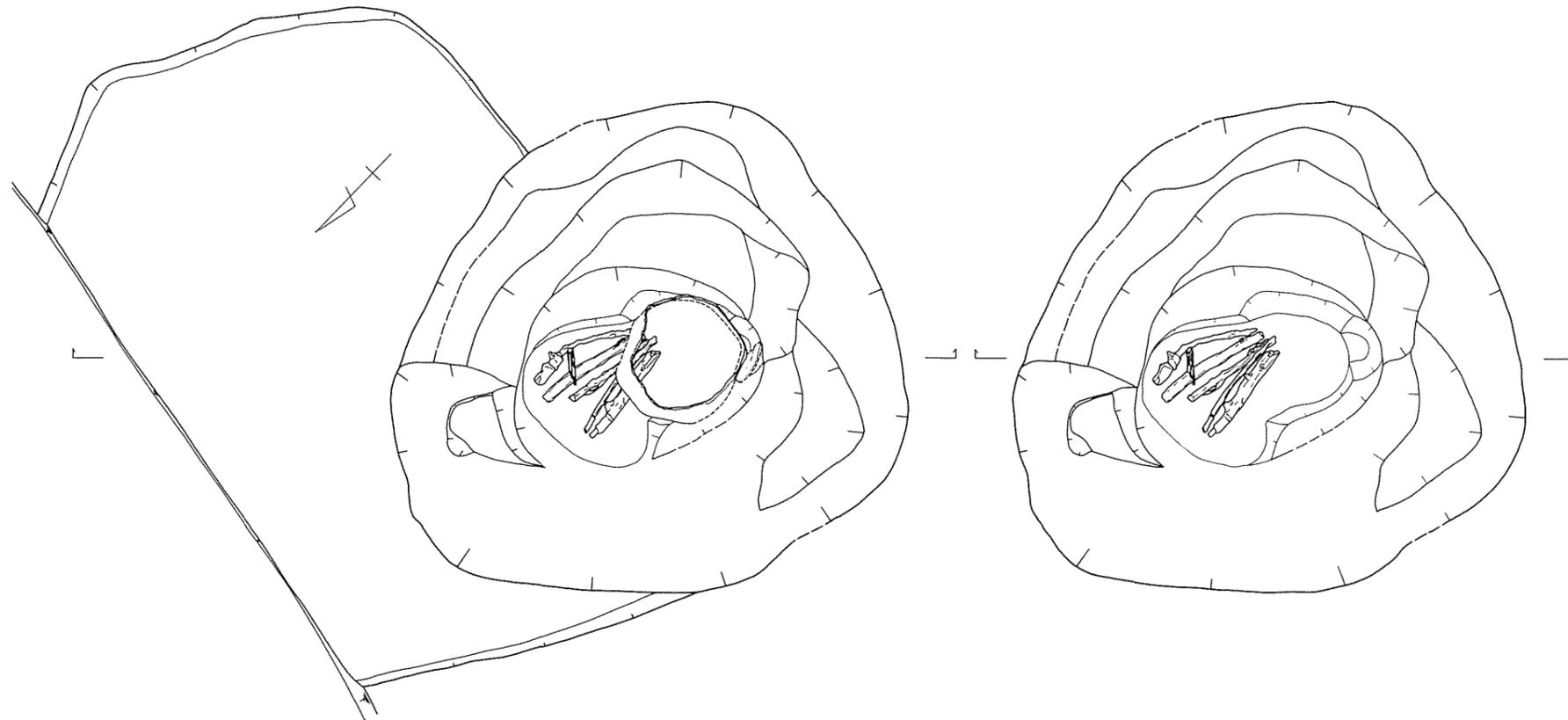
調査区中央北寄り、C3杭周辺に位置する。標高10.72mで検出した。東2.5mにSK-08が配置する。平面はやや北側が広がる不整形円形を呈し、長軸3.33m、短軸3.16mを測る。検出面からの深さ1.78mを測る。井戸掘り方は段掘りを行い、検出面から80cm程度下った位置にテラスを設け、更に65cm下った位置にも三日月状のテラスを部分的に設ける。底面はほぼ平坦で、長軸1.5m、短軸1.3mを測り、底面の標高8.92mである。湧水層に達し、黒褐色粘質土、にぶい黄褐色粘土(黄褐色ローム)、灰オリーブ粘土を掘り抜く。灰オリーブ粘砂質土の底面北寄りには井戸側とほぼ直交するように並べた自然木5本が認められる。直接接してはいないが井戸側の沈下防止用とみられる。井戸側は底面から10数cm上位、第10層中に西壁に接するように設置される。第10層は2cm大の礫を蜜に含み浄水の機能を合わせもつ。井戸側は常緑広葉樹「タブノキ」の一本で、樹皮はなく外径75cm、外壁4～7cm程度の厚さに削り抜かれ、高さ1.34mが遺存する。下位西側では一部破損(?)部分が外側から別片によって覆われており、そのすぐ北側に方形のほぞ穴が観察された。なお、この井戸側は業者委託により保存処理が行われている。井戸側上部に観察される第14層黒褐色粘土層から、井戸側は更に立ち上がるが腐植したかあるいは井桁の存在が想定される。

井戸側内部埋土には多量の遺物を含み、井戸側の丸太材を除きコンテナ4箱分に相当する量が出土している。井戸側下層に到るまで、古墳時代中後期、前期、弥生時代後期後半の遺物が混在する状況である。図化した(1)～(10)の遺物のうち、井戸側内標高9.40～9.18mの地点で出土したのが(1)(5)～(9)、9.18mより下層が(2)(3)、井戸側より下層の底面付近で出土したのが(4)(10)である。井戸側より下層の底面付近では土器1袋分が出土しているが、いずれも2～3cm程度の細片であり、図化した(4)(10)以外に時期的には弥生時代後期後半の土器数点を含むが主に古墳時代前期と中期の土器から成

し、桁行2間が3.50m、梁行1間が2.90mを測る。建物面積は10.2m<sup>2</sup>である。柱間寸法は桁行が1.65～1.80mで平均すると桁行1.74m、梁行が2.90mである。柱穴の平面形はすべて円形および楕円形で、現状で径40～75cm、深さ37～55cmを測る。P125以外は三日月状のテラス部をもち一段深くなる掘り方である。土層断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も認められ、P240では径13cm程度である。



第10図 平成14年度SB-04実測図 (S=1:80)

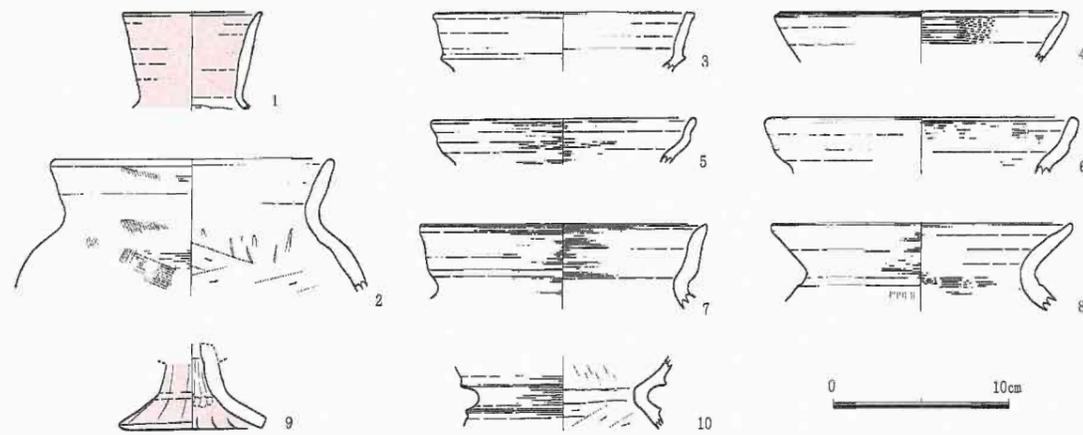


- 1 黒褐色粘砂質土 (褐灰色土ブロック。1~3cm大の礫及び土器片を密に含む)
- 2 黒褐色粘砂質土 (1よりやや暗。にぶい黄橙色粘土ブロック・炭片及び土器片を含む)
- 3 黒褐色粘砂質土 (褐灰色土ブロック。にぶい黄橙色粘土ブロック及び土器片を含む。褐色無機質分沈着)
- 4 褐灰色粘質土 (にぶい黄橙色粘土ブロック及び黒褐色粘土ブロックを含む)
- 5 黒色粘質土 (灰白色粘土ブロックを僅かに含む)
- 6 黒褐色粘質土 (3より暗。灰白色粘土ブロックを僅かに含む)
- 7 黒褐色粘質土 (3より暗く6よりやや明。にぶい黄橙色粘土ブロックを多く含む)
- 8 黒褐色粘土 (6よりやや明。灰オリブ粘土ブロックを多く含む)
- 9 黒褐色粘土 (8よりやや暗。灰オリブ粘土ブロックを僅かに含む)
- 10 黒褐色粘砂質土 (2cm大の礫を密に含む)
- 11 黒褐色粘土 (8よりやや明。灰オリブ粘土ブロックを密に含む)
- 12 黒褐色粘土 (9.10.11よりやや明。灰オリブ粘土ブロックを多く含む)
- 13 黒褐色粘砂質土 (1よりやや明。0.5~2cm大の礫及び土器片を多く含む)
- 14 黒褐色粘土
- 15 黒褐色粘砂質土 (1~3cm大の礫を含む)
- 16 黒褐色粘質土 (にぶい黄橙色粘土ブロックを多く含む)
- 17 黒褐色粘質土 (灰オリブ粘土ブロックを密に含む)
- 18 黒褐色粘土 (17よりやや暗)

第11図 平成14年度 SE-01 実測図 (S = 1 : 20)

り、割合的には古墳時代前期がやや上回る。壺口縁部(1)は赤彩時の塗彩痕が観察され、甕(2)は頸部のヨコナデにより複合口縁的な名残りが感じられるがぼつてりした作りである。甕口縁部(3)は乳白色かかり短い複合口縁ながら厚手でしっかりした平坦面をもつ。内面が比較的鋭利に肥厚する甕(4)は口縁部上端面から内面にかけてハケ目を施し後のヨコナデはみられない。甕口縁部(5)(6)は短く中央が凹む複合口縁で内外面に横ハケ目後ヨコナデが施される。甕(7)は頸部の強いヨコナデにより厚手の複合口縁となるが、部分によってはく字状口縁となる可能性をもつ調整である。(8)は上外方へ引き伸ばされ先細りとなるく字状口縁で頸部にハケ目工具痕が観察される。高杯脚部(9)は短脚で八字状に短く開き脚柱部外面に面取り状のナデが観察される。鼓形器台(10)は接合部推定径9.5cmを測りしっかりした稜をもつ。外面はヨコナデされハケ目痕が観察される。

井戸の時期については、井戸側上層の第14層が掘り込む第1層黒褐色粘砂質土層は調査区断面第43層(第3図)に対応し、S K-08埋没後に形成された層とみられる。S E-01の北東側上面に広がるこの層中には弥生時代後期および古墳時代中期の遺物を包含しており、このことから古墳時代中期以降の年代が与えられよう。なお、S E-01の北側にP 241、南東にP 85が配置する。両者を結ぶラインはS E-01の北東端を通り、覆屋を構成する柱穴の可能性を残すものの、柱間は5.70m、P 241の底面の標高は10.16m、P 85は10.56mを測る。



第12図 平成14年度S E-01出土遺物実測図

### 3. 土坑

#### SK-01 (第5・13図、図版8)

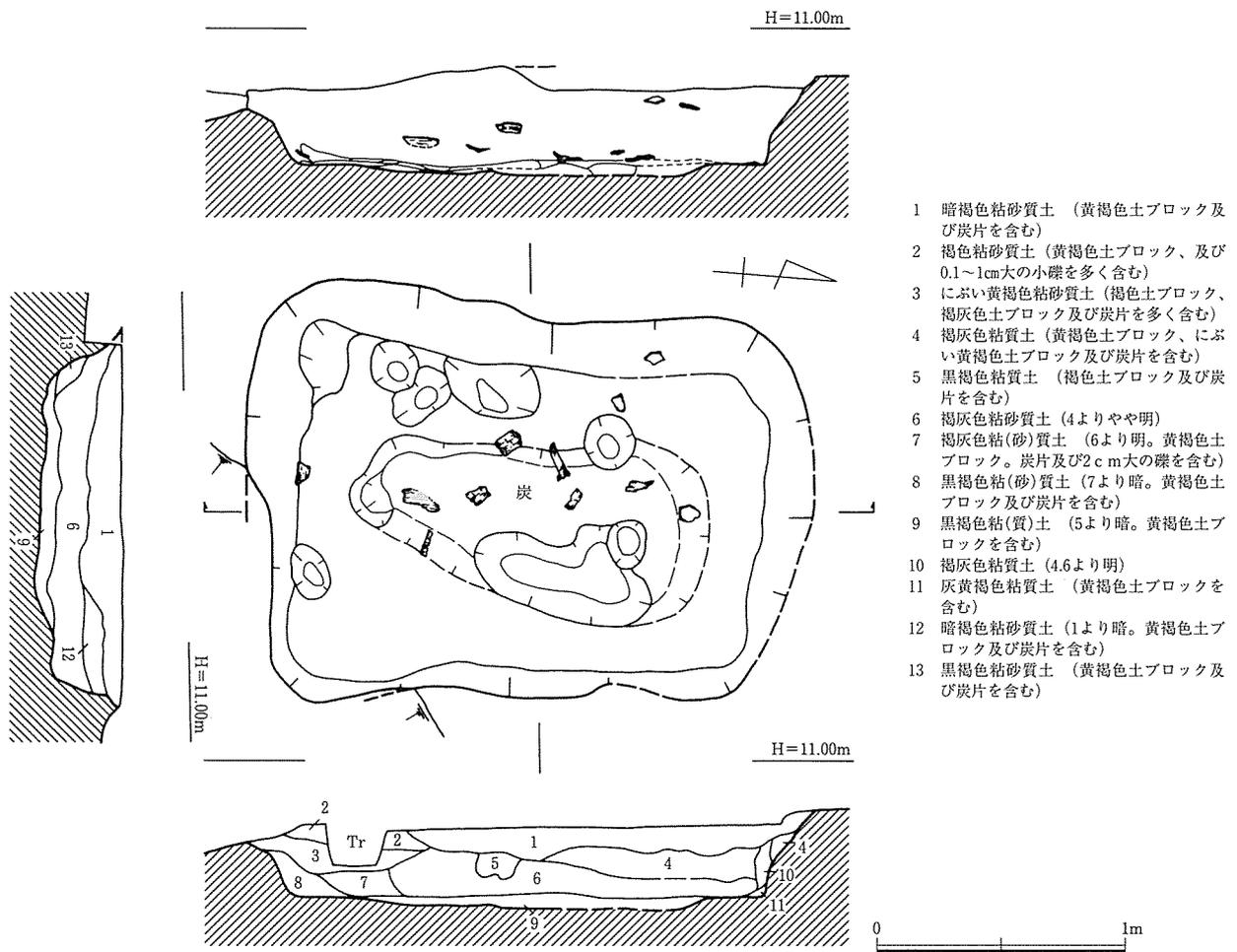
調査区南東、C1S10杭西に位置する。標高10.84mで検出した。南東隅にSD-02が重なる。南東50cmに同様な形態のSK-02が配置する。平面は隅丸長方形を呈し、長さ2.27m、幅1.70mを測る。主軸はN-3°-Wを振る。断面は不整な逆台形となる。底面は西側を中心にピット状の丸く浅い窪み、中央部が深さ6cm程度の不整な長楕円形に窪み、その上層第6～8層を中心として炭化材が出土している。検出面からの深さ35cm、底面は標高10.39mを測る。埋土は13層に分かれ褐灰色粘砂質土が主体となる。

遺物は土器細片が数袋出土しており、埋土上層から弥生時代後期の鼓形器台片が、その他埋土からは同期の甕口縁部片が出土している。

#### SK-02 (第5・14・15図、図版8・25)

調査区南東、C1S10杭南西に位置する。標高10.78mで検出した。西側でSD-02が、東側上層にSD-06が重なる。南東50cmに同様な形態のSK-01が配置する。平面は隅丸長方形を呈し、長さ2.38m、幅1.90mを測る。主軸はN-79°-Wを振る。断面は不整な逆台形となる。底面はやや凹凸がみられるもののほぼ平坦で、東壁寄りに深さ10cm程度のピット状の丸く窪みが検出された。検出面からの深さ36cm、底面は標高10.40mで窪み部分で最深10.33mを測る。埋土は9層に分かれ褐灰色粘砂質土が主体となる。

遺物は土坑中央北側で炭化材が出土しており、その周辺や埋土中からコンテナ約4分の1に相当する量が出土している。SD-02に帰属するものか弥生時代中期の土器を若干含むものの概ねSK-01同様の



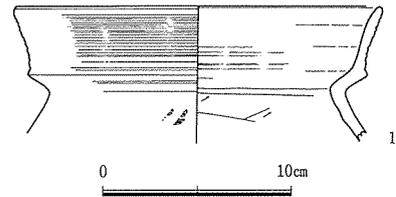
第13図 平成14年度SK-01実測図 (S=1:30)

弥生時代後期の甕、底部片などであった。図化した甕(1)は南東部埋土の出土で、やや上外方へ伸びた口縁部外面に貝殻腹縁によるとみられる多条の平行沈線を施す。頸部外面はヨコナデするが同様の条痕が観察される。肩部外面に押し刺突文が観察される。

**SK-03** (第5・16図、図版8)

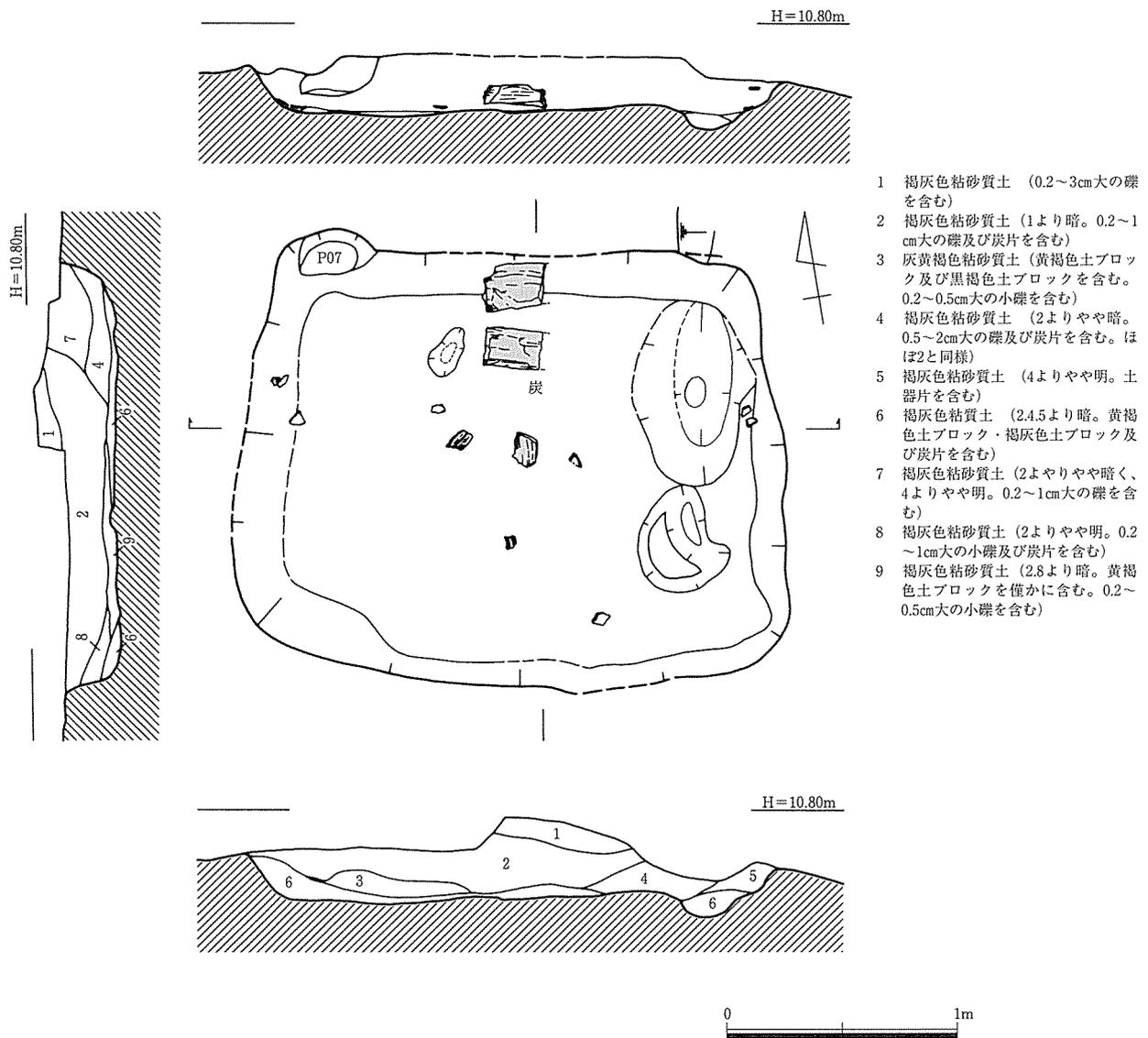
調査区中央やや東寄り、標高10.72mで検出した。南西側に同様な形態、軸をとるSK-04、05が配置する。平面は南西側がやや尖る長楕円形を呈し、長さ1.42m、幅0.90mを測る。主軸はN-47°-Wを振る。北西端は掘り過ぎである。横断面は不整な椀形となる。検出面からの深さ19cm、底面は標高10.52mを測る。埋土は2層に分かれ、上層から暗褐色と黒褐色粘質土である。

遺物は土器胴部片と第1層から径14.5cmの弥生器台口縁部片が出土している。

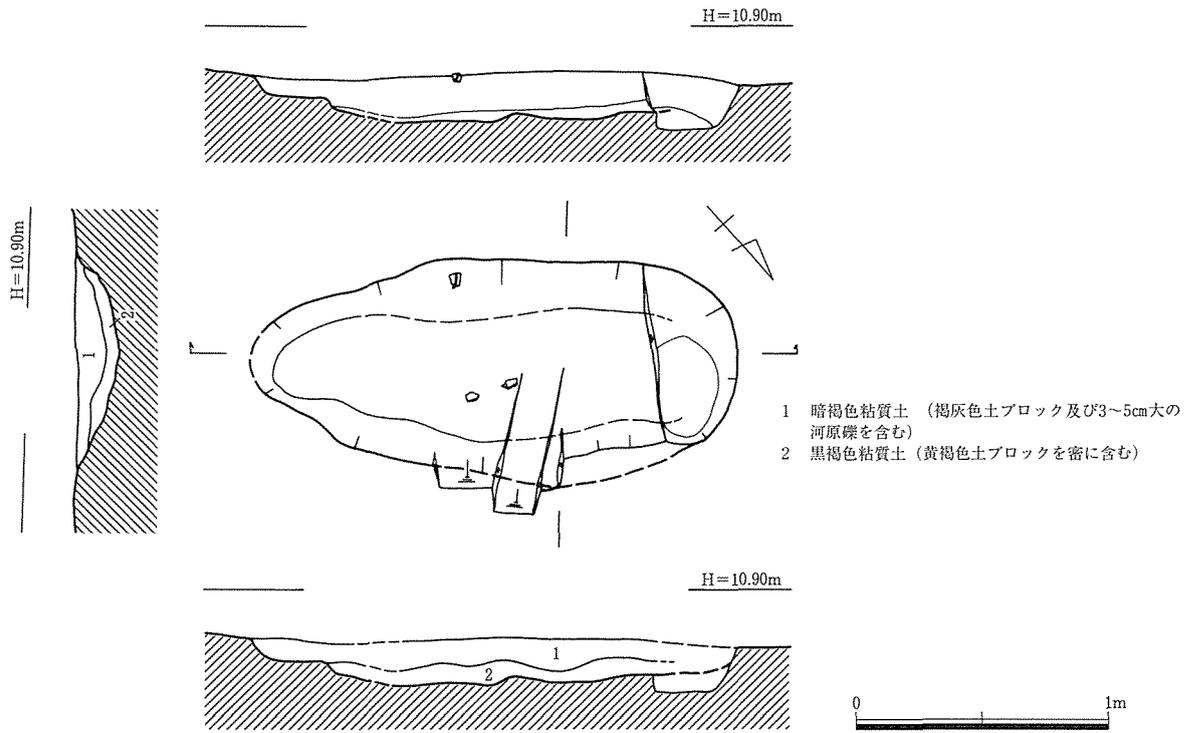


**SK-04** (第5・17図、図版8)

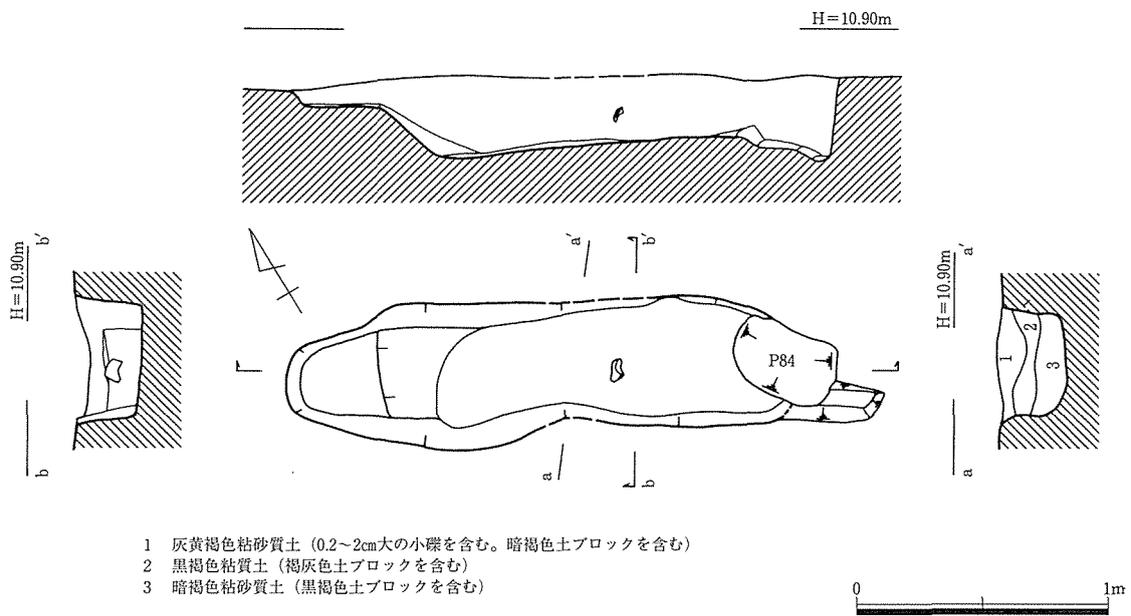
調査区中央やや東寄り、標高10.73mで検出した。東1.5mと南西1mに同様な形態、軸をとるSK-03、05が配置する。第15図 平成14年度SK-02出土遺物実測図



第14図 平成14年度SK-02実測図 (S=1:30)



第16図 平成14年度 S K-03実測図 (S = 1 : 30)



第17図 平成14年度 S K-04実測図 (S = 1 : 30)

平面は南西側がやや膨らむ長楕円形を呈する。東端はP84に切られるが、長さ2.00m、幅0.57mを測る。主軸はN-59°-Wを振る。西端で30cm弱の平坦面をもちそこから東側底部へ20cm弱深くなる。横断面はやや不整な逆台形となる。検出面からの深さ34cm、底面は標高10.36mを測る。埋土は3層に分かれ、上層から灰黄褐色粘砂質土、黒褐色粘質土、暗褐色粘砂質土である。

遺物は僅かに土器胴部細片と第2層から底径9.2cmの弥生平底部片が出土している。

#### SK-05 (第5・18図、図版9)

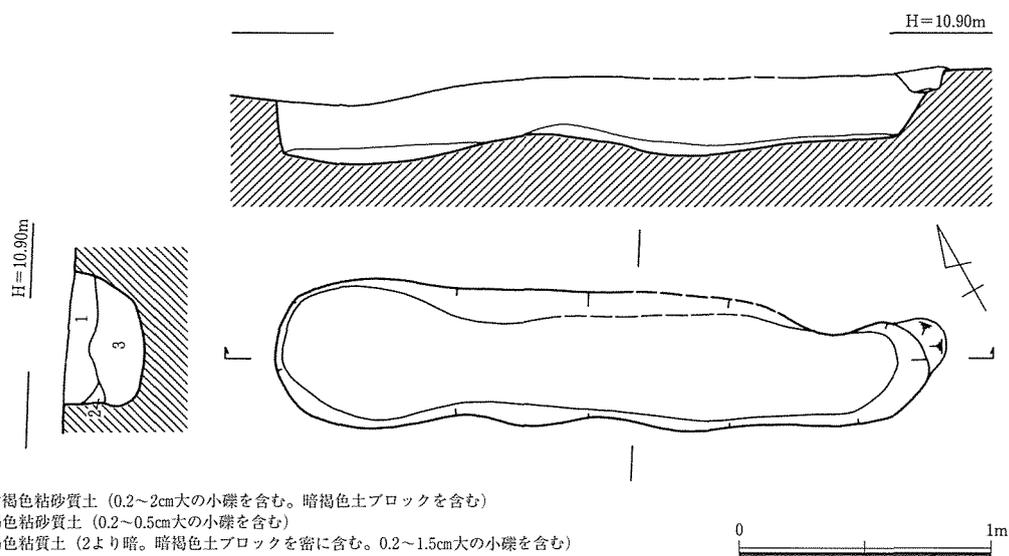
調査区中央やや東寄り、標高10.76mで検出した。北東側に同様な形態、軸をとるSK-04、03が配置する。平面は南西側がやや膨らむ長楕円形を呈し、長さ2.54m、幅0.60mを測る。主軸はN-59°-Wを振る。東端はやや掘り過ぎとなる。横断面は不整な椀形で、底面は中央部がやや浅くなる。検出面からの深さ31cm、底面は標高10.38mを測る。埋土は3層に分かれ、上層から上層から灰黄褐色粘砂質土、黒褐色粘砂質土、黒褐色粘質土である。

遺物は僅かに土器胴部細片が出土している。

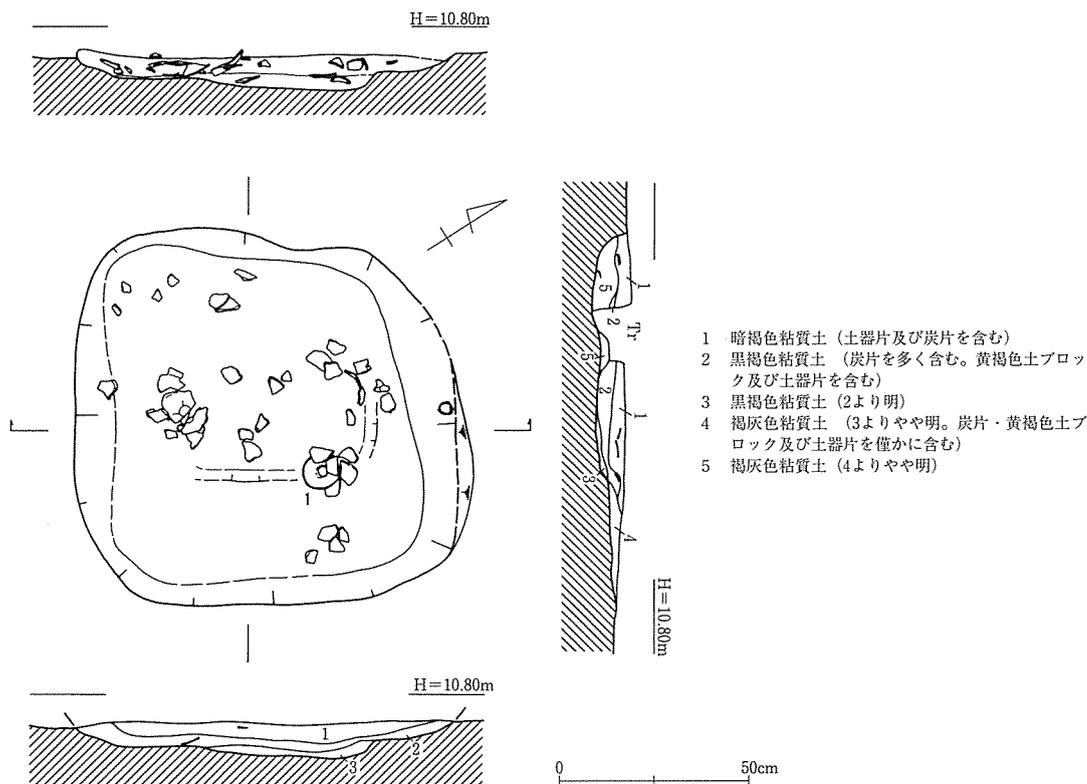
#### SK-06 (第5・19・20図、図版9・25)

調査区南西側、C4杭南西に位置する。標高10.74mで検出した。平面はやや不整ながら隅丸方形を呈し、長さ、幅とも1.01mを測る。底面から見た主軸はN-57°-Wを振る。底面は中央部から北西壁側にかけて5cm程度窪み、断面は不整な皿状となる。検出面からの深さ9cm、底面は標高10.63mを測る。埋土は5層に分かれ、暗褐色、黒褐色、褐灰色粘質土で構成される。中間層にあたる第2層黒褐色粘質土に炭片を多く含む。

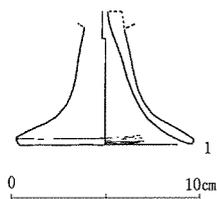
遺物は4層を除くいずれの層からも出土しており、弥生土器などの混入が比較的みられない。コンテナ5分の1程度の量である。上端部が内側に肥厚するく字状の甕口縁部、赤彩された椀形高杯、胴部片があり、甕と高杯から構成される。図化した高杯脚部(1)は脚柱基部径2.1cmと小さく脚裾へむけて滑らかに開く形態である。脚径9.2cmを測る。外面を中心に赤彩される。脚裾内面はハケ目調整され明瞭な指おさえは観察されない。脚柱部内面もヘラ削り処理され丁寧な作りである。



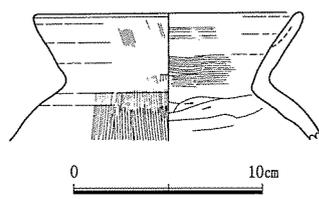
第18図 平成14年度SK-05実測図 (S=1:30)



第19図 平成14年度 S K-06実測図（S = 1 : 20）



第20図 平成14年度 S K-06出土遺物実測図

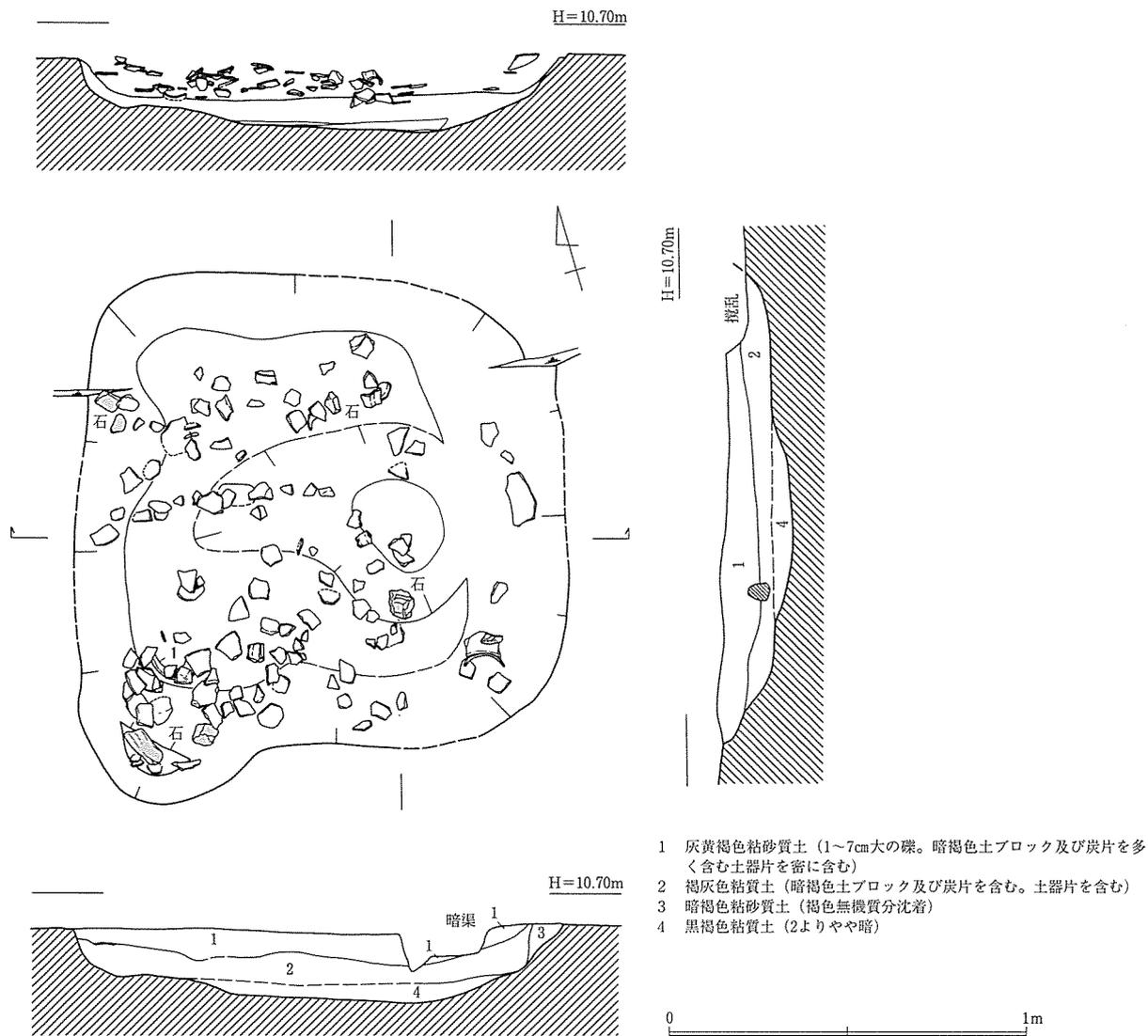


第21図 平成14年度 S K-07出土遺物実測図

S K-07（第5・21・22図、図版9・25）

調査区中央北東寄り、C2杭北西に位置する。標高10.59mで検出した。平面は南西端が突出するものの不整隅丸方形を呈し、長さ1.38m、幅1.33mを測り、突出部を含めた長さは1.48mである。主軸はN-16°-Eを振る。底面は中央東壁寄りが7cm程度窪み、断面は不整な椀状となる。検出面からの深さ19cm、底面は標高10.38mを測る。埋土は4層に分かれ、第1層灰黄褐色粘砂質土に炭片を多く含む。

遺物から土坑全域の第1、2層中から出土しており、中でも南西突出部付近に集中する傾向がある。コンテナ約1箱程度の量である。小形赤彩壺、甕、高杯、角礫が見られる。甕は上端部が内側に肥厚するく字状の口縁と（1）のようなく字状の単純口縁とが半々程度の割合である。高杯は有段高杯と椀形高杯とが認められともに赤彩される。小形赤彩壺は量的には少なく含まれる程度のものである。この他に混入とみられる古墳時代前期の複合口縁甕片が微量みられる。図化した甕（1）はやや厚手のく字状口縁部で、口縁上位の引き伸ばしはみられずそのまま丸くおさめる。肩部外面縦ハケ目、内面口縁部横ハケ目後上位はヨコナデ調整する。

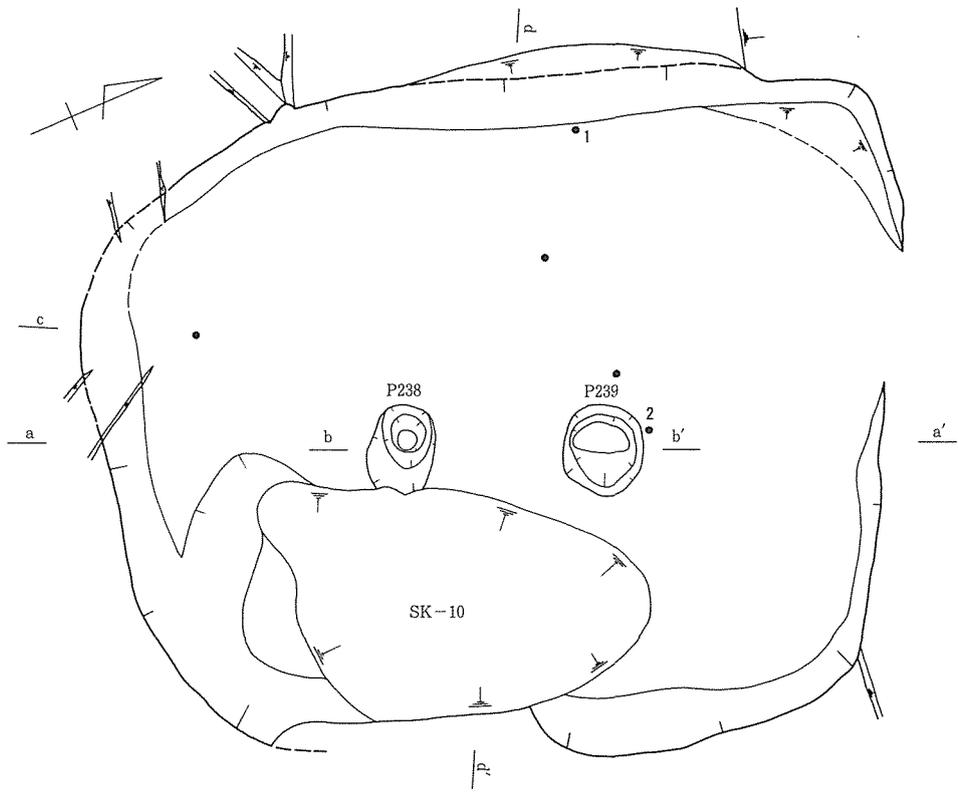


第22図 平成14年度SK-07実測図 (S=1:20)

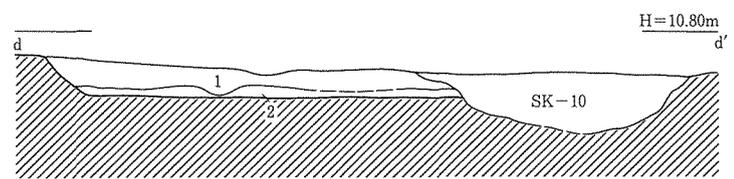
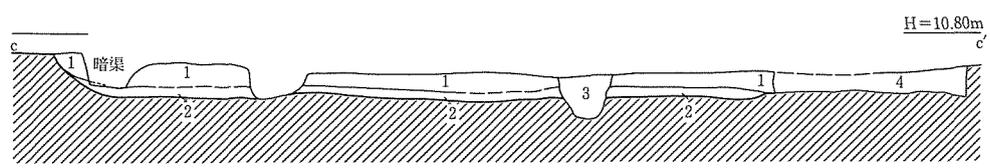
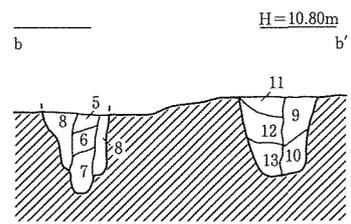
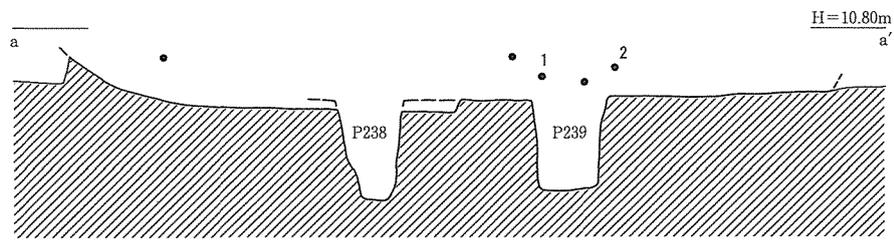
SK-08 (第3・5・23・24図、図版10・11・25)

調査区中央やや北東寄り、C2杭北西に位置する。標高10.69mで検出したが、調査区断面(第3図)では第7層黄褐色粘砂質土下の標高10.67mまで遺構の上場は立ち上がる。南東側をSK-10に、東壁の一部を集石遺構に切られる。平面は不整ながら隅丸長方形を呈し、長さ4.35m、幅4.12mを測る。主軸はN-18°-Eを振る。断面は皿状で、検出面からの深さ19cm、底面はほぼ平坦で、標高10.42~10.45mを測る。埋土は基本的に第1層褐灰色砂質土と第2層黒褐色粘土の2層に分かれる。土坑底面中央部には長軸に沿って柱穴P238とP239が1mの柱間をおいて掘り込まれる。それぞれ柱穴の規模はP238が(45×35-55cm)、P239が(48×42-51cm)を測る。土層断面から両者とも径12cm程度の柱痕跡が認められる。遺構の平面形や中央に位置する柱穴の存在から竪穴住居の可能性も考えられるが壁溝などは検出されず、時期や立地・地盤なども考慮して土坑として扱った。

遺物は第1層中を中心に出土しており、総量はコンテナ約4分の1箱程度である。弥生中期の壺頸部刻目貼付突帯部や古墳前期の甕口縁部、古墳中期の赤彩椀形高杯片など時期の異なる遺物が含まれる。このうち比較的遺存状態の良い壺(1)と小形鉢(2)を図化した。(1)は底部の形態や胎土、調整か

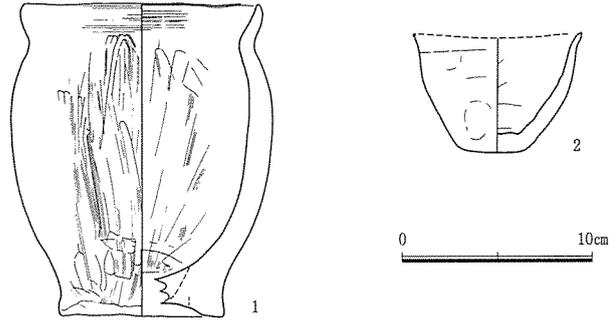


- 1 褐灰色砂質土 (0.2~3cm大の小礫を多く含む)
- 2 黒褐色粘土 (11よりやや明。暗褐色土ブロック及び褐灰色土ブロックをごく僅かに含む)
- 3 黒褐色粘質土 (2.11よりやや明。褐灰色砂及び0.2~2cm大の小礫を多く含む)
- 4 オリーブ褐色粘質土 (黒褐色土ブロック及び0.2~3cm大の礫を含む)
- 5 暗褐色粘質土 (0.2~0.5cm大の小礫を僅かに含む)
- 6 暗褐色粘質土 (5よりやや暗。黄褐色粘土ブロックを多く含む)
- 7 黒褐色粘土 (にぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む)
- 8 黒褐色粘質土 (黄褐色粘土ブロックを密に含む)
- 9 黒褐色粘質土 (黄褐色粘土ブロックを僅かに含む)
- 10 黒褐色粘土 (9より暗。にぶい黄褐色粘土ブロックを含む)
- 11 黒褐色粘質土 (9よりやや暗。黄褐色粘土ブロック及びにぶい黄褐色粘土ブロックを密に含む)
- 12 黒褐色粘土 (9.11よりやや暗。黄褐色粘土ブロックを密に含む)
- 13 黒褐色粘土 (10よりやや明るく、11.12より暗。にぶい黄褐色粘土ブロックおよび黄褐色粘土ブロックを含む)



第23図 平成14年度SK-08実測図 (S=1:40)

ら弥生土器とみられ、分厚い底部で棗状の体部に短く外方へ屈曲する口縁部が続く。体部内外面上方向への工具ナデが施され一部ハケ目状の筋痕が観察される。口縁部は同様の工具で横位のナデ、後内面上位はナデ調整される。(2)は胎土から弥生土器とみられ、手捏ね成形で、一部口縁部内面に粘土繋ぎ目痕が残る。ハケ目は観察されず全面ナデ調整される。

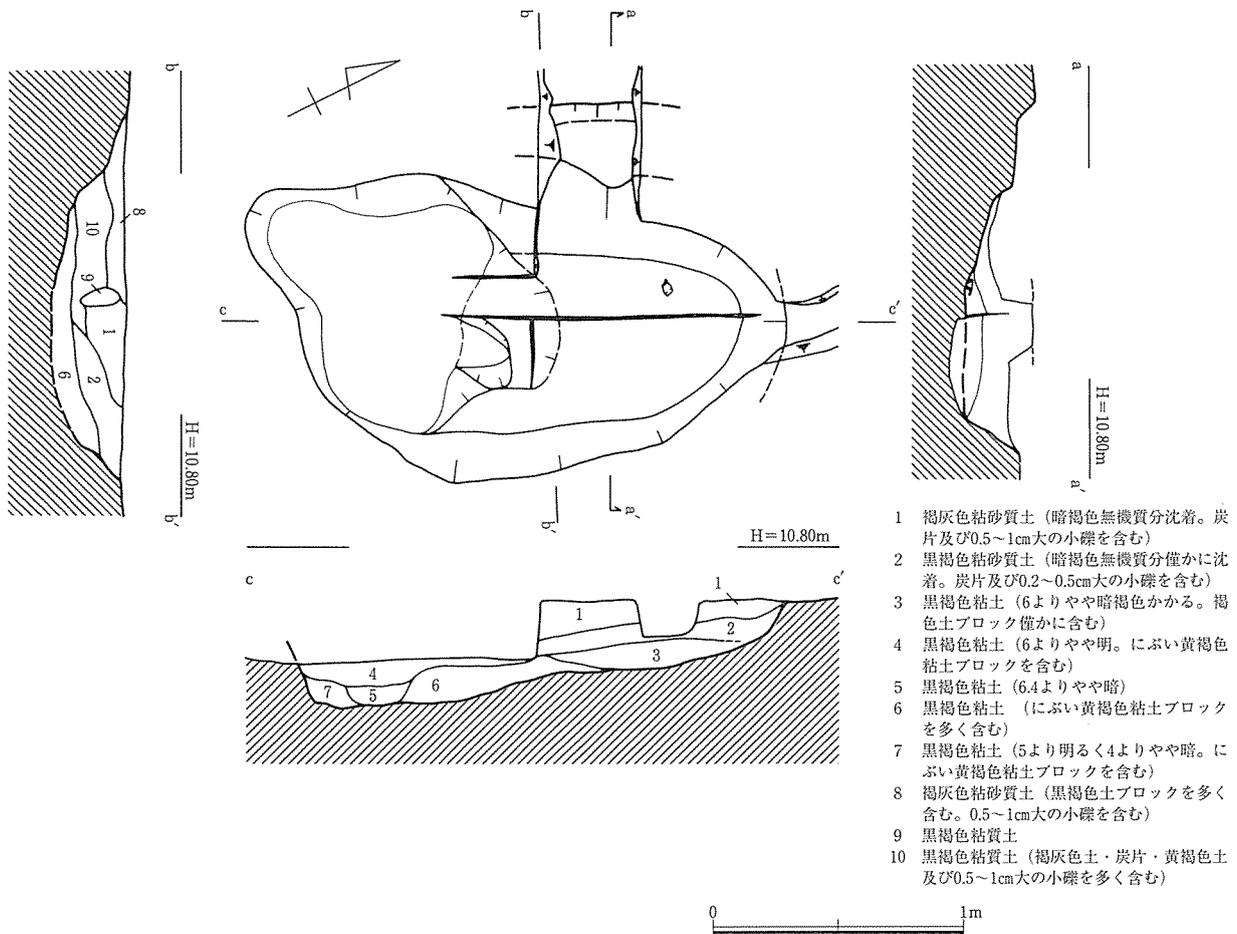


第24図 平成14年度S K-08出土遺物実測図

S K-10 (第3・5・25図、図版12)

調査区中央やや北東寄り、C2杭北西に位置する。標高10.58mで検出したが、調査区断面(第3図)から第7層黄褐色粘砂質土下の標高10.76mまで遺構の上場は立ち上がる。北東端上層に集石遺構が重なり、S K-08の南東端を切る。掘り過ぎやトレンチなどで掘削して不明な部分もあるが、平面は不整な楕円形を呈し、現況で長さ2.04m、幅1.49mを測る。主軸はN-27°-Eを振る。横断面は不整な椀状となる。北東壁に平坦面をもち、南東へ19cm程度深くなり、更に南側は徐々に深さを増す。検出面からの深さ42cm、底面は標高10.15mを測る。埋土は比較的複雑な堆積で10層に分かれ、下層の第3～7層は黒褐色粘土である。

遺物は少なく、第10層中から弥生甕口縁部片と土坑埋土より胴部細片数点が出土している。



第25図 平成14年度S K-10実測図 (S=1:30)

#### 4. 溝状遺構

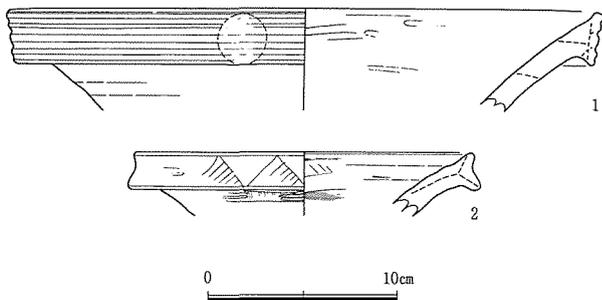
##### SD-01 (第3・26・27図、図版12・26)

調査区南東、標高10.89mで検出した。北側一帯はSB-01、04やSK-05などの遺構が集中する。東側にSD-03をはじめ多くの溝状遺構が配置するが、それらの軸に対し直交方向をとる。主軸はほぼ南北のN-89°-Eを振る。西端は調査区外へ延び、東端は徐々に幅、深さを減じSD-02の西手前で終結する。遺存長16.60m、最大幅は溝中央東側で1.95mを測る。横断面は不規則な凹凸があり不整皿状である。検出面から深さ27cm、底面は中央部がやや低くなり標高10.58mを測る。埋土は9層に分かれ、上層の第1～3層は円礫・砂利とともに土器片を含む。

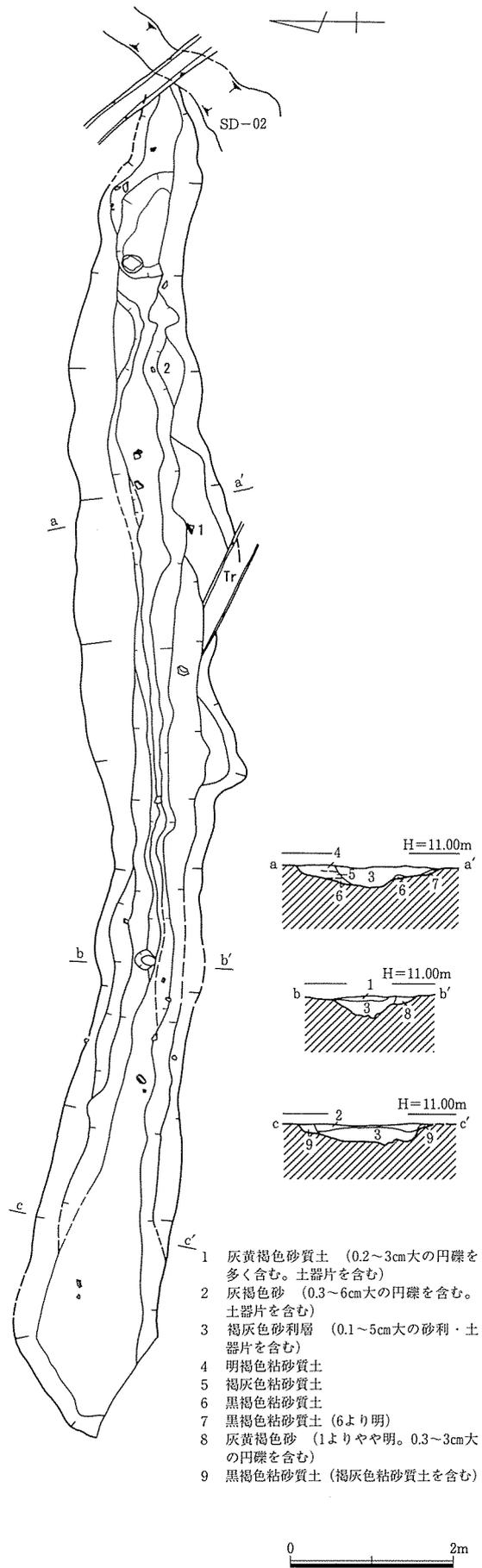
遺物は溝全域から分散して出土する傾向がみられ、コンテナ約1箱分に相当する量が出土している。古墳時代中期、弥生時代中期の遺物を含むが、多くは弥生時代後期中葉の土器である。このうち図化した器台受部もしくは壺口縁部(1)は第3層中の出土で、径30.8cm、口縁部外面に4条の凹線と円形浮文剥離痕が見られる。器台口縁部(2)は中央が凹む端面外面にヘラ描鋸歯文を施す。

##### SD-02 (第5・28・29図、図版12・26)

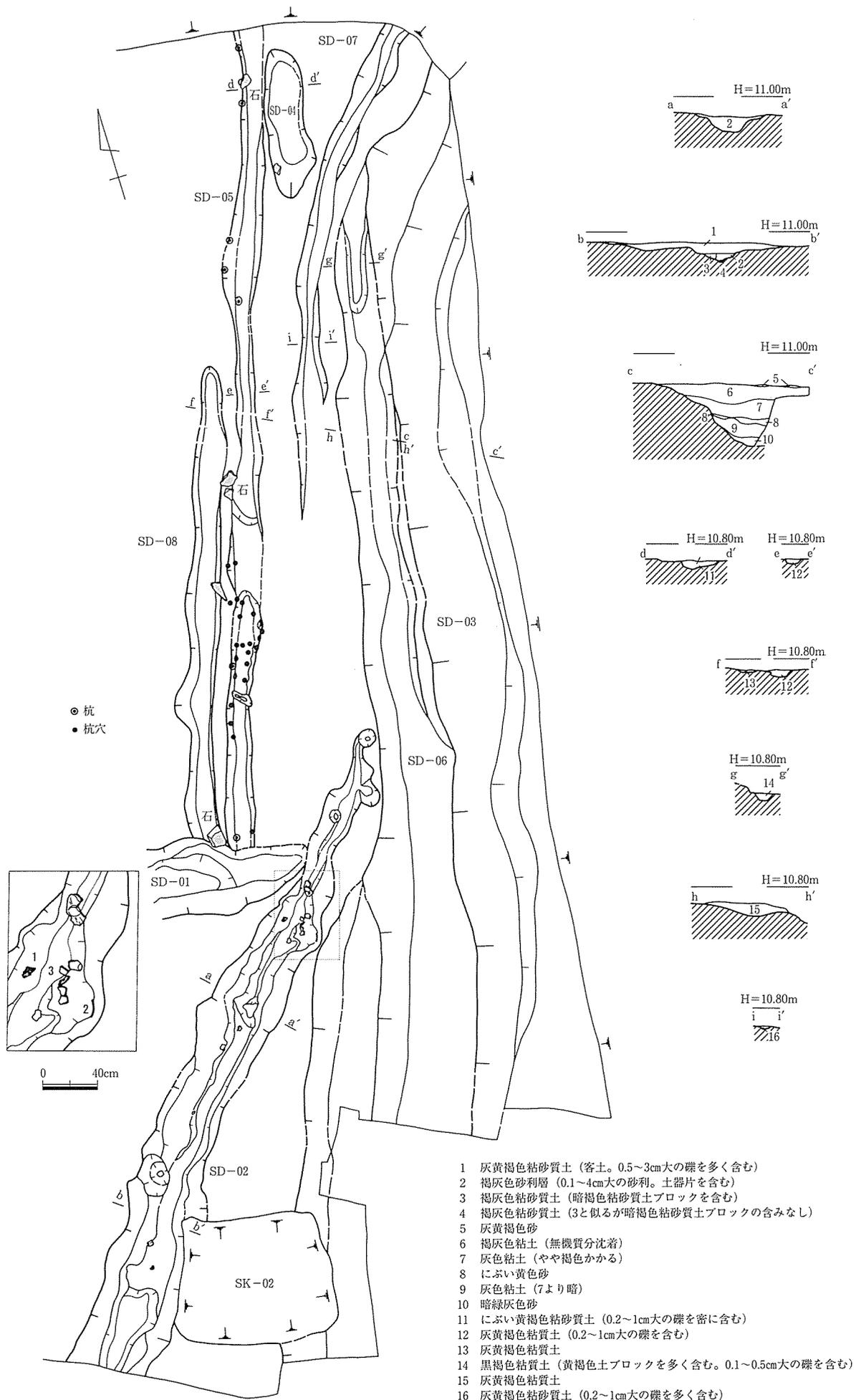
調査区南東、標高10.84mで検出した。SD-02周辺はSD-03をはじめ溝状遺構が集中する一帯である。南東側上層にSK-01、02が重なる。南東端は調査区外へ延び、北東へ向けて徐々に幅、深さを減じ終結する。主軸はN-39°-Eを振る。遺存長10.23m、最大幅1.25mを測る。検出面からの深さ29cm、底面は中央部で標高10.47mを測る。横断面は不整なすり鉢状で、両壁上位に平坦面をもち中央が尖り底状に深くなる。埋土は南西側で上層に客土が広がることから実質3層に分かれ、埋土の大半は第2層



第27図 平成14年度SD-01出土遺物実測図



第26図 平成14年度SD-01実測図 (S=1:80)



第28図 平成14年度SD-02~08出土遺物実測図 (S=1:80)

褐灰色砂利層で、遺物はこの層中心に出土している。

遺物はコンテナ約5分の4箱分に相当する量が出土している。混入とみられるものも僅かに含むが、比較的大ぶりの土器片が多く主に弥生時代中期の土器片で構成される。壺、甕、高杯、鉢、底部片などがある。遺構北東寄りで弥生中期の遺物を集中して出土する範囲があり、このうち(1)~(2)を図化した。広口壺(1)は口縁上面と端面に数条の凹線を施し端面には円形浮文を貼り付ける。甕(1)は口縁は内上方へ肥厚し端面にハケ目状工具による刻み目、頸屈曲部に刻目貼付突帯を巡らせその刻みは肩部に及ぶ。内外面ハケ目調整で内面に磨きは施さない。高杯(3)は口縁部がぼつてり肥厚し、端面に凹線は観察されない。内外面ハケ目後内面ヘラ磨き調整である。壺はこの他に口縁部が(1)より下垂する壺口縁部や径12cmの小形の広口壺、く字状口縁で端面に1状の凹線を施す甕などがみられる。

#### SD-03 (第3・5・28・30図、図版13・26)

調査区東端に位置する。調査区断面第3・4層下の標高10.56mで検出した。両端および東壁は調査区外で、西壁側を検出するに留まる。遺構の西側には同様な軸をもつ溝状遺構が複数配置する。主軸はN-10°-Eを振る。遺存長15.80m、幅は現状で1.85mが確認される。横断面は遺存部分から不整な椀状と推察される。検出面からの深さ93cm、底面は標高9.63mを測り、黒褐色粘砂質土、黄灰色粘土を深く掘り込んでいる。埋土は6層が確認でき、比較的水平的な堆積で、中位層と最下層に砂の堆積がみられる。他は粘土層である。

遺物は3袋と多くはなく、弥生中期の土器を若干含むものの須恵器片、陶磁器片が目立つ。備前焼すり鉢(1)は径25.6cm、内面におろし目が重複してみられる。

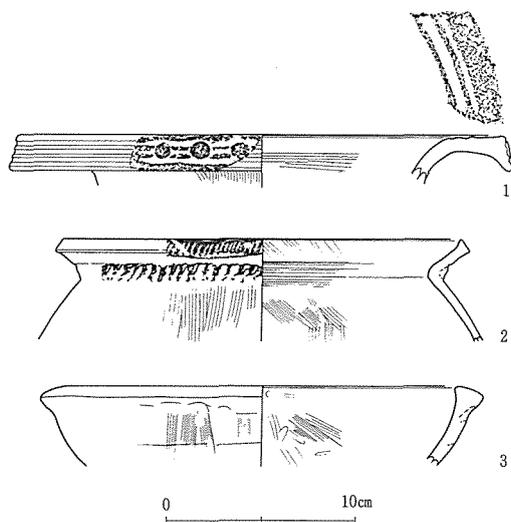
#### SD-04 (第5・28図、図版13)

調査区北東端部、標高10.57mで検出した。一帯はSD-03をはじめとする溝状遺構が集中し、西隣にSD-05が、東側にSD-07が配置する。現状では長さ2.20m、幅65cmで終結する。主軸はN-10°-Eを振る。横断面は不整な皿状である。検出面からの深さ13cm、底面は標高10.43mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘砂質土一層である。

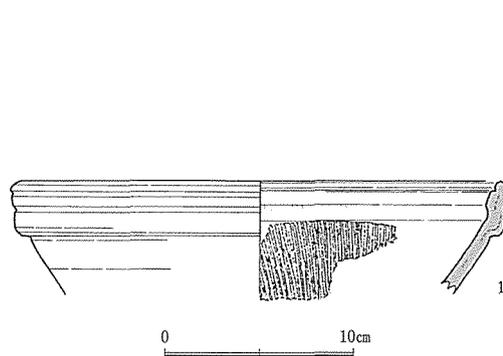
遺物は土器細片数点が出土している。

#### SD-05 (第3・5・28図、図版13)

調査区北東端部、調査区断面(第3図)から第4層下の標高10.64mで検出した。一帯はSD-03をはじめとする溝状遺構が集中し、西隣にSD-08が、東側にSD-04が配置する。北端は調査区外へ延び、南端は現状ではSD-01上層付近で終結する。遺存長12.18m、幅53cmを測る。主軸はN-17°-Eを振る。横断面はやや不整な椀状となる。底面は中央南寄りで浅く両端へ向けて深くなり、北側で検出面からの



第29図 平成14年度SD-02出土遺物実測図



第30図 平成14年度SD-03出土遺物実測図

深さ12cm、底面は標高10.52mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土一層である。溝壁面に沿って木杭および杭穴が検出され、中央南寄りで段差をとって深くなる付近一帯に特に集中する。また西壁の上場に沿って角礫が点々と出土しているが、埋土から土器は出土しなかった。

#### SD-06 (第3・5・28図、図版13)

調査区東端部に位置する。調査区断面第5層下の標高10.58mで検出した。一帯はSD-03をはじめとする溝状遺構が集中し、SD-03に沿う状態で検出した。北端はSD-07に切られた可能性があるものの後世の削平により不明となり、南端は調査区外、東側はSD-03に切られる。SD-03埋土の一部である可能性を残すものの別遺構として扱った。主軸はN-12°-Eを振る。遺存長17.70m、幅は現状で2.48mが確認される。横断面は遺存部分から皿状と推察される。検出面からの深さ18cm、底面は標高10.47mを測り、黒褐色粘質土およびにぶい黄褐色粘土層を掘り込む。遺構北端部の一部が底部標高10.28mと深くなり黒褐色粘質土が埋土であるが、別遺構の可能性も考えられる。一応の埋土は灰黄褐色粘質土一層である。

遺物は溝中央部の底面屈曲部で弥生中期高杯口縁部片1点が出土しているが、位置的にSD-02北東端の延長部にあたり、SD-02の遺物の可能性を残す。

#### SD-07 (第3・5・28図、図版13)

調査区北東端部、標高10.54mで検出した。一帯はSD-03をはじめとする溝状遺構が集中し、SD-03西隣のSD-06北側を遮るかのようには北東方向へ彎曲する。北西にSD-04が配置する。北端は調査区外へ延び、南端は現状ではなだらかに浅くなって消える。調査区断面(第3図)では第5層に対応するとみられる。遺存長7.60m、幅49cmを測る。主軸はN-17°-Eを振る。横断面はやや不整な椀状となる。底面は中央南寄りで浅く両端へ向けて深くなり、北側で検出面からの深さ12cm、底面は標高10.42mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土一層である。遺物の出土はみられなかった。

#### SD-08 (第3・5・28図、図版13)

調査区東端部に位置する。調査区断面(第3図)第4層下の標高10.66mで検出した。一帯はSD-03をはじめとする溝状遺構が集中するがその西端に位置し、東隣にSD-05が配置する。北端はやや先細りとなって終結し、南端はSD-01付近で終結するとみられる。遺存長7.03m、幅56cmを測る。主軸はN-18°-Eを振る。横断面は皿状となる。北側で検出面からの深さ6cm、底面は標高10.60mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土一層である。遺物は土器片数点で、古墳時代中後期の赤彩痕のある高杯片を含む。

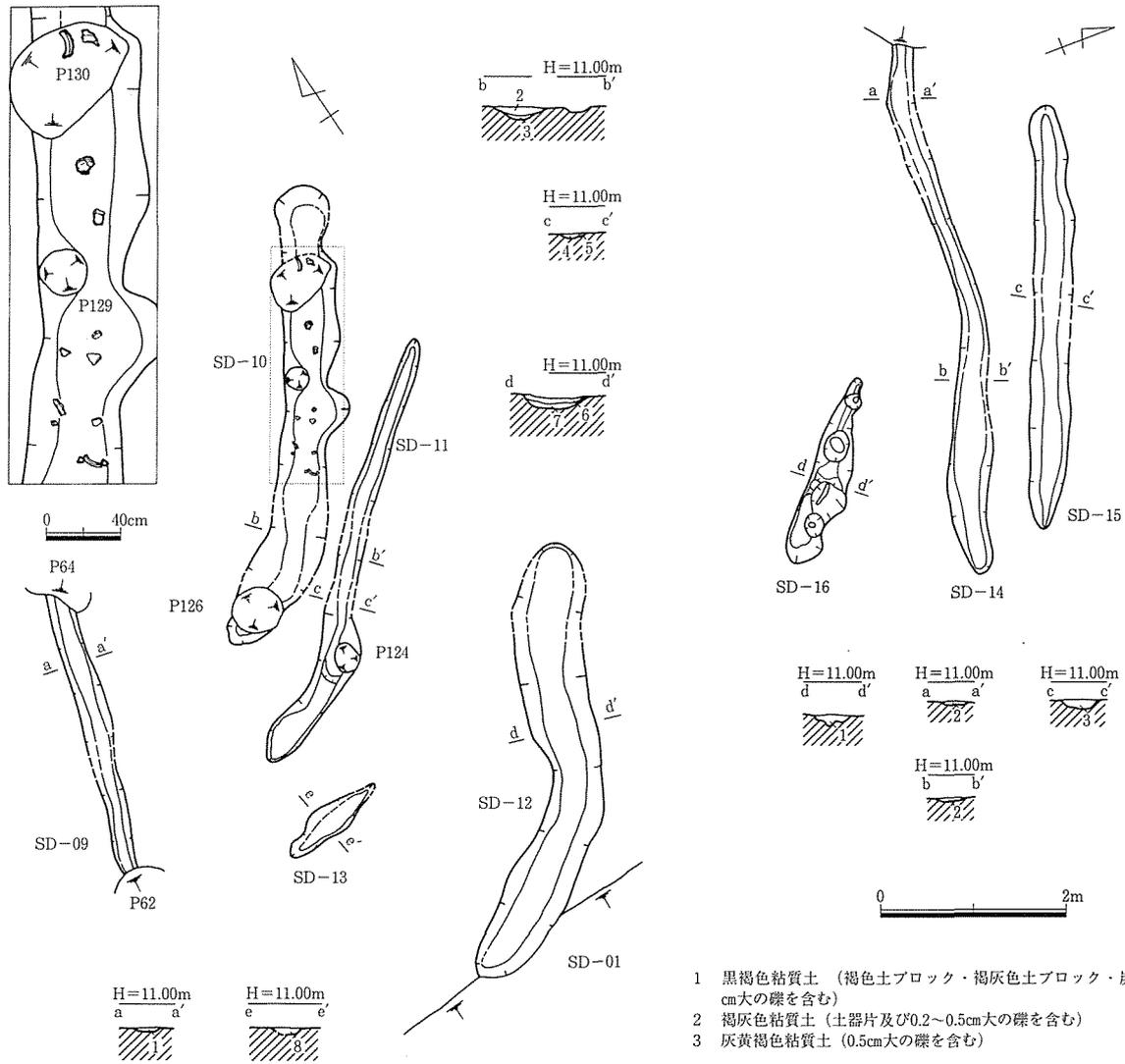
#### SD-09 (第5・31図、図版14)

調査区中央やや東寄りに位置する。標高10.75mで検出した。SB-04の西側桁行に沿った位置にあり、溝の両端はピットによって不明となる。主軸はN-17°-Eを振る。遺存長3.13m、幅33cmを測る。横断面は皿状となる。検出面からの深さ5cm、底面は標高10.70mを測る。埋土は礫を含む灰黄褐色粘砂質土一層である。遺物は土器細片数点である。

#### SD-10 (第3・5・31図、図版14)

調査区中央やや東寄りに位置する。調査区断面(第3図)第10層下、標高10.67mで検出した。同様な規模で完結するSD-11、SD-12が南東50cm、さらに南東2mに配置する。全体的に彎曲気味で、北東側で主軸をN-33°-Eにとるが南西側でやや屈曲してN-53°-Eを振る。長さ5.14m、幅66cmを測る。横断面は椀状となる。検出面からの深さ14cm、底面は標高10.53mを測る。埋土は2層に分かれ、上層から黒褐色粘砂質土、黒褐色粘質土である。

遺物は中央やや北東寄りで分散して出土しており、コンテナ4分の1箱分に相当する量がみられる。弥生後期後半の甕、鉢、底部片がある。図化できなかったが、剥落著しい畿内V様式系とみられる甕、赤橙色をした北近畿系甕が含まれる。



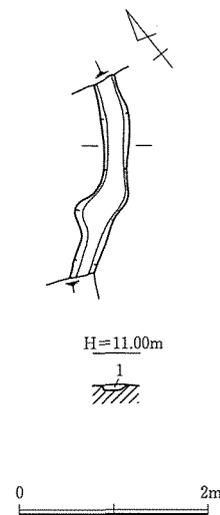
第32図 平成14年度SD-14-15-16実測図 (S=1:80)

- 1 灰黄褐色粘砂質土 (0.2~2cm大の礫を含む)
- 2 黒褐色粘砂質土 (0.2~3cm大の礫を含む。褐灰色土ブロックを含む。褐色無機質分沈着)
- 3 黒褐色粘質土 (2より暗。褐灰色土ブロックを含む)
- 4 灰黄褐色粘質土 (黒褐色土ブロックを僅かに含む)
- 5 黒褐色粘質土 (褐灰色土ブロックを僅かに含む)
- 6 褐灰色粘砂質土 (0.5~1cm大の礫を含む)
- 7 黒褐色粘質土 (褐灰色土ブロック及び暗褐色土ブロックを含む)
- 8 褐灰色粘質土 (暗褐色土ブロック及び1~5cm大の礫を含む)

第31図 平成14年度SD-09~14実測図 (S=1:80)

SD-11 (第5・31図、図版14)

調査区中央やや東寄りに位置する。標高10.67mで検出した。同様な規模で完結するSD-10が北西50cm、SD-12が南東2mに配置する。北東側で直線的に伸び主軸をN-49°-Eにとるが、南西側でやや屈曲してN-67°-Eを振る。長さ4.88m、幅35cmを測る。横断面は皿状となる。検出面からの深さ5cm、底面は標高10.62mを測る。埋土は2層に分かれ、灰黄褐色粘質土、黒褐色粘質土である。遺物の出土はみられなかった。



- 1 灰黄褐色粘砂質土 (0.5~5cm大の礫を密に含む)

第33図 平成14年度SD-17実測図 (S=1:80)

#### SD-12 (第5・31図、図版14)

調査区中央やや東寄りに位置する。標高10.77mで検出した。北西2m、更に50cmに同様な規模で完結するSD-11、10が配置する。中央で緩やかに字形に屈曲し、北東側で主軸をN-23°-Eにとるが、南西側でN-58°-Eを振る。長さ4.86m、幅72cmを測る。横断面は椀状となる。検出面からの深さ16cm、底面は標高10.61mを測る。埋土は2層に分かれ、上層から黒褐色粘質土、褐灰色粘質土である。

遺物は埋土から弥生土器片1袋分が出土しており、脚裾部、底部片のほか、弥生時代前期あるいは中期初頭の甕口縁部片1点が出土している。

#### SD-13 (第5・31図、図版15)

調査区中央やや東寄りに位置する。標高10.75mで検出した。北側に長さ4、5m程度の完結するSD-11、12が配置し、南西側で同様に西へ軸を振るが、SD-13はその軸を振った部分と同様な主軸N-83°-Eをとる。長さ1.17m、幅33cmを測る。横断面は不整な皿状となる。検出面からの深さ8cm、底面は標高10.67mを測る。埋土は褐灰色粘質土一層である。

遺物は埋土から弥生土器口縁部片2点が出土している。

#### SD-14 (第3・5・32図、図版15)

調査区北西端、調査区断面(第3図)では第8層が基盤となり、標高10.66mで検出した。北側に同様な規模のSD-15が配置する。西端は調査区外へ延び、遺存長5.85m、幅43cmを測る。中央部で蛇行して、東側でN-69°-W、西側でN-88°-Wへ振る。横断面は皿状である。検出面からの深さ5cm、底面は東側で標高10.71mと西側より5cm程度低くなる。埋土は褐灰色粘質土一層である。

遺物は埋土から5袋分が出土しており、多くは細片で古墳時代中期の赤彩された有段高杯片などが見られる。

#### SD-15 (第5・32図、図版15)

調査区北西端、標高10.81mで検出した。南側に同様な規模のSD-14が配置する。直線的に延び両端とも終結する。長さ4.60m、幅45cmを測る。主軸はN-68°-Wを振る。横断面は不整な椀状となる。検出面からの深さ10cm、底面は標高10.71mを測る。埋土は灰黄褐色粘質土一層である。

遺物は埋土から1袋分が出土しており、多くは細片で古墳時代中期の高杯杯底部片などが見られる。

#### SD-16 (第5・32図、図版15)

調査区北西端、標高10.66mで検出した。北側に小規模なSD-14、15が配置する。北側の2条の溝状遺構に対しやや北へ振った主軸、N-50°-Wをとる。遺構内に小規模なピットがみられ、P237を除き切り合い関係等は不明である。長さ2.10m、幅41cmを測る。横断面は不整な皿状となる。検出面からの深さ14cm、底面は標高10.52mを測る。埋土は黒褐色粘質土一層である。

遺物は埋土から1袋分が出土しており、多くは細片で古墳時代中期の赤彩された有段高杯片などが見られる。

#### SD-17 (第5・33図、図版15)

調査区ほぼ中央部、平成13年度試掘トレンチの北東に位置する。標高10.66mで検出した。北端は暗渠に切れ様相不明となるが、延長するとSK-08の南西隅へ続く位置となる。南端は試掘トレンチに掘削され、トレンチ壁面では確認できず不明となる。中央部で緩やかに彎曲し南西で部分的に膨らむ形状で、遺存長2.16m、幅42mを測る。主軸は北東側でN-31°-E、南西側でN-55°-Eを振る。断面は不整な皿状となる。検出面からの深さ6cm、底面は標高10.60mを測る。埋土は灰黄褐色粘砂質土一層である。

遺物は埋土から古墳時代中期とみられる胴部片1点が出土している。

## 5. その他の遺構と遺物

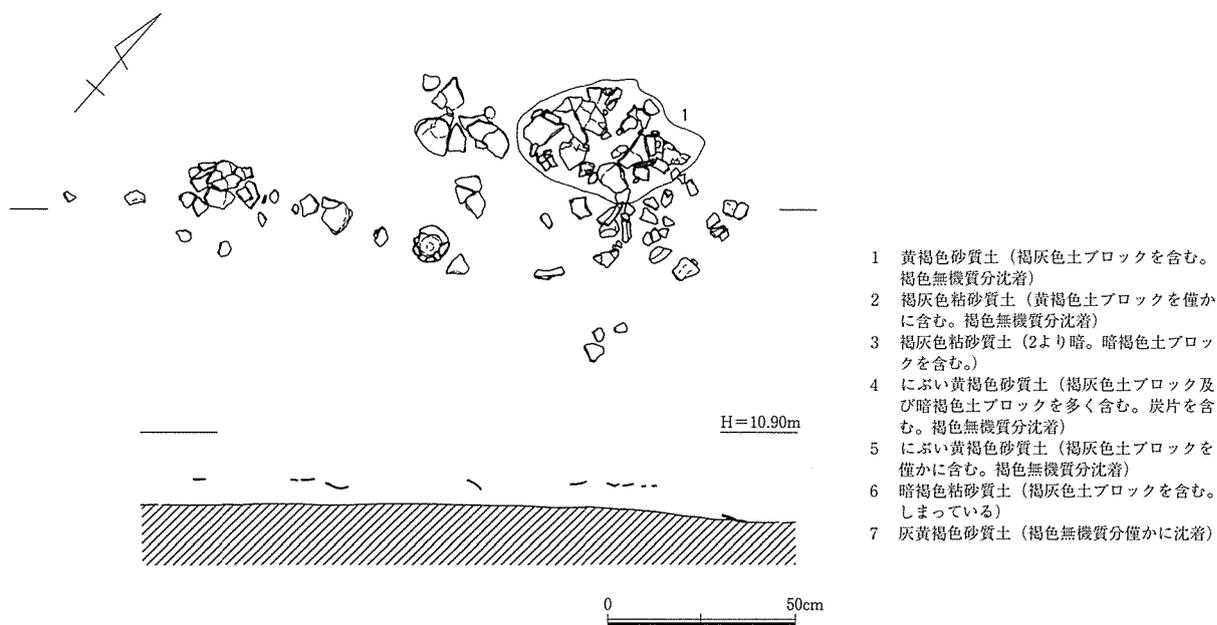
### 土器溜 1 (第5・34・35図、図版16・26)

調査区ほぼ中央部、標高10.78~10.66mで検出した。平成13年度試掘トレンチにおいて検出していた遺構である。明確な掘り込みは確認できず、土器が長さ1.8m、幅75cmの範囲で検出された。試掘の報告によると茶褐色砂質土(灰色砂、2~3cm大の礫を含む)中の遺構である。調査区断面図(第3図)第8層に対応すると思われる。土器の分布状況から一応主軸はN-46°-Eを振る。

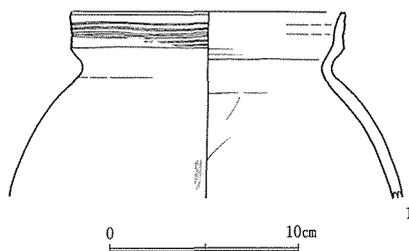
遺物はコンテナ約2分の1箱分に相当する量が出土している。いずれも弥生時代後期後半の甕、器台、短くハ字形に開く脚台部が出土しており、図化した甕(1)以外に試掘報告書で壺口縁部、甕、器台を掲載している。甕(1)は頸部の屈曲やや甘く、口縁部外面に貝殻腹縁による平行沈線を施す。風化剥落著しく調整不明瞭ながら口縁部内面にヘラ磨きが観察される。

### 土器溜 2 (第5・36図、図版16)

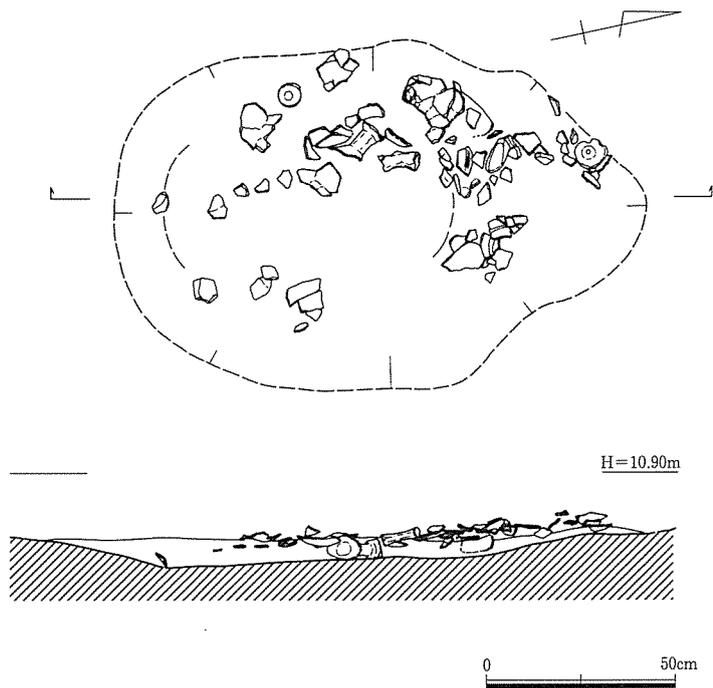
調査区西側、C5杭とC5S10杭の中間やや東寄りに位置する。土器の出土する範囲は長さ1.4m、幅91cm、深さ8cm程度にわたり窪み、埋土は明確には分層できなかった。土器の検出は標高10.78~10.67mである。ただ、具体的に数値としては明確に示せないが実際には更に上位からもう少し広い範囲で遺物が散在している状況であった。窪みの平面は北東が狭まる不整な楕円形を呈し、主軸はN-12°-Eを振る。断面は不整な皿状である。底面は土器検出の最深である標高10.67mを測る。



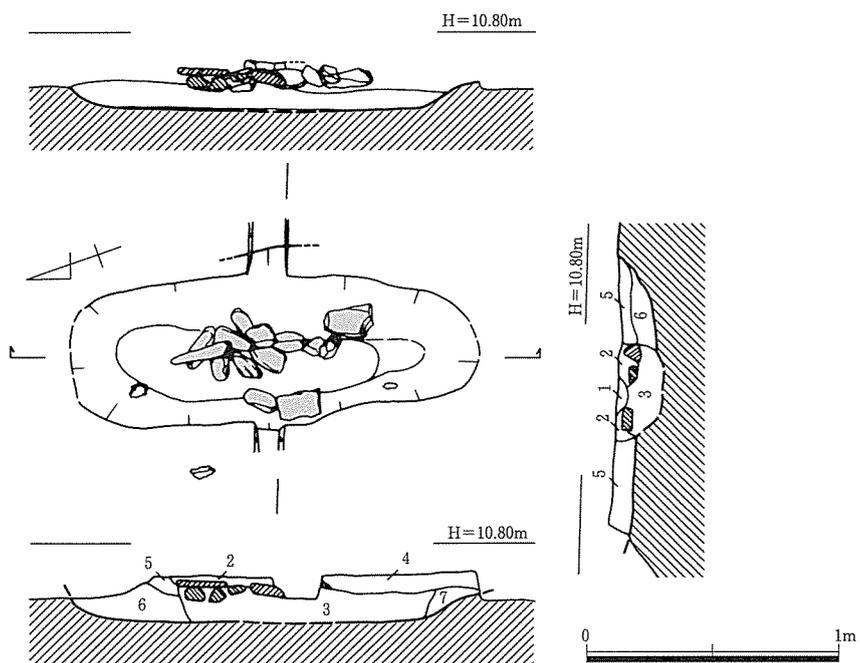
第34図 平成14年度土器溜1実測図(S=1:20)



第35図 平成14年度土器溜1出土遺物実測図



第36図 平成14年度土器溜2実測図 (S = 1 : 20)



第37図 平成14年度集石遺構実測図 (S = 1 : 30)

遺物はコンテナ約2分の1箱分に相当する量が出土している。いずれも弥生時代後期後半の壺、甕、高杯、器台、短くハ字形に開く脚台部である。脚部が比較的多いことが注目され、内湾気味のハ字形に開く北近畿系の脚部片を含む。

#### 集石遺構（第5・37図、図版16）

調査区中央やや北東寄り、S K-08、10の北東上層に位置する。標高10.68mで検出した。上部は後世の攪乱を受け明確な輪郭は不明瞭ながら平面は長楕円形を呈し、現状で長さ1.62m、幅1.10m、検出面からの深さ19cm、底面は標高10.49mを測る。主軸はN-18°-Eを振る。中央上位で河原石を主体とする短径7cm×長径15cm程度の円礫および板状の角礫が第2層および第3層間に集中して出土している。土層断面の観察から埋葬施設の可能性が考えられ、第5～7層は裏込め土で、第3層の立ち上がりから幅30cm程度、長さ90cmの木棺の存在が推定される。中央部で石の落ち込みが確認できないことから、ある程度期間をおき石を墓標的に並べたとみられる。

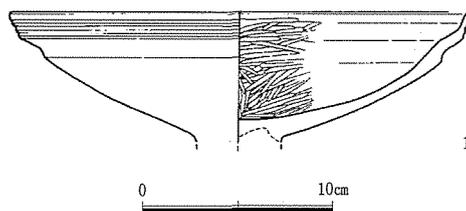
遺物は、上層で出土した石は自然石で使用痕は認められず、弥生期とみられる甕口縁部片が上層から出土している他に土器細片数点がみられる。

#### ピット状遺構（第5図、図版5、ピット一覧表）

調査区全体で198基のピット状遺構を検出した。特に調査区南西に位置するS B-03の西側に集中する傾向があり、検出標高はおおよそ10.75m前後である。柱根が遺存したり土層断面に柱痕跡を観察するピットを含む。調査区のさらに南西側に掘立柱建物など遺構が広がるものとみられる。

#### 遺構外出土遺物（第3・5・38図、図版26）

平成14年度調査の遺構外から出土した遺物として、コンテナ（容量54×34×20cm）19箱分に相当する量が出土している。多くは耕作土直下および調査区断面（第3図）第4層灰黄褐色粘砂質土層中の遺物で、0.5～5cm大の礫と共に瓦質土器、須恵器、土師器、弥生土器が混在する状況で出土している。その下層のS D-05、08が基盤としている第9層褐色粘砂質土、第10層明黄褐色粘砂質土層中からも多くみられ、第2遺構面までの各層で出土している。図化した高杯（1）は調査区中央部、土器溜1の南東1.5m、標高10.56mで出土したものである。おそらく土器溜1と同一基盤にあるとみられる。（1）は所謂丹後系高杯で、杯部完存、外面および口縁部内面に赤彩が施される。口縁部外面はにぶく潰れた3条の凹線がめぐる。内面は全面ヘラ磨きである。



第38図 平成14年度遺構外遺物実測図

### 第3節 平成15年度の調査

#### 1. 土坑

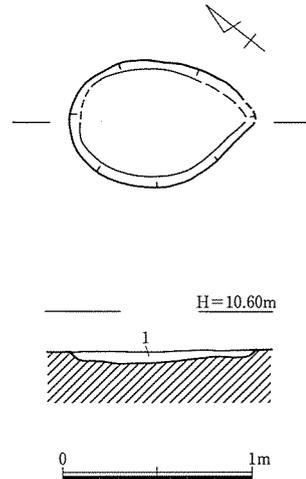
##### SK-01 (第6・39図、図版19)

市道東側調査区中央部に位置する。調査区断面図(第4図)第4層上面の標高10.76mで検出した。西側にピット群が展開する。平面は南隅が拡張する不整な隅丸長方形を呈し、長さ1.34m、幅91cmを測る。主軸はN-18°-Wを振る。底面は平坦で断面は皿状を呈する。検出面からの深さ10cm、底面の標高10.66mを測る。埋土は2層に分かれ、上層から黄褐色粘質シルト、上層より明で粘質の黄褐色粘質シルトである。

遺物は、第2層から高杯脚柱部片、埋土から土器細片が出土している。

##### SK-02 (第4・6・401図、図版19)

市道東側調査区北西側、C8N10杭の東に位置する。調査区断面図(第4図)、標高10.84mで検出した。西側でSD-01を切る。遺構南西部は調査区断面にかかることから未掘であるが、平面は隅丸長方形を呈する。長さ1.99m、幅1.33mを測る。主軸はN-77°-Wを振る。底面はやや西側へ向け深さを増すもののほぼ平坦で、断面は逆台形状を呈する。検出面からの深さ42cm、底面の標高10.40mを測る。埋土は4層に分かれ、粘質の強い粘土および粘質土からなる。中央部を暗渠に切られるが第2層中に汚い黄褐色土を含むことなどから比較的新しい時期の遺構と思われる。土器などの遺物はみられなかった。

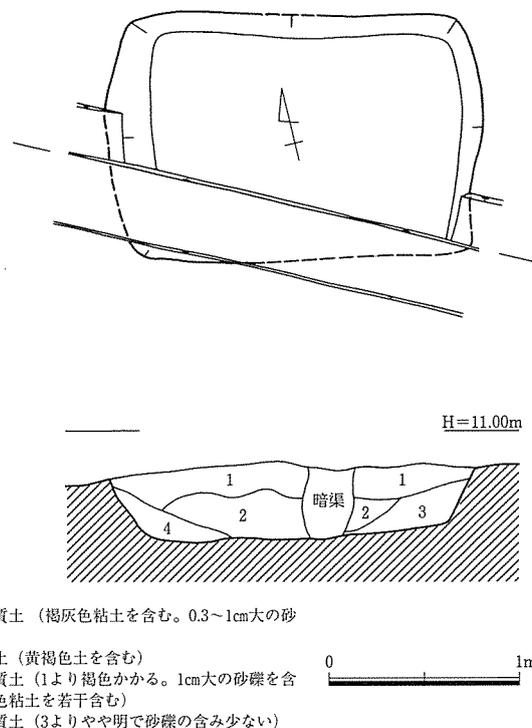


1 黄褐色シルト (0.1~0.3cm大の砂礫を多く含む。炭片を含む。褐色の沈着有)

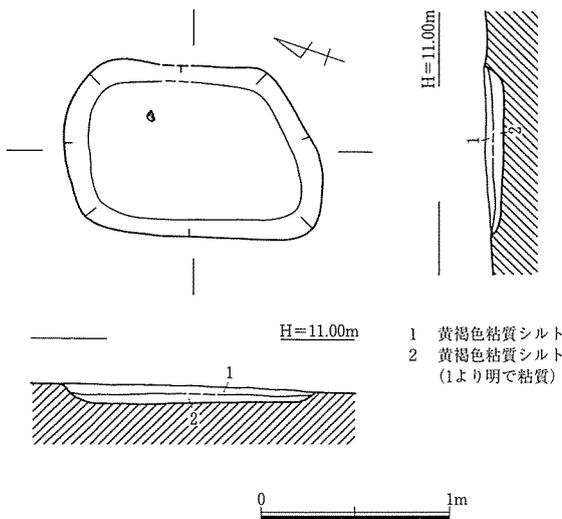
第41図 平成15年度SK-03実測図 (S=1:40)

##### SK-03 (第6・41図、図版19)

市道西側調査区南東端に位置する。調査区断面図(第4図)第8層上面の標高10.39mで検出した。平面は南東部が尖る不整な楕円形を呈する。長さ98cm、幅68cmを測る。主軸はN-38°-Wを振る。底面はほぼ平坦で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さ6cm、底面の標高10.33mを測る。埋土は黄褐色シルト一層である。埋土から平底部細片が出土している。



- 1 黄褐色粘質土 (褐色粘土を含む。0.3~1cm大の砂礫を含む)
- 2 褐色粘土 (黄褐色土を含む)
- 3 黄褐色粘質土 (1より褐色かかる。1cm大の砂礫を含む。褐色粘土を若干含む)
- 4 黄褐色粘質土 (3よりやや明で砂礫の含み少ない)



- 1 黄褐色粘質シルト
- 2 黄褐色粘質シルト (1より明で粘質)

第39図 平成15年度SK-01実測図 (S=1:40)

第40図 平成15年度SK-02実測図 (S=1:40)

## 2. 溝状遺構

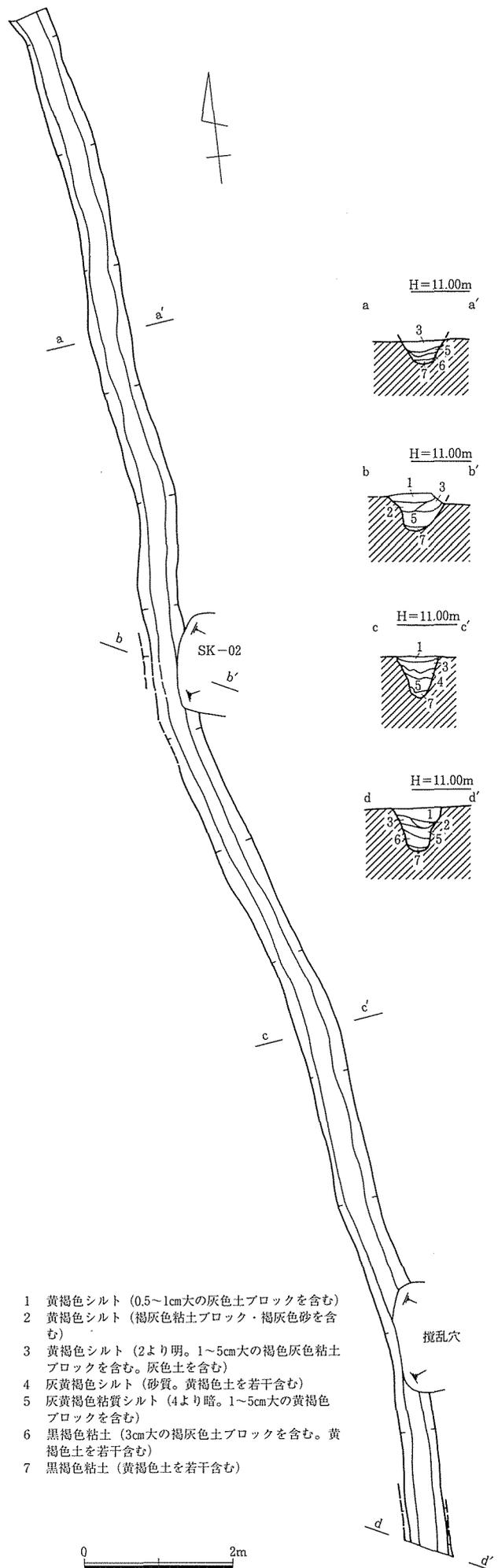
### SD-01 (第4・6・42図、図版20)

市道東側調査区西側に位置する。調査区断面図(第4図)第7層上面の標高10.75mで検出した。南側周囲にピット群が展開する。平面はわずかに蛇行する部分もみられるがおおよそ南北方向に延びる主軸N-8°-Wを振る。南北端は調査区外へ延び、遺存長21.60m、幅66cmを測る。横断面はU字状を呈する。溝幅に対し深さがあり人為的に掘り込まれたと考えられる。底部は中央部ではそれほどの比高差はみられないが北側で標高を下げ、南端と北端とでは13cmの差が認められる。北端で底面の標高10.03mを測る。検出面からの深さ59cm、底部は第12層の黒褐色粘土を大きく掘り込む。埋土は7層に分かれ、下位は粘土であるが中位は砂質、上層は黄褐色シルトでやや締まる。

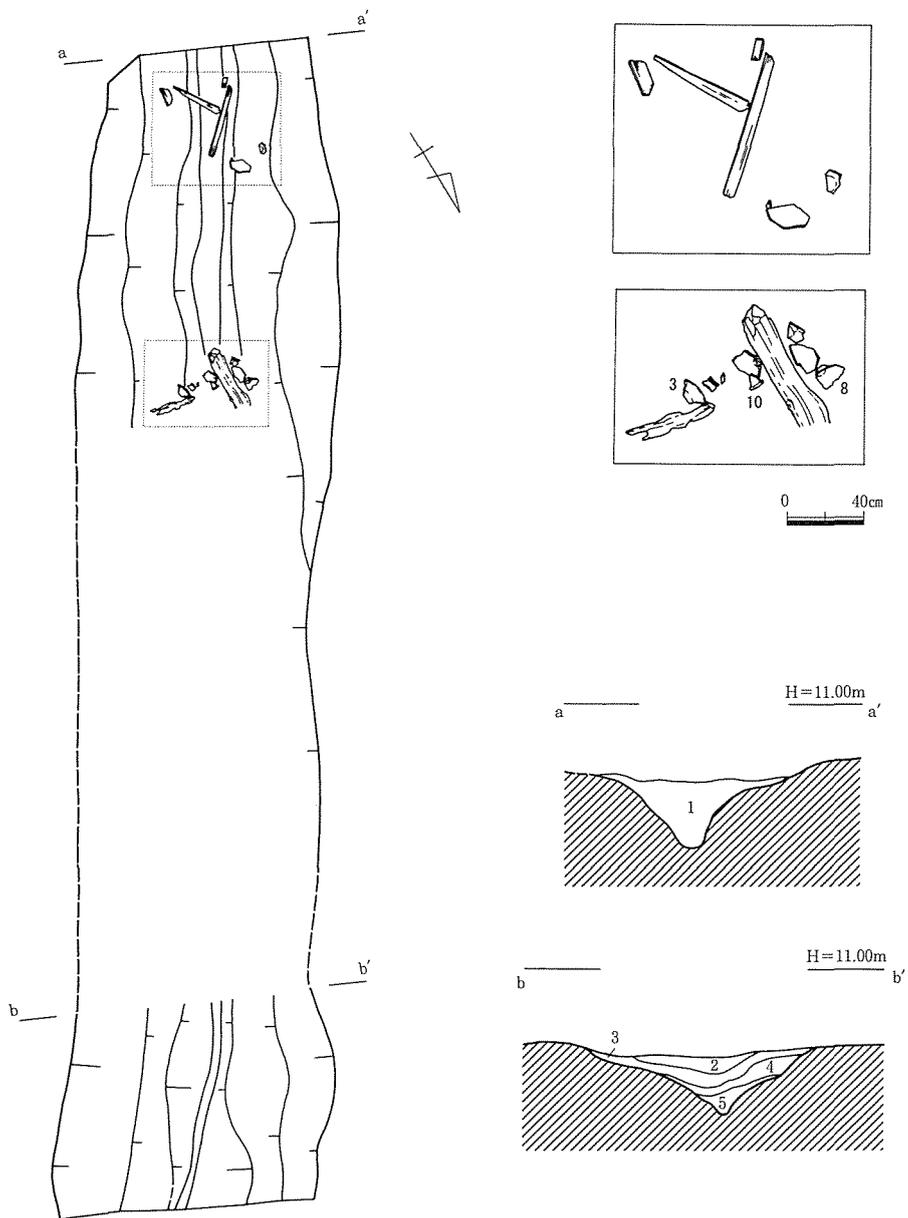
遺物は数少なく、埋土上位から土器細片数点が出土している。

### SD-02 (第4・6・43・44図、図版20・21・26・27)

市道東側調査区東側に位置する。調査区断面図(第4図)第12層上面の標高10.44mで検出した。SD-02の上層はSD-02埋土と同様な礫層で覆われており、本来の遺構の上場はさらに上がり幅も広がるとみられる。西側上層にSD-03がほぼ平行して延びる。なお、調査終盤で調査区断ち割りトレンチにより確認したことから中央部は未掘となる。両端は調査区外へ延び、主軸はN-31°-Eを振る。遺存長12.28m、幅2.83mを測る。横断面は不整なV字状で、幅10~20cm程度のすり鉢状の底部から30~40cm程度は急な傾斜で立ち上がるが上位はなだらかである。検出面からの深さ70cm、底部の高さは南端と北端でほぼ変わらずともに緑灰色粘土を深く掘り込み、北側で標高9.47mを測る。埋土は南側断面は調査時に崩落したため観察がやや不十分ではあるがほぼ大ぶりの礫層からなり、北側断面では最下層の第5層と中間層の第3層は粘土層であるが上位は0.5~3cm大の砂礫層である。いずれにせよ、遺構の上層の堆積状況などからも砂礫で短期間に埋没した状況が窺える。



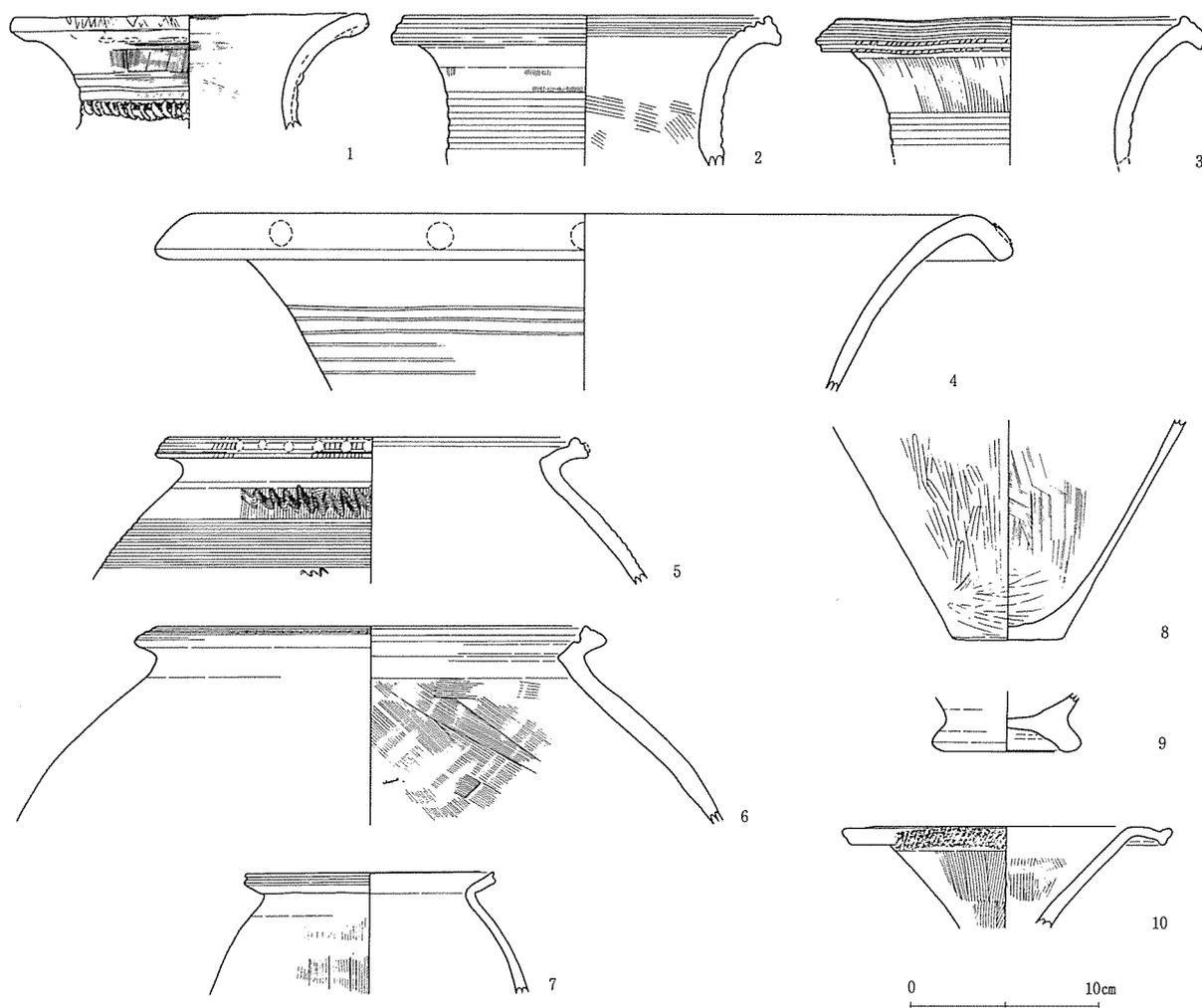
第42図 平成15年度SD-01実測図 (S=1:80)



- 1 灰色砂礫 (1~4cm大の砂礫。粘土の含みなし)
- 2 黄灰色砂礫 (0.5~3cm大の砂礫。やや締まり弱い)
- 3 黄灰色粘土 (黄灰色砂・0.5~4cm大の砂礫を若干含む)
- 4 黄灰色砂礫 (0.5~7cm大の砂礫。2より締まる)
- 5 黄灰色粘土 (3より暗。炭片を含む。僅かに黄灰色砂を含む。3cm大の礫有)

0 4m

第43図 平成15年度 S D-02実測図 (S = 1 : 80)



第44図 平成15年度S D-02出土遺物実測図

遺物は、中央南側の第4層黄灰色砂礫層から出土しており、一部炭化した自然木や板状に加工された板などと共に弥生時代中期の比較的大きめの土器片、コンテナ1箱分に相当する量がある。壺 (1)～(3) は同様に口縁部が開き頸部外面に数条の凹線を施す口縁部であるがそれぞれに特徴をもつ。(1) は口縁端面にやや粗雑な重複する刻目を施し、屈曲部上位に貼付突帯なしに弧状の刻目を巡らす。(2) は口縁端部は肥厚して端面をもち口縁内面にも凹線を施す。(3) は下垂する口縁端面に凹線のち下端に刻目を施す。大きく開く大型の壺 (4) は全体的に風化剥落がすすみ、口縁内面と外面に対となる円形浮文を施す。頸部はやや間隔の空いた6条の凹線を施す。肩部が大きく張る甕 (5) (6) は口縁部内面に1条の凹線を施し、(5) は口縁端面に3条の凹線と円形浮文、肩部外面に凹線とその上下に波状文を施す。(6) は肩部外面剥落すすむものの無文である。口縁端面は3条の凹線と細い刻目を施す。甕 (7) は短く立ち上がる口縁端面に1条の凹線、剥落すすむものの肩部外面に縦ハケ目が観察される。底部 (8) は径5.6cmの平底部から直線的に立ち上がり、体部外面へラ磨き、内面へラ削りである。脚台部 (9) は底部充填で脚端部は太く短く張り出す。高杯 (10) は口縁は屈曲してやや下垂気味に伸び端部は肥厚して刻目をもつ。口縁上面に煤多く付着する。

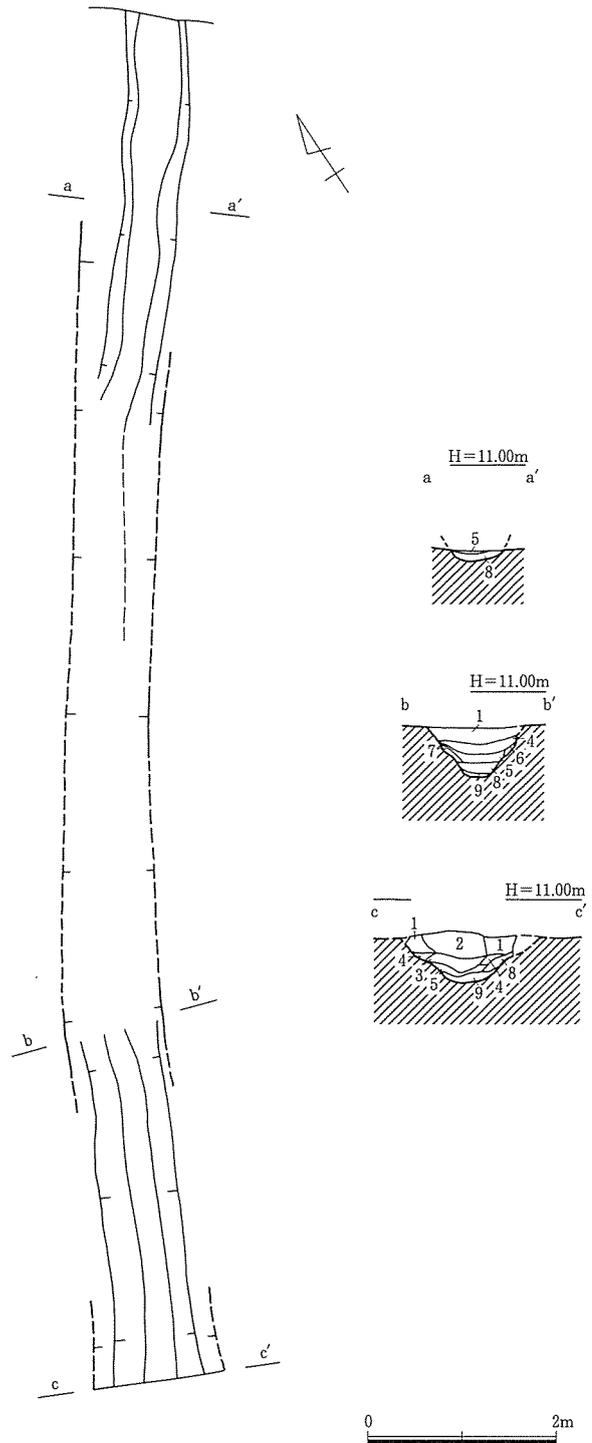
SD-03 (第4・6・45図、図版21・22)

市道東側調査区西側に位置する。調査区断面図(第4図)第12層上面で検出したが、断面精査の結果第9層上面、標高10.67mまで立ち上がることが判明した。SD-02の上層西側に同様な軸をとって配置する。また、上層から掘り込まれたSD-01に南西端を切られる。なお、調査終盤で調査区断ち割りトレンチにより確認したことから中央部は未掘となる。両端は調査区外へ延び、主軸はN-33°-Eを振る。遺存長14.50m、幅1.20mを測る。横断面は不整な椀状で、底部は幅20~30cm程度の平坦面をもつが途中段をとって立ち上がる。深さ54cm、底部は北側ほど低くなり北端で標高9.99mを測る。埋土は上層は断面位置によって様相が若干異なるが、下層は黄灰色粘土で上層は褐色シルトである。

遺物は少なく、第2、3層中から土器細片が出土している。

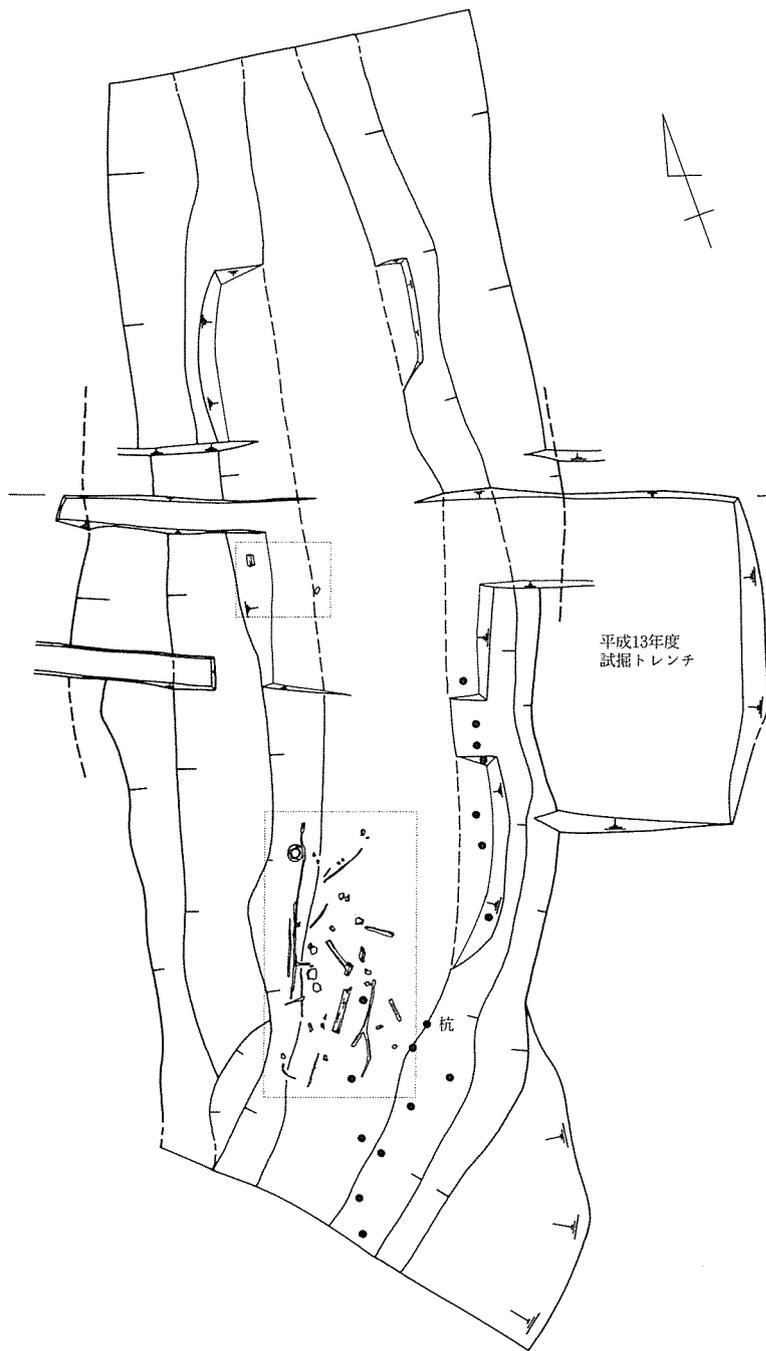
SD-04 (第4・6・46・47図、図版22・23・27)

市道西側調査区中央に位置する。平成13年度試掘トレンチによって確認されていた遺構である。調査区断面図(第4図)第4層上面、標高10.55mで検出した。第4層および第6層黄灰色砂礫を掘り込むが、厚く堆積した大ぶりの砂礫面での検出が困難なことから第6層を除去した後の検出となった。やや南西側で西へ彎曲する傾向がみられ、主軸は北側でN-10°-E、南側でN-25°-Eを振る。遺存長12.20m、幅5.10mを測る。横断面は段をとる部分もみられるが立ち上がりが比較的なだらかな椀状である。底部は広い平坦面をもち両端の比高差は7cm程北側が低く標高9.78mを測る。埋土は最下層の一部で粘質土がみられるが、砂、礫、シルトの互層から成る。溝南東側の底部屈曲部、ちょうど西側への彎曲部分で17本の木杭列が検出された。また、この杭列西側では自然木、加工された板などとともに土器片が含まれ、溜り状の様相を示す。土層断面第13、14層中の遺物とみられる。これら遺物が集中する範囲の北側下層では木器は認められず土器も点々とした出土である。

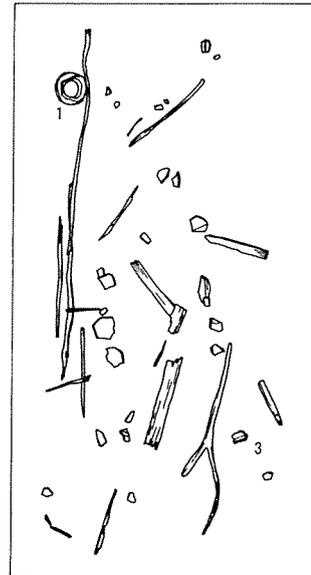
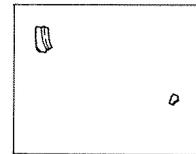


- 1 褐色シルト
- 2 黄灰色砂礫 (1~4cm大の砂礫。しまる)
- 3 褐色砂礫 (0.5~3cm大の砂礫。しまる)
- 4 褐色シルト (炭片を含む。砂質)
- 5 褐色粘質シルト (炭片を含む。黄灰色粘土を含む)
- 6 黄灰色シルト (炭片を含む。やや粘質)
- 7 黄灰色シルト (0.5~1cm大の砂礫を含む)
- 8 黄灰色粘土 (1cm大の礫を含む)
- 9 黄灰色粘土 (8よりやや暗)

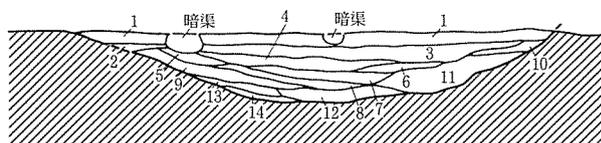
第45図 平成15年度SD-03実測図 (S=1:80)



- 1 黄褐色粘質シルト (炭片を含む)
- 2 黄灰色砂礫 (0.2~3cm大の砂礫層。黄灰色シルトを含む)
- 3 黄褐色粘質シルト (1より灰色かかる)
- 4 褐色シルト (やや黄色かかる。炭片を含む)
- 5 灰黄褐色シルト (炭片を若干含む。0.5~2mm大の細砂を含む)
- 6 黄灰色細砂 (やや褐色かかる。炭片を含む。0.5~2mm大の細砂)
- 7 黄灰色粘質シルト (炭片を含む)
- 8 黄灰色砂 (やや褐色かかる。炭片を含む。0.5~5mm大の砂層。1~2cm大の砂礫を僅かに含む)
- 9 黄灰色砂 (0.5~5mm大の砂層。炭片を含む。黄灰色粘質土を含む)
- 10 褐灰色細砂 (炭片を含む。0.5~2mm大の細砂層)
- 11 黄灰色砂礫 (0.5~6cm大の礫層。0.5~5mm大の細砂を含む。やや締まる)
- 12 黄灰色礫 (0.5~3cm大の礫層。0.5~5mm大の細砂及び黄灰色粘質土を含む)
- 13 黄灰色粘質シルト (炭片を含む)
- 14 黒褐色粘質土 (2cm大の緑灰色ロームブロックを含む)



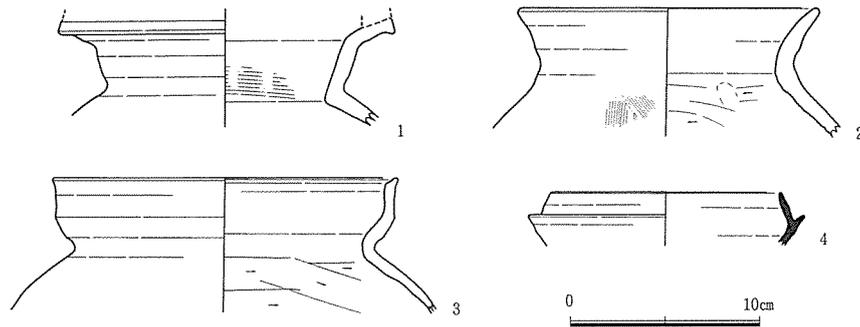
H=11.00m



0 40cm

0 4m

第46図 平成15年度 S D-04実測図 (S = 1 : 80)



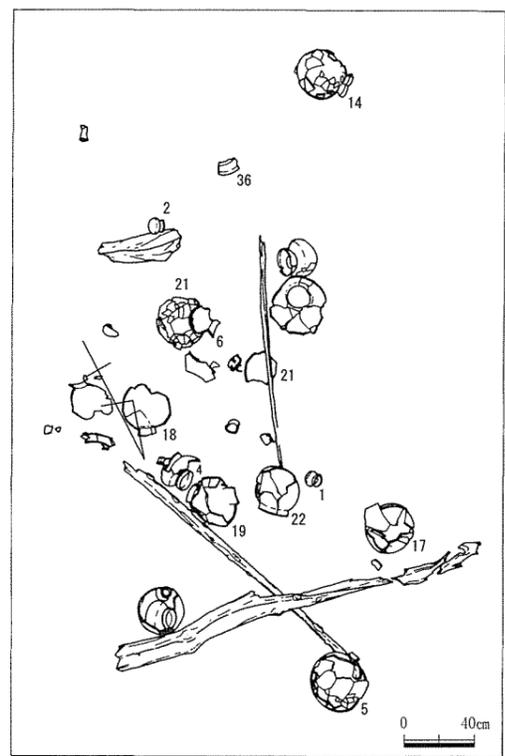
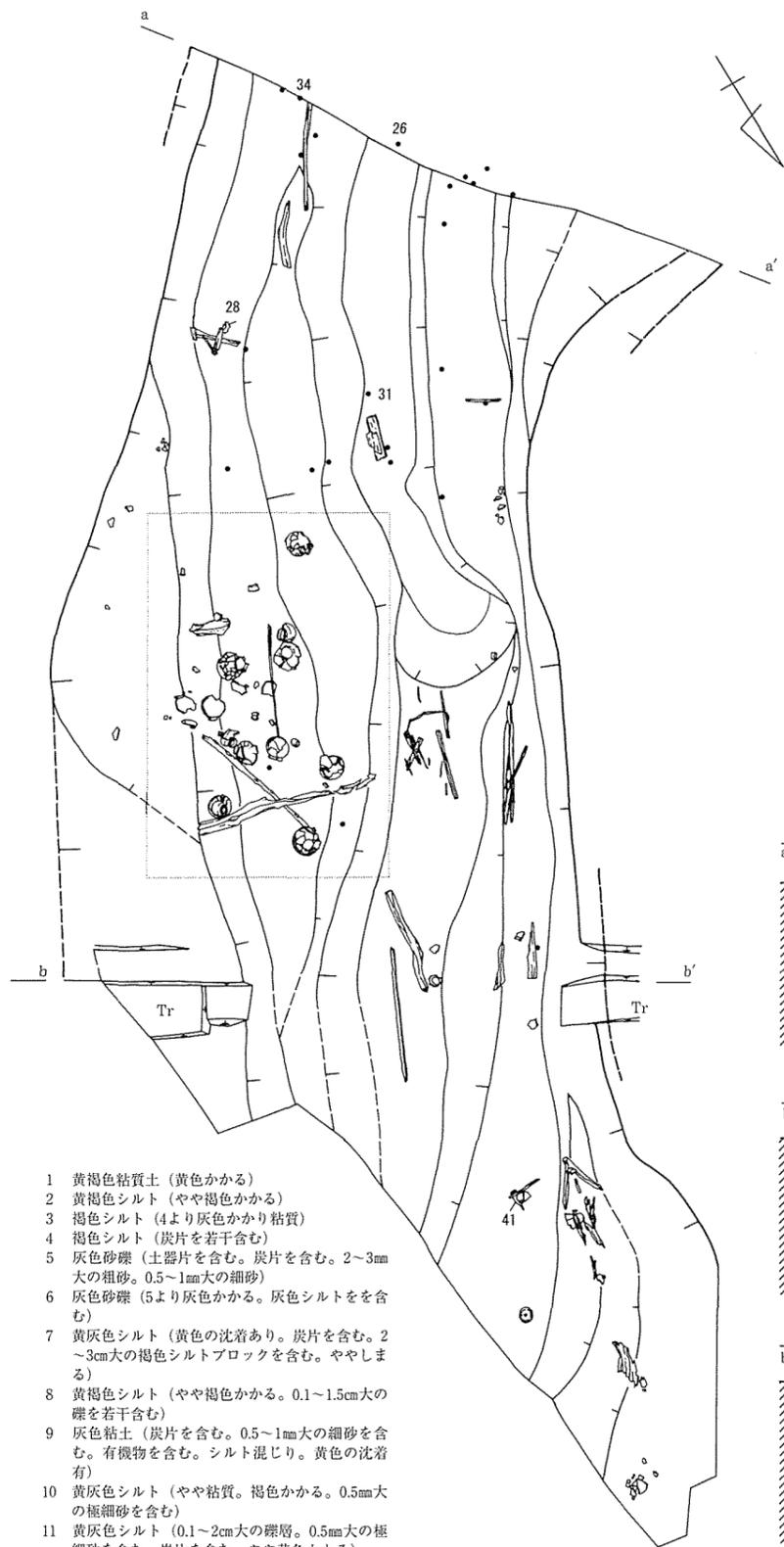
第47図 平成15年度S D-04出土遺物実測図

遺物は土器だけでコンテナ2箱分に相当する量が出土しており、多くは上層からの出土である。須恵器も若干含まれるものの古墳中期～後期とみられるもので占められる。図化した(1)～(4)のうち壺(1)、甕(3)は木器溜り、壺(2)、須恵器蓋杯の杯身(4)はa-a'断面南側の第11、12層中の出土である。(1)は壺の複合口縁部で、屈曲部上位はきれいに欠落し、剥落痕のある擬口縁として観察する。頸部の屈曲が強く大きく張った肩部が想定される。全体に器壁均一で重厚な作りで、風化剥落著しいが頸部内面に横ハケ目を観察する。壺(2)は肩部からゆるやかに外反して口縁端部は先細りでおえるが、口縁部外面のヨコナデがやや粗雑である。甕(3)は下端部の稜および屈曲の明確な意識がなく口縁上位のヨコナデにより一応の複合口縁となる。口縁端部は内傾する段を有する。杯身(4)は受部は上外方へ伸び横位への屈曲引き伸ばしはみられない。直線的に内傾する立ち上がりは先細りとなって終える。**S D-05** (第4・6・48～52図、図版23・24・27～31)

市道西側調査区東側に位置する。調査区断面図(第4図)第5層上面、標高10.54mで検出した。第14層および第15層緑灰色粘土を深く掘り込む。耕作土および床土除去後に土器片が出土する箇所などがみられ遺構の存在が予想されたが、検出面での堆積が一樣でなく第8層上で検出となった部分もある。溝は北側でやや広がる傾向がみられるが、主軸はおおよそN-31°-Eを振る。今回調査した溝状遺構の中で最も規模が大きく、幅6.70m、長さ11.1m程を検出した。横断面は不整な椀状で、底面は幅2～2.7m程度でわずかに彎曲している。壁面は段をとりながら立ち上がるが、南西壁で急傾斜となる部分もみられる。検出面からの深さ1.52m、南北端の比高差は底面に凹凸が認められるものの南側で15cm低く、標高9.07mを測る。埋土は最下層から3分の2程度、標高10.20m前後で大きく異なり、下層では10cm大にも及ぶ大ぶりの礫を含む砂礫層であるが、上層は黄灰色、褐色、黄褐色シルトおよび粘質系の土砂である。標高10.20m前後を境に下層は短期間に埋没し上層で堆積が緩慢となった状況が窺える。

遺物は、コンテナ(容量54×34×20cm)23箱分に相当する量が出土しており、このうち木製品は3箱分を占める。土器は混入とみられる弥生時代中期土器片数点、弥生時代後期後半の遺物を含むものの、古墳時代前期、中期と時期的にはほぼ二分される。古墳前期の遺物は下層の砂礫層中から出土したもので、溝南側で比較的多く出土したが、まとまって出土するような範囲は層位的にも認められなかった。これに対し、上層で古墳中期の遺物が数多く出土しているが、その中でも南東壁寄りの溝幅がやや広がる位置、断面図第13層中を中心として径3m程度の範囲に自然木とまとまった完形の甕、壺の土器群を検出した。図化する以前に取り上げた個体などもあり、10点弱の完形の甕と中形および小形の丸底壺の組み合わせである。中には、甕の内部に完形の中形および小形の丸底壺と一緒に検出される(図版24中段)例も観察された。また、これと同様に完形の甕がまとまって出土する状況が南西端のa-a'断面西岸寄り付近でもみられ、南東岸寄りの土器群と比べ層位的に上層に当たり壺は検出されなかった。図化した遺物は出土遺物量に対しほんの僅かであるが器種毎に異なるタイプの抽出図化に努めた。壺(1)～(16)

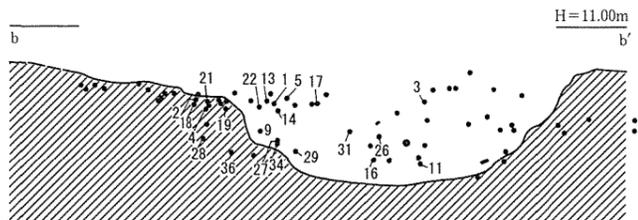
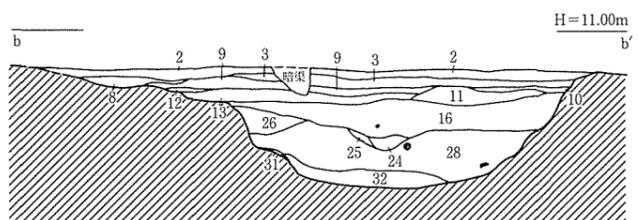
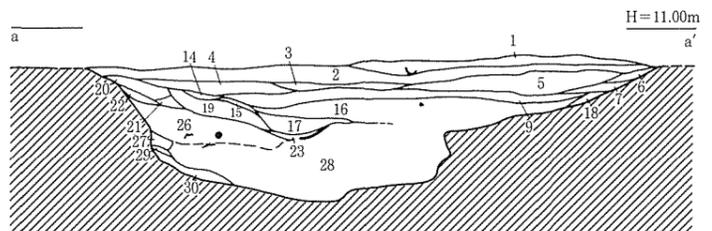
のうち、(1)～(6)、(13)(14)は土器群中の遺物である。このうち小形の壺(1)～(6)は複合口縁をもつ甕タイプの(4)を除き、球形化した体部にハ字に開く口縁部が付く形態であるが、形態や法量、調整などにおいてバラエティがみられる。赤彩も施すものとそうでないものがあり、規格化する以前の時期と考えられる。小形の壺(1)(2)は煤の付着はないが、(3)～(6)は底部周辺に煤が付着する。(7)は東岸寄り土器群周辺の砂層で出土したもので、全体的に肉厚で内面に雑なヘラ磨きが観察される。複合口縁の(8)～(12)は広口で大きく開く(8)(9)、ほぼ直立する(12)、内傾する(9)(10)とがみられ、内傾する(9)(10)でも大小のタイプがみられる。また(8)は頸屈曲部に突帯が貼付くタイプの可能性がある。(9)～(11)は断面図第28層中の出土と確認されている。東岸寄り土器群で出土した(13)(14)は複合口縁ながら頸部が短めで体部は球形化する。(13)は肩部が極度に厚くなり内面に指頭圧痕が明瞭で、外面にヘラ記号を有する。これに対し(14)は体部の器壁が比較的均整に仕上げられ、口縁端部が上外方に摘み上げ肩部外面に粗雑ながら波状文を施すといった古式の要素を有する。弥生中期壺頸部片(15)(16)は礫層中の出土で、(15)は径11.4cmの頸部に断面三角形の貼付突帯8条がほぼ等間隔に貼り付き、(16)は頸屈曲部に貼付突帯なしに棒状工具による弧状の刺突文を3段に巡らす。甕(17)～(29)は(17)～(19)(21)(22)が東岸寄り土器群の出土で、(20)は南壁面側の甕一群の出土である。体部は球形化し口縁部はく字状口縁である。(17)～(19)は頸部の強いヨコナデにより複合口縁の名残を残し、口縁端部は内側に肥厚して内傾する段をもつ。(20)(21)は同様な形態であるがやや(21)が小形で口縁端部が引き伸ばしされ、体部中央が面をもち多面体状となる。(22)は体部やや長胴で薄くハケ目も丁寧であるが口縁部がぼったり厚くヨコナデが雑で頸屈曲部に及ばない。(23)～(39)は下層の断面図第28層を中心とする砂礫層出土の遺物である。甕(23)～(25)は口縁端部が内側に摘まれたく字状口縁で、(23)は赤彩される。複合口縁の甕(26)～(29)は(27)を除き口縁上端面をもち下端の稜は鋭く摘み出されたしっかりした作りである。これに対し(27)は径が小さく下端部の稜は鈍く内外面にヨコナデ前の横ハケ目痕が明瞭でありやや古式の様相をもつ。大きさが異なる高杯(30)(31)は杯底部からなだらかに屈曲して開き(30)は外面ヘラ磨き調整、(31)は杯部外面ハケ目で内面は杯底部放射状のヘラ磨きと調整が異なる。丹後系の鉢(32)は口縁部で屈曲して更に屈曲外反して外面に横ハケ目痕およびヘラ磨き痕をもち、底部外面ヘラ削り内面ハケ目である。器高が大きく異なる低脚杯(33)(34)は脚部径も大きく異なり(33)は杯底部接合面に刻みを入れて脚部と接合する。(34)の外面ヘラ磨きは脚部接合後の調整である。鼓形器台(35)～(37)は外面に櫛描平行沈線を施すもの(35)、稜をしっかり摘み出すもの(36)、稜がなく小型化したもの(37)がみられる。底部(38)(39)は底部中央および外周を削ることで平底化しており内面は丁寧なハケ目調整、(39)はどっしりした平底で胎土中に砂粒を多く含み搬入の可能性をもつ。甑形土器(40)は裾部でやや開き、内外面ハケ目後口縁部ヨコナデおよび体部ヘラ削り調整である。木槌(41)は持ち手上部は割面とみられ、持ち手基部は径3.4mmの円座をとって円槌中央部へ円錐状に開く。槌部断面は楕円形である。槌部に対し持ち手がやや貧弱であり、槌部側面に明瞭な使用痕が観察されないことから小形の堅杵の可能性も考えられる。舟形木製品(42)は片側を欠損し、断面は船体外側は浅いU字状で削り抜き部分は浅いV字状である。舟底面と側面との区別はみられない。この他にSD-05では、板状、有頭状木製品、梯子片などが出土している。出土した土器の量に対し木製品が極めて少ない印象を持つ。



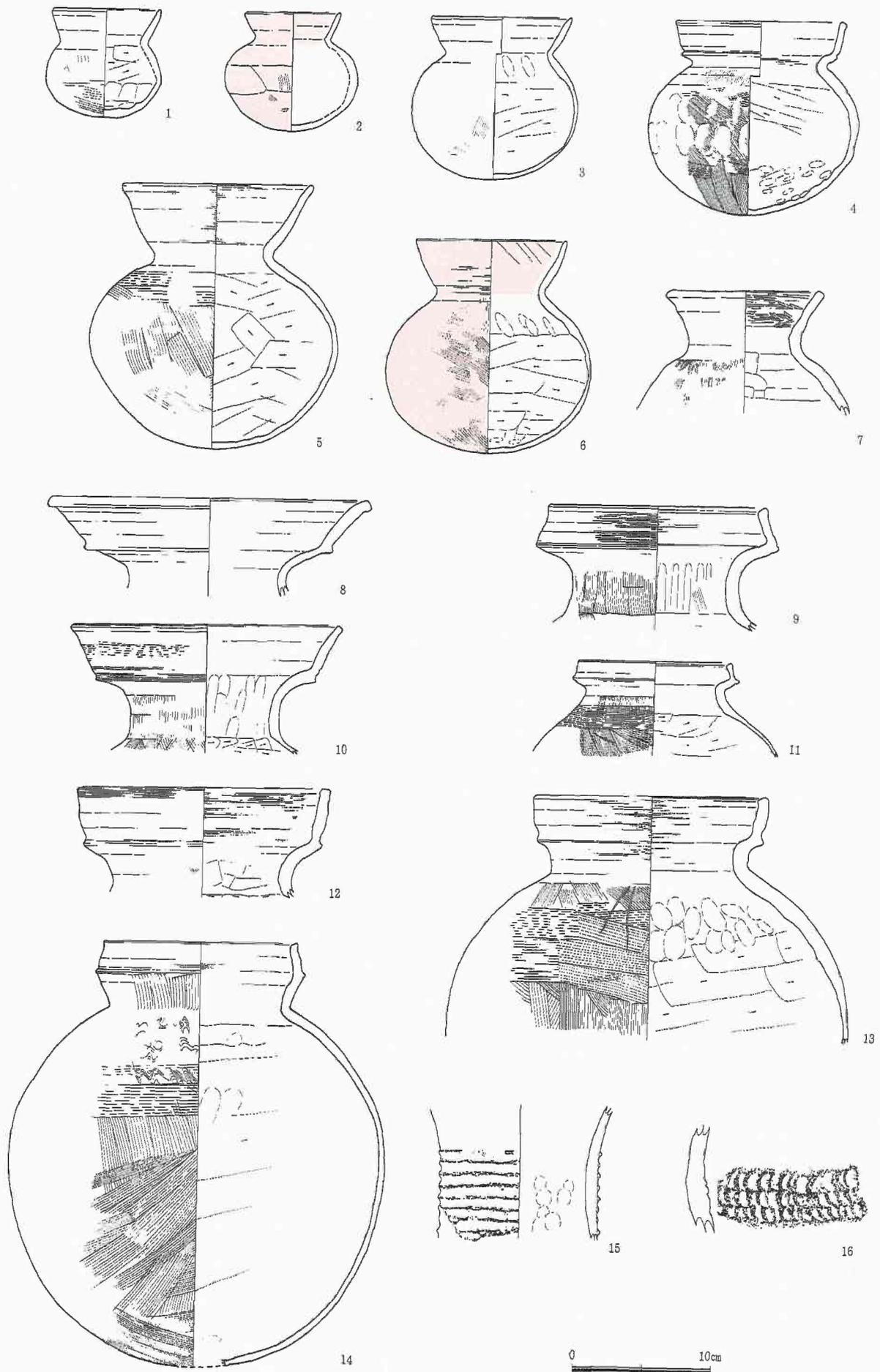
- 1 黄褐色粘質土 (黄色かかる)
- 2 黄褐色シルト (やや褐色かかる)
- 3 褐色シルト (4より灰色かかり粘質)
- 4 褐色シルト (炭片を若干含む)
- 5 灰色砂礫 (土器片を含む。炭片を含む。2~3mm大の粗砂。0.5~1mm大の細砂)
- 6 灰色砂礫 (5より灰色かかる。灰色シルトをを含む)
- 7 黄灰色シルト (黄色の沈着あり。炭片を含む。2~3cm大の褐色シルトブロックを含む。ややしまる)
- 8 黄褐色シルト (やや褐色かかる。0.1~1.5cm大の礫を若干含む)
- 9 灰色粘土 (炭片を含む。0.5~1mm大の細砂を含む。有機物を含む。シルト混じり。黄色の沈着有)
- 10 黄灰色シルト (やや粘質。褐色かかる。0.5mm大の極細砂を含む)
- 11 黄灰色シルト (0.1~2cm大の礫層。0.5mm大の極細砂を含む。炭片を含む。やや黄色かかる)
- 12 黄褐色シルト (炭片を含む。0.1~0.3cm大の細砂を若干含む)
- 13 黄灰色シルト (0.3~5cm大の礫層。0.5mm大の極細砂を含む。しまる)
- 14 灰色粘質シルト (炭片を含む。1~2mm大の粗砂を含む)
- 15 灰色粘質シルト (0.5~1mm大の細砂を含む)
- 16 灰色礫 (1~10cm大の礫層。炭片を含む。3~4cm大の礫中心。0.5cm大の粗砂混じり)
- 17 黄灰色粘質土 (腐植土。有機物を含む。細砂混じり)
- 18 黄灰色粘土 (1~2cm大の黒褐色粘土ブロックを含む。1~2mm大の細砂を含む)
- 19 黄灰色細砂 (0.5~1mm大の均一な細砂)

- 20 褐色細砂 (褐色の沈着有。灰色粘土を若干含む)
- 21 褐色粘質シルト (22より砂質。炭片を若干含む)
- 22 褐色粘質シルト (26より砂質。0.5cm大の黒褐色粘土ブロックを若干含む)
- 23 黄灰色粘質土 (17よりやや粘質。黄色かかる)
- 24 黄灰色シルト (0.3~5cm大の礫層。13より細砂の含み多い。しまり弱い)
- 25 黄灰色粘質土 (0.5mm大の極細砂を含む。有機物片を多く含む)
- 26 褐色粘質土 (シルト混じり。腐植土及細かな有機物含む。土器片を含む)
- 27 黄灰色粘土 (5~10cm大の緑灰色ロームブロックを含む。3~5cm大の黒褐色粘土ブロックを含む。黄灰色シルトを若干含む。土器を含む)
- 28 黄灰色砂礫 (0.3~6cm大の礫層。13よりしまり弱く細砂の含み多い)
- 29 黄灰色粘土 (1~3cm大の緑灰色ロームブロックを含む。1cm大の黒褐色粘土ブロックを含む)
- 30 黄灰色粘土 (わずかにシルト混じる)

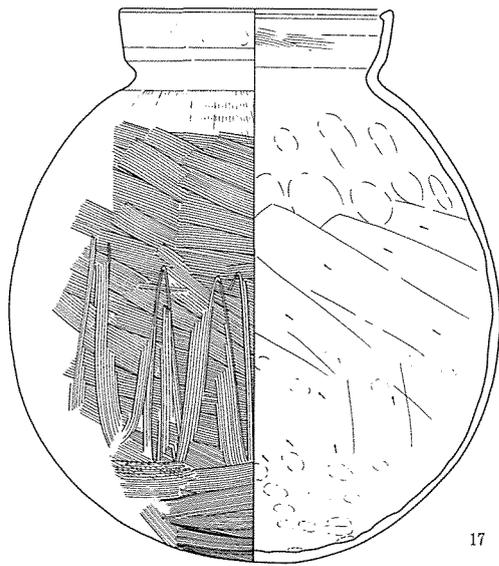
- 31 黒褐色粘質土 (0.5cm大の緑灰色粘土ブロックを若干含む。極細砂を若干含む)
- 32 黄灰色砂礫 (黄灰色粘質土を含む。0.5~8cm大の礫層)



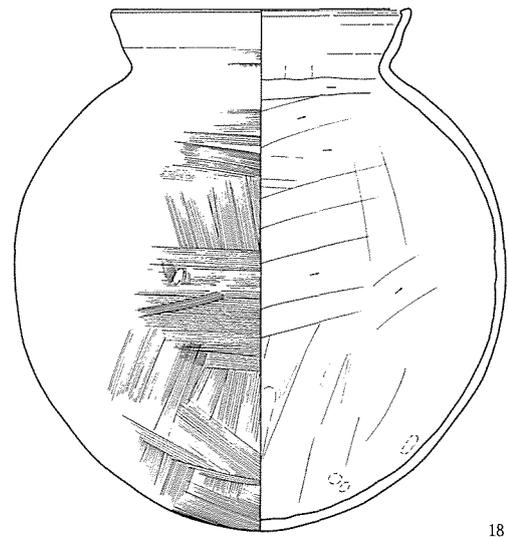
第48図 平成15年度SD-05実測図 (S=1:80)



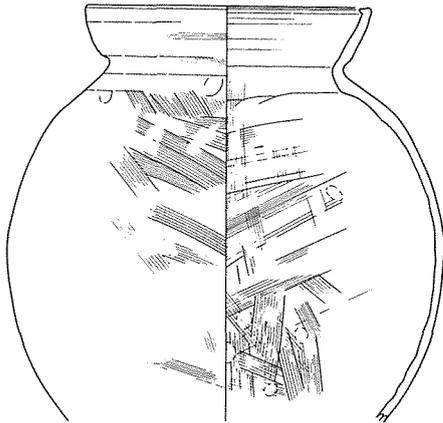
第49图 平成15年度S D-05出土遺物実測図(1)



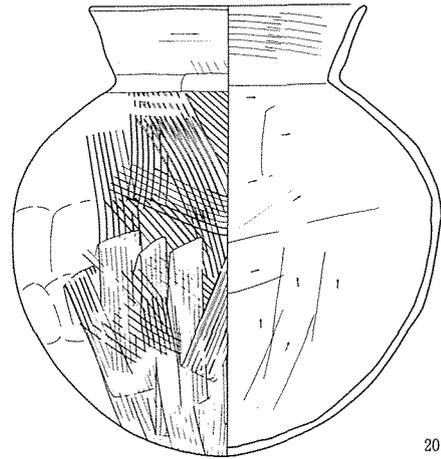
17



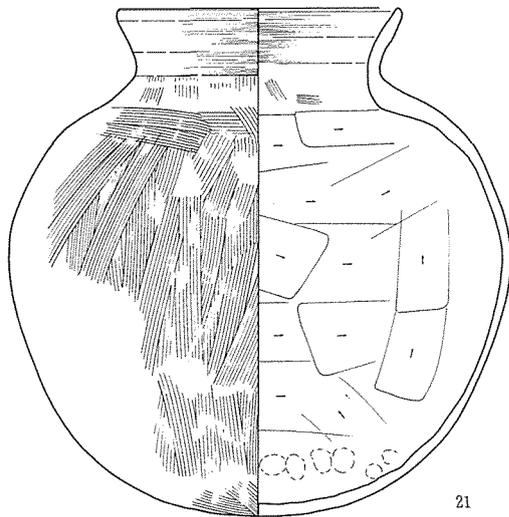
18



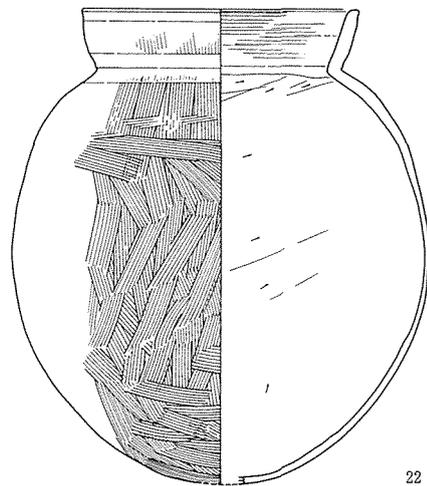
19



20



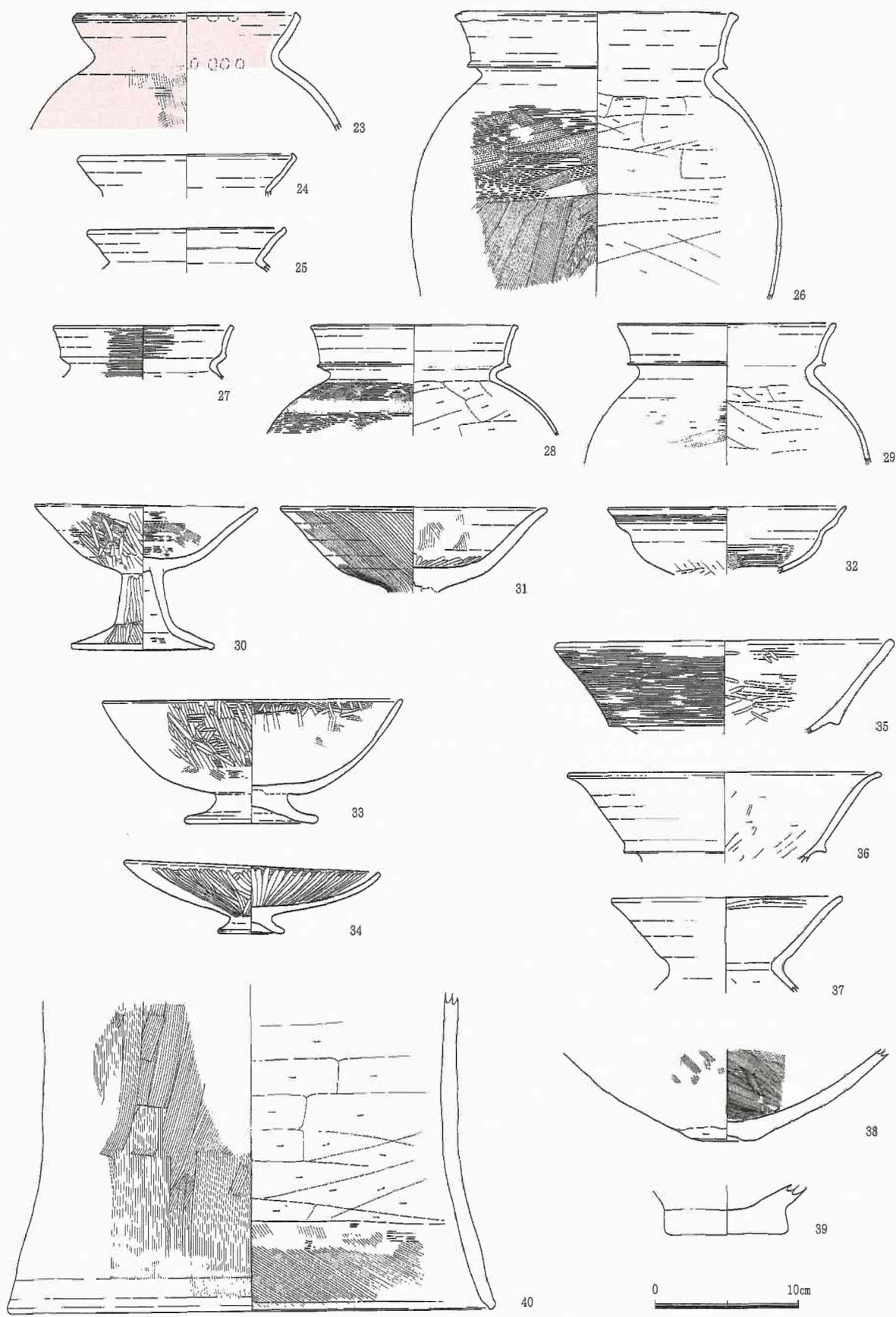
21



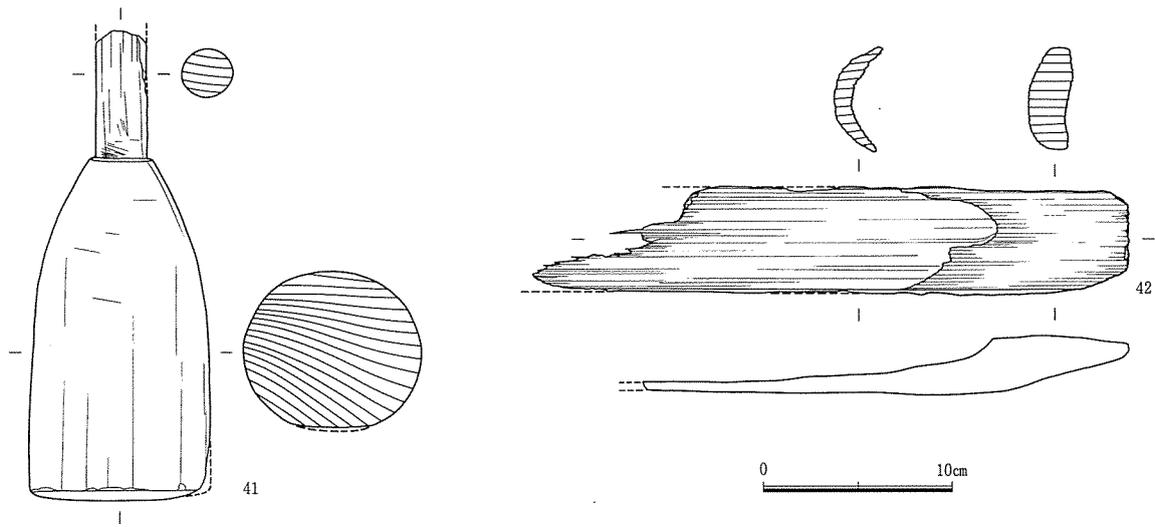
22

0 10cm

第50図 平成15年度 S D -05出土遺物実測図(2)



第51图 平成15年度S D-05出土遺物実測図(3)



第52図 平成15年度 S D -05出土遺物実測図 (4)

### 3. その他の遺構と遺物

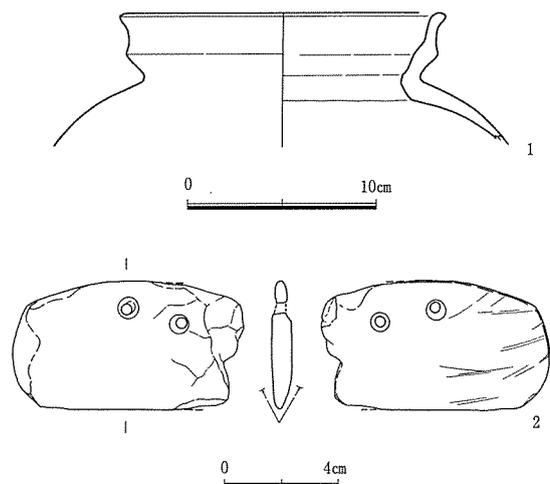
#### ピット状遺構 (第6図、ピット一覧表)

市道東側調査区で31基、市道西側調査区で4基のピット状遺構を検出した。第4層上面で検出したP-01～04は規模にばらつきがみられるものの、第7層上面で検出したP-05～31は径が13～20cm前後と同様に断面に径10cm程度の柱痕跡が観察されるものが比較的多かったが、建物を構成するには到らなかった。またSD-01の周囲に集中する傾向が見られた。市道西側調査区では、SD-05、04以西にP-33～36が比較的近接して検出され、調査区断面には第7層古墳時代中期面のピットも観察されるが、これらのピットは検出した層位から弥生時代後期あるいは中期の可能性が考えられる。

#### 遺構外出土遺物 (第53図、図版31)

平成15年度調査区の遺構外遺物として、コンテナ (容量54×43×20cm) 5箱分に相当する量が出土している。このうち市道東側調査区では、第4、7層をはじめ、S D -02上層の礫層中から多くの遺物を検出しており、コンテナ3箱分である。このうち甕 (1) 第4層中で、石庖丁 (2) は第8層下の礫層上で検出した。(1) は口縁部短く反り上がる複合口縁部で下端部から頸部への屈曲に鈍さは認められない。肩部が大きく張る球形状の体部をもつとみられる。

(2) は全体的に成形後の磨き残し部分が目立ち、片端は背側との境界で角を持つ。紐孔は背に対し平行でない。市道西側調査区では、主にS D -05、04周辺の第4～7層中で土器が出土しているが細片が多く量的にもさほどの量ではない。弥生中期の土器がC11N15から4 m北西付近の第10層中からまとまって出土しており、底径5.5cmの底部および体部片が見られる。第12層黒褐色粘土層まで掘り下げを行ったが遺構の検出は浅いピット状の遺構だけであった。



第53図 平成15年度遺構外出土遺物実測図

# ピット一覧表

平成14年度調査区

Pit名	底部高(m)	遺物有無等	Pit名	底部高(m)	遺物有無等	Pit名	底部高(m)	遺物有無等
P-01	10.21	土器片	P-57	10.645	甕片	P-110	10.65	—
P-02	10.805	—	P-60	10.71	—	P-111	10.56	土器片
P-03	10.70	—	P-63	10.55	—	P-112	10.48	—
P-04	10.64	土器片	P-66	10.65	—	P-114	10.485	土器片
P-05	10.755	—	P-67	10.70	—	P-115	10.565	土器片
P-06	10.472	—	P-68	10.66	—	SB-01	10.495	—
P-07	10.495	—	P-69	10.54	—	P-117	10.52	土器片
P-08	10.55	—	P-72	10.625	土器片	P-118	10.68	土器片
P-09	10.51	—	P-73	10.59	—	P-120	10.58	—
P-10	10.425	土器片	P-74	10.575	土器片	P-121	10.61	土器片
P-11	10.485	口縁部片	P-75	10.49	—	P-122	10.64	土器片
P-12	10.40	土器片	P-76	10.46	土器片	P-123	10.555	土器片
P-13	10.43	—	P-77	10.655	—	P-124	10.57	—
P-14	10.35	土器片	P-79	10.46	—	P-126	10.44	土器片
P-15	10.512	—	P-80	10.52	—	P-128	10.56	土器片
P-16	10.52	—	P-81	10.63	—	P-129	10.575	土器片
P-19	10.52	土器片	P-82	10.62	—	P-130	10.42	—
P-20	10.72	土器片	P-83	10.52	肩部片	P-131	10.445	—
P-21	10.60	土器片	P-84	10.41	—	P-132	10.38	—
P-22	10.69	土器片	P-85	10.56	土器片	P-133	10.46	土器片
P-23	10.56	土器片	P-86	10.405	—	P-134	10.62	土器片
P-24	10.41	土器片	P-87	10.53	壺片	P-135	10.685	土器片
P-27	10.59	土器片	P-88	10.66	—	P-136	10.655	—
P-28	10.23	底部片 口縁部片	P-89	10.51	高杯片 敷石	P-137	10.27	土器片
P-30	10.505	肩部片	P-90	10.58	口頸部片	P-138	10.52	—
P-31	10.31	口縁部片	P-91	10.46	土器片	P-139	10.455	土器片
P-32	10.02	土器片	P-92	10.42	—	P-140	10.35	—
P-33	10.33	口頸部片	P-93	10.46	—	P-141	10.455	土器片 敷石
P-34	10.36	口縁部片	P-94	10.48	—	P-142	10.71	—
P-35	10.42	—	P-95	10.56	土器片	P-143	10.85	土器片
P-36	10.36	高杯片?	P-96	10.56	—	P-144	10.65	—
P-37	10.27	—	P-97	10.49	土器片	P-145	10.77	—
P-38	10.025	—	P-98	10.54	—	P-146	10.805	—
P-44	10.04	—	P-99	10.355	土器片	P-147	10.65	—
P-45	10.53	—	P-100	10.43	—	P-148	10.63	—
P-46	10.33	—	P-101	10.32	土器片	P-149	10.47	土器片
P-47	10.41	—	P-102	10.50	土器片	P-150	10.645	土器片
P-48	10.42	土器片	P-103	10.47	土器片	P-151	10.46	土器片
P-49	10.34	土器片	P-104	10.425	土器片 敷石	P-152	10.60	土器片
P-52	10.60	土器片 敷石	P-106	10.54	—	P-153	10.505	土器片
P-54	10.55	土器片	P-108	10.43	土器片	P-154	10.41	土器片
P-56	10.72	—	P-109	10.305	土器片	P-155	10.53	口縁部片

Pit名	底部高 (m)	遺物有無等	Pit名	底部高 (m)	遺物有無等	Pit名	底部高 (m)	遺物有無等
P-156	10.58	土器片	P-182	10.42	土器片	P-214	10.63	—
P-157	10.575	土器片	P-183	10.535	—	P-215	10.505	土器片
P-158	10.485	土器片	P-185	10.63	土器片	P-216	10.665	土器片
P-159	10.49	脚部片	P-186	10.56	—	P-217	10.32	土器片
P-160	10.60	土器片	P-187	10.455	土器片	P-218	10.39	土器片
P-161	10.565	—	P-190	10.39	土器片	P-221	10.40	口縁部片
P-162	10.45	土器片	P-192	10.51	—	P-222	10.365	土器片
P-163	10.67	—	P-193	10.27	土器片 柱根	P-223	10.545	高杯片
P-164	10.56	土器片	P-194	10.765	土器片	P-224	10.515	土器片
P-165	10.66	—	P-195	10.685	土器片	P-225	10.515	甕片
P-166	10.83	—	P-196	10.57	—	P-226	10.33	高杯片
P-167	10.65	土器片	P-197	10.42	土器片	P-227	10.47	—
P-168	10.645	土器片	P-198	10.715	高杯片	P-229	10.54	—
P-169	10.625	土器片	P-199	10.71	土器片	P-230	10.36	土器片
P-170	10.455	土器片 柱根	P-200	10.48	土器片	P-231	10.47	土器片
P-171	10.57	土器片	P-201	10.50	土器片	P-232	10.465	土器片
P-172	10.375	口縁部片	P-202	10.38	土器片	P-233	10.45	土器片
P-173	10.50	土器片	P-203	10.39	土器片 柱根	P-234	10.425	土器片
P-174	10.70	土器片	P-204	10.345	土器片	P-235	10.55	土器片
P-175	10.63	—	P-205	10.54	土器片	P-236	10.57	土器片
P-177	10.625	—	P-206	10.42	土器片	P-237	10.37	—
P-178	10.45	—	P-208	10.56	土器片	P-238	9.92	—
P-179	10.575	—	P-212	10.70	土器片	P-239	10.01	—
P-181	10.39	—	P-213	10.51	土器片	P-241	10.16	砥石

平成15年度調査区

Pit名	底部高 (m)	遺物有無等	Pit名	底部高 (m)	遺物有無等	Pit名	底部高 (m)	遺物有無等
P-01	10.95	—	P-13	9.94	—	P-25	10.04	—
P-02	10.86	—	P-14	10.26	—	P-26	10.04	—
P-03	10.82	土器片	P-15	10.09	—	P-27	10.07	—
P-04	10.71	土器片	P-16	10.19	—	P-28	10.07	—
P-05	10.49	—	P-17	10.12	—	P-29	9.96	—
P-06	10.30	—	P-18	10.16	—	P-30	10.20	—
P-07	10.20	—	P-19	10.13	—	P-31	10.19	—
P-08	10.12	—	P-20	10.10	—	P-33	9.84	土器片
P-09	10.07	—	P-21	10.19	—	P-34	9.96	—
P-10	10.20	—	P-22	10.035	—	P-35	9.93	—
P-11	10.26	—	P-23	10.18	—	P-36	10.12	—
P-12	10.22	—	P-24	10.26	—			

# 出土遺物観察表

( ) 復元値 < > 推定値

遺構名	挿図番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
SE-01	第12図1	壺	(7.8)	-	-	直立気味に立ち上がり先細りとなる口縁。赤彩の塗痕有。	0.5mm以下の砂粒多	良	淡橙褐色	(口)1/5	赤彩	26
SE-01	第12図2	甕	<15.6>	-	-	頸部を強くヨコナデするく字口縁。	0.5mm以下の砂粒多 2~4mmの砂粒有	不良	黄灰色	(口~肩)1/7	煤付着	27
SE-01	第12図3	甕	(14.2)	-	-	やや厚手でしっかりした上端面をもつ複合口縁。	0.5mm以下の砂粒多 2mmの砂粒有	良	浅黄褐色	(口)1/5		27
SE-01	第12図4	甕	<16.2>	-	-	内面に肥厚するく字口縁。上端面~内面にハケ目、後のヨコナデなし	2mm以下の砂粒多	不良	(外) 黒色 (内) オリーブ黒色	(口)1/11		37
SE-01	第12図5	甕	(14.9)	-	-	中央が凹む短い複合口縁。内外面にハケ目痕。	1mm以下の砂粒多	良	にぶい黄褐色	(口)1/5	煤付着	26
SE-01	第12図6	甕	17.2	-	-	中央が凹む短い複合口縁。内外面にハケ目痕。	0.5mm以下の砂粒多	良	にぶい黄褐色	(口)3/5	煤付着	26
SE-01	第12図7	甕	(16.2)	-	-	頸部の屈曲が弱い厚手の複合口縁。口縁内外ハケ目痕。	0.5mm以下の砂粒多 2.5mm、7mmの砂粒有	良好	にぶい黄褐色	(口)1/4	煤付着	26
SE-01	第12図8	甕	<17.0>	-	-	上端が細るく字口縁。口縁内外ハケ目痕。頸部外面ハケ目痕。	1mm以下の砂粒多	やや不良	灰黄色	(口)1/9	黒斑有	26
SE-01	第12図9	高杯	-	7.75	-	脚柱短く屈曲大きい裾部。短く肉厚の脚部。脚柱部面取り状のナデ。	0.5mm以下の精緻な胎土	良	にぶい橙褐色	(脚台)完存	赤彩	26
SE-01	第12図10	器台	-	-	-	短いしっかりした鼓形器台の接合部。	1mm以下の砂粒多	良	橙色	(接合部) 1/6		37
SK-02	第15図1	甕	(19.3)	-	-	口縁外面に多条の貝殻腹縁による平行沈線。肩部に押し刺突文か。	1mm以下の砂粒多 3mm、5mmの砂粒有	やや不良	(外) 橙褐色 (内) 褐色	(口)1/6 (肩)約1/16	煤付着	12
SK-06	第20図1	高杯	-	9.2	-	脚柱から裾部へなめらかに開く。脚柱基部径2.1cmと細い。	1mm前後の砂粒多 2.5mmの砂粒有	やや不良	(外) 濃橙褐色 (内) 暗橙褐色	(脚台)完存	赤彩	2
SK-07	第22図1	甕	(14.1)	-	-	厚手のく字口縁。口縁内面はヨコハケ目後上位ヨコナデ。	1mm前後の砂粒多く 含 3mmの砂粒有	やや不良	(内外) 灰褐色	(口)1/2 (肩)約1/4	煤付着	10
SK-08	第24図1	壺	(12.4)	(8.6)	(16.7)	どっしりした肉厚の平底部と壺状の体部。口縁は屈曲して僅かに開く外面底から頸部へのナデ。	0.5mm以下の砂粒多	やや不良	(外) 褐色 (内) 淡褐色	(口~体~底) 1/4	煤付着	5
SK-08	第24図2	鉢	(8.7)	3.5	(6.35)	手捏ね成形。口縁は僅かにつまみ上げる。	1~2mmの砂粒多 4~5mmの砂粒有	良	(外) 淡橙褐色 橙褐色 (内) 褐色・橙褐色	(口)一部 (体)上半3/4 (底)完存		1
SD-01	第27図1	器台	<30.8>	-	-	口縁端面に4条の凹線と円形浮文剥離痕。	1~2mmの砂粒多	やや不良	(外) 淡橙褐色 (内) 褐色 淡橙褐色	(口)1/7		29
SD-01	第27図2	器台	<17.8>	-	-	口縁端面にヘラ描鋸歯文。脚部の可能性あり。	1mm前後の砂粒多	やや不良	(内外) 暗橙褐色	(口)1/8		32
SD-02	第29図1	壺	<25.6>	-	-	口縁上面に波状文と凹線、端面に凹線と円形浮文。	1mm以下の砂粒多	良	にぶい黄褐色	(口)1/12		17
SD-02	第29図2	甕	(21.1)	-	-	口縁端面にハケ目状工具による刻み目。頸部に突帯貼付後刻目。	1mm以下の砂粒多	良	褐色	(口)1/5		18
SD-02	第29図3	高杯	<20.9>	-	-	端部が肥厚する口縁。	1mm以下の砂粒多	やや不良	(内外) 褐色	(口)1/10		22
SD-03	第30図1	播鉢	<25.6>	-	-	備前焼 内面におろし目。	1mm以下の砂粒多 3mmの砂粒有	硬質	(内外) 赤灰色 (断) 灰色	(口)1/10		3
土器溜1	第35図1	甕	(14.4)	-	-	外面に貝殻腹縁による粗な平行沈線。内外にヘラ磨きを観察。	1mm以下の砂粒多	やや不良	(外) 淡褐色 (内) 淡褐色 淡灰褐色	(口) 1/2 (肩)3/8	煤付着	3
遺構外	第38図1	高杯	24.1	-	-	いわゆる丹後型高杯。外面剥落不明内面ヘラ磨き。	1mm以下の砂粒多く 含 3mm、8mmの砂粒有	やや不良	褐色 にぶい橙褐色	(受)ほぼ完存	赤彩有	222
SD-02	第44図1	壺	<18.8>	-	-	口縁端面重複する刻み目。頸部に粗い凹線3条と弧状の刻み目。貼付突帯はされず。	1mm以下の砂粒多	やや不良	(内外) 淡褐色	(口)1/8	黒斑	16
SD-02	第44図2	壺	(19.4)	-	-	口縁上位内面に4条のしっかりした凹線。端面、頸部に同様の凹線。	1mm以下の砂粒多 3mmの砂粒有	やや不良	(外) にぶい黄褐色 (内) 灰黄色	(口~頸)1/6		16
SD-02	第44図3	壺	(18.3)	-	-	口縁端面に3条の凹線と下垂面にも凹線後刻み目を入れる。頸部に3条の凹線を確認。	1mm以下の砂粒多	やや不良	褐色~にぶい橙褐色	(口)1/3		5
SD-02	第44図4	壺	<41.4>	-	-	口縁屈曲部に内外2対の円形浮文。頸部に独立した6条の凹線。剥落すずむ。	1mm以下の砂粒多 4mmの砂粒有	やや不良	(外) 灰黄色 (内) 黄灰色	(口)1/7	黒斑有	7
SD-02	第44図5	甕	<21.6>	-	-	口縁端面に3条の凹線と円形浮文。肩部に波状文2段とその間に8条の凹線。内面剥落不明。	1mm以下の砂粒多 2mmの砂粒有	良	(外) 褐灰色 (内) 浅黄褐色	(口~肩)1/7		14

遺構名	挿図番号	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
SD-02	第44図6	甕	<23.0>	-	-	口縁端面に2条の凹線と細い刻目。肩部剥落不明。内面頸部以下ハケ目。	1mm以下の砂粒多 3~4mmの砂粒有	やや不良	灰黄色	(口~肩)1/7	炭化物付着	14
SD-02	第44図7	甕	(13.2)	-	-	短く立ち上がる端面に1条の凹線。剥落すすむ。	1mm前後の砂粒多	やや不良	(外) 橙褐色 (内) 暗褐色 (断) 褐色	(口)1/4 (口端)1/12	煤付着	18
SD-02	第44図8	底部	-	5.6	-	平底から直線的に立ち上がる体部。体部内面へラ削り。	1~2mmの砂粒多 6mmの砂粒有	やや不良	暗褐色、褐色	(底)完存	煤付着	1
SD-02	第44図9	脚台部	-	(6.7)	-	太く短く張り出した脚台部。底部充填。	1mm以下の砂粒多	やや不良	(外) 灰色、灰黄色 (内) 黒褐色	(脚台)1/3		16
SD-02	第44図10	高杯	<17.3>	-	-	口縁は大きく屈曲してやや下垂し端部は肥厚して刻目をもつ。口縁上面に煤多く付着。	0.5mm以下の砂粒多 2mmの砂粒有	やや不良	(内) にぶい黄橙色 (外) 褐灰色	(杯)1/7	煤付着	3
SD-04	第47図1	壺	-	-	-	複合口縁。屈曲部上位がきれいに剥落し、擬口縁を観察。	1mm以下の砂粒多	やや不良	(内) 灰黄色 にぶい黄橙色 (外) 灰黄色	(頸)完存	黒斑有	7
SD-04	第47図2	壺	(15.6)	-	-	口縁から肩部へなだらかな屈曲のく字口縁。	1mm前後の砂粒多 3mmの砂粒有	不良	淡褐色	(口)1/4 (口端)一部		23
SD-04	第47図3	甕	(18.2)	-	-	下位の屈曲が甘い複合口縁。内傾する口縁端部をもつ。	1mm以下の砂粒多 2mmの砂粒有	不良	(内) 浅黄色 黄灰色 (外) にぶい黄橙色	(口~肩)1/4		13
SD-04	第47図4	須恵器杯身	<12.1>	-	-	受部は上外方へ伸び立ち上がりは直線的に内傾し先細り。	1mm以下の砂粒多	良	淡青灰色	(口)1/8		23
SD-05	第49図1	小型壺	7.6	-	7.95	体部外面ハケ目後ナデ。内面肩部へラ削り後ナデ。全体的に丁寧な作り。	0.5mm以下の精緻な胎土 1mmの砂粒有	良	褐色 橙褐色	ほぼ完存		44
SD-05	第49図2	小型壺	6.7	-	8.7	球状の体部に細く短い口縁。体部中央は多面状となる。	1mm以下の砂粒多 2.5mmの砂粒有	やや不良	褐色	ほぼ完存	赤彩	26
SD-05	第49図3	壺	9.9	-	11.9	球形の体部にやや広口の口縁。口縁及び底外周部に煤。	1mm以下の砂粒多く含 2mmの砂粒有	やや不良		ほぼ完存	煤付着 赤彩の可能性有	14
SD-05	第49図4	壺	11.7	-	14.2	やや内湾する複合口縁。体部中位に多面帯。底外周部に煤。	1mm以下の砂粒含	良好	褐色	完形	煤・炭化物付着	56
SD-05	第49図5	壺	13.6	-	19.3	ややへしゃげた球状の体部に長く外方へ伸びる口縁。体部上半粗いハケ目。底外周部に煤。	0.5mm以下の砂粒多 2mmの粒有	良	褐色 灰褐色	(口)2/3 (体)3/4	煤付着	8
SD-05	第49図6	壺	10.7	-	15.6	やや内湾気味に開く口縁。器壁薄く丁寧な作り。	1mm以下の砂粒含 3mmの砂粒有	良	灰褐色	(口)1/2 (体)2/3	赤彩 煤・炭化物付着	24.87
SD-05	第49図7	壺	(10.6)	-	-	口縁中位に稜有。口縁内面に粗なへラ磨き。	2mm以下の砂粒多 3mmの粒有	良	褐色	(口~肩)1/3	煤付着	158
SD-05	第49図8	壺	(22.8)	-	-	大きく開きしっかりした端面をもつ。下端部の稜も鋭い。	1mm前後の砂粒多 3mm, 6mmの砂粒有	やや不良	橙褐色	(口)1/4		131 137 138
SD-05	第49図9	壺	(15.5)	-	-	内傾する口縁。口縁外下半にハケ目痕。	1mm以下の砂粒多 2mmの砂粒有	不良	褐色 灰褐色	(口)1/3 (頸)1/2	黒斑有	35
SD-05	第49図10	壺	(19.0)	-	-	直線的に開く複合口縁。	1mm以下の砂粒多 2mm, 5mmの砂粒有	やや不良	褐色	(口~頸)1/4	黒斑有 煤付着	30
SD-05	第49図11	壺	11.0	-	-	短く内傾する口縁。肩部に平行沈線と連続刺突文。	1mm以下の砂粒多	良	橙褐色	(口~肩) ほぼ1		72
SD-05	第49図12	壺	(17.3)	-	-	器壁厚く直立気味に開く複合口縁。内面にハケ目痕。	1mm前後の砂粒多	やや不良	褐色	(口)1/6		128
SD-05	第49図13	壺	16.6	-	-	器壁厚く直立気味に開く複合口縁。口縁部内外面ハケ目のちヨコナデ。肩部外面にへラ記号。	1mm以下の砂粒多 3mm, 7mmの砂粒有	やや不良	褐灰色	(口)2/3 (肩)ほぼ完存	黒斑有 煤付着 へラ記号	21
SD-05	第49図14	壺	(13.9)	-	(31.1)	長胴の体部に内傾する口縁。口縁から頸部への屈曲は甘く、頸部と肩部の屈曲強。肩部部分的に波状文。	1mm前後の砂粒多 3mm, 5mmの砂粒有	良	(外) 暗橙褐色 褐色 (内) 灰褐色 暗褐色	(口)3/8 (肩)15/16 (体)約3/4 (底)約1/4	煤・炭化物	27 88
SD-05	第49図15	壺	-	-	-	筒状の頸部に断面三角形の貼付突帯8条を観察。	3mm以下の砂粒を多	良	褐色	(頸)1/4		154
SD-05	第49図16	壺	-	-	-	頸部に棒状工具による弧状の連続刺突文3段。貼付突帯なし。	0.5mm以下の砂粒を多 4mmの砂粒有	やや不良	(外) 黄橙色 (内) 灰黄色	(頸)一部		128
SD-05	第50図17	甕	14.4	-	29.5	下膨れ長胴体部に直立気味な口縁部。頸部のヨコナデにより複合口縁状。体部中位に波状文風の縦ハケ目周囲。	2mm~3mm砂粒多 5~7mmの砂粒有		淡褐色	(口)1/2 (体)ほぼ完存	煤・炭化物付着 黒斑有	9
SD-05	第50図18	甕	(15.8)	-	(27.8)	球形の体部に内面が肥厚するく字口縁。	1mm前後の砂粒多 2~4mm砂粒有	やや不良	(外) 黄褐色 (内) 灰褐色	(口)1/4 (肩)約1/2 (体)約1/2	煤・炭化物付着 黒斑	19
SD-05	第50図19	甕	15.1	-	-	球形の体部に内面が肥厚するく字口縁。口縁部のヨコナデ丁寧。	1mm前後の砂粒多 3mm, 4mmの砂粒有	良	(内外) 灰褐色	(口)約3/4 (肩)約3/4 (体)約1/2	煤・炭化物	18
SD-05	第50図20	甕	14.5	-	24.1	体部多面状の球形。く字口縁は先端を摘み上げる。体部粗いハケ目。	2~3mmの砂粒多	良	褐色	(口)約2/3 (体上半)1/4 欠	煤・炭化物付着	109 110 111

遺構名	挿図番号	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	残存状況	備考	遺物登録番号
SD-05	第50図 21	甕	14.8	-	27.2	横楕円形の体部からなだらかに開くく字口縁へ続く。口縁内外にハケ目後ヨコナデ。	2mm以下の砂粒多 5mm, 8mmの砂粒有	やや不良	(外) 口縁部 淡黄褐色 他褐色	(口)完存 (体)1/2	煤・炭化物 多く付着	23
SD-05	第50図 22	甕	14.5	-	25.45	やや長胴の体部に短く外反するく字口縁。口縁部ハケ目後ヨコナデ。	1mm前後の砂粒僅かに含	良	褐色	(口)完存 (体)1/2	煤付着 黒斑有	17
SD-05	第51図 23	甕	(15.4)	-	-	口縁端面をもちやや内面が肥厚気味のく字口縁。	1mm以下の砂粒含	やや不良	淡橙褐色	(口)1/3 (肩)一部	赤彩 煤付着	123
SD-05	第51図 24	甕	<14.8>	-	-	口縁部分を内側に摘み出すく字口縁。	0.5mm以下の砂粒含	良	褐色	(口)1/2	煤多く付着	149
SD-05	第51図 25	甕	(13.6)	-	-	口縁端部がわずかに肥厚するく字口縁。	1mm以下の砂粒多	やや不良	褐色	(口)1/4	煤付着	7
SD-05	第51図 26	甕	(18.8)	-	-	やや丸みを持つ口縁端面をもつ。口縁内外下半にハケ目痕。	1mm以下の砂粒多 2mmの砂粒有	良	褐色	(肩~体) 1/6	煤多く付着	105
SD-05	第51図 27	甕	(12.2)	-	-	小形でややぼつたりした作り。口縁下端部摘み出しなし。内外ハケ目痕。	1mm以下の砂粒多 3mm, 8mmの砂粒有	良	黄褐色	(口)1/3	煤付着	36
SD-05	第51図 28	甕	(14.0)	-	-	肩部回転を利用したヨコハケ。	0.5mm以下の砂粒多	やや不良	灰褐色	(口)1/3 (肩)1/4	黒斑有	50
SD-05	第51図 29	甕	15.1	-	-	シャープな作りで口縁下端部の縁は鋭い。肩部回転を利用した横ハケ目。	1mm以下の砂粒多 2.5mmの砂粒有	良	(内) 暗褐色	(口)1/2 (肩)2/3	煤多く付着	7
SD-05	第51図 30	高杯	15.4	9.7	10.5	口縁内面ハケ目後粗な放射状磨き。	1mm以下の砂粒多 3~5mmの砂粒含	やや不良	橙褐色	(口)2/3 (脚柱)完存		150
SD-05	第51図 31	高杯	(18.3)	-	-	杯外面放射状ハケ目後上位上半ヨコナデ。杯内面ヘラ磨き底部のみ。	0.5mm以下の砂粒多 2~4mmの砂粒有	やや不良	褐色	(口)1/5 (杯) 約1/2	黒斑有 煤付着	33
SD-05	第51図 32	鉢	16.6	-	-	丹後系。口縁外面下半にハケ目痕。杯底部外面にヘラ削り、内面ハケ目。	1mm以下の砂粒含	良	橙褐色	(口~杯)1/2		146
SD-05	第51図 33	低脚杯	20.65	8.7	8.75	杯内面削り後一部ハケ目後粗な磨き。杯底部接合面に刻み。	0.5mm以下の砂粒多 1~3mmの砂粒有	やや不良	(外) 褐灰色・黒色 (内) 灰黄褐色	(口)1/3 (杯底)完存 (脚台)約1/2	煤付着 (口縁外面)	136
SD-05	第51図 34	低脚杯	17.75	3.9	4.8	杯部内外脚接合後の放射状ヘラ磨き。	0.5mm以下の精緻な胎土 1mmの砂粒有	良	(外) 灰黄色 (内) 黄褐色	ほぼ完存		92
SD-05	第51図 35	器台	(23.2)	-	-	鼓形器台。受部外面撫描平行沈線。内面ヘラ磨き。	1.5mm以下の砂粒含	やや不良	橙褐色	(受)1/6		148
SD-05	第51図 36	器台	(21.5)	-	-	鼓形器台口縁部先端は外方へ摘み出され稜も鋭い。内面ヘラ磨き。	1mm以下の砂粒多 2~3mmの砂粒有	やや不良	褐色	(受) 1/5		46
SD-05	第51図 37	器台	<16.0>	-	-	稜のない鼓形器台。受部内外横ヘラ磨き。	1mm前後の砂粒多	やや不良	淡橙褐色	(口)1/10 (受)1/6 (接合部)1/4		164
SD-05	第51図 38	壺	-	最大 5.5 最小 4.8	-	底部中央及び外周をヘラ削りした平底。内面ハケ目。外面ハケ目、ナデ。	0.5mm以下の精緻な胎土	やや不良	褐色	(底)完存	黒斑有	71
SD-05	第51図 39	底部	-	8.6	-	しっかりした厚い平底。内外ナデ。	2mm以下の砂粒多 3mmの砂粒有	不良	(外) 褐色 (内) 黒褐色	完存	黒斑有	117
SD-05	第51図 40	瓶	-	33.6	-	内面下位ハケ目後の上位ヘラ削り。底部内面煤多く付着。	1mm以下の砂粒多	良	褐色	(底)約1/6	煤付着	119
SD-05	第52図 41	木製品 製木植	L 25.2	w 9.6	T (8.6)	丸棒状の持手から円座をとって円錐状の体部へ続く。一部炭化する。				ほぼ完存	広葉樹	68
SD-05	第52図 42	舟形木製品	L(31.7)	w 5.85	T 2.65	舟外底は丸く、V字状に繰り抜く。				一端部欠	針葉樹	170
市道東側調査区	第53図 1	甕	16.5	-	-	短く外反する厚手の複合口縁。肩部張る。内外剥落不明。	1mm以下の砂粒多 7mmの砂粒有	良	橙褐色	(口~肩)1/2	内面剥落 著しい	19
市道東側調査区	第53図 2	石廬丁	L (8.1)	w 4.56	T 7.0	肩部を欠損。紐孔は不揃いで両面穿孔。紐孔外径6.5mm。刃部は磨耗。やや粗雑な作り。			淡灰色	一端部欠	緑色千枚岩	47

#### 第4節まとめ

今回の調査地は、古郡家遺跡として認知されている範囲の北東境界にあたる。この一帯の地形は、森福寺が建立する標高20mの丘陵先端部から北東へ延び現古郡家集落が立地する標高14～20mの台地、さらに台地からの流れで徐々に標高を下げる低地とがあり<sup>①</sup>、大路川はこの丘陵・台地の東裾を流れ谷口付近で大路山へ向けて北上する。現在知られる遺跡の範囲は、台地の先端部に位置する(財)きのこセンター菌茸研究所の北東から念仏橋手前、大路川を越えた県道鳥取・郡家線までの一帯、おおよそ南北400m弱×東西500mの範囲である。地盤がしっかりした丘陵および台地上を中心とする地域は現在のところ範囲に含まれていない。今回の調査地は、尾根筋に造られたとみられる集落から念仏橋まで直線で結ばれる県道八坂・正連寺線によって平成14年度調査区と平成15年度調査区とを介する。ともに丘陵から下る舌状微高地の先端部外縁にあたり、大路川の沖積作用によって形成された標高10～11mを測る平野部に立地、平成14年度調査区は大路川の自然堤防上にあたりとみられる。

#### 平成14年度の調査

平成14年度調査区では、標高10.54～10.89mで掘立柱建物4棟、井戸1基、土坑9基、溝状遺構17条、土器溜2基、集石遺構1基、ピット198基を検出した。遺物はコンテナ(容量54×34×20cm)約36箱分に相当する量が出土している。弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、石斧、砥石、井戸側(井筒)、柱根などである。時期的には弥生時代中期後葉、後期後半～古墳時代前期、中・後期、中世～近世・近代の遺構、遺物である。

掘立柱建物4棟は標高10.72～10.77m、調査区で比較的分散して配置している。SB-03の周囲には柱根や柱痕跡を観察するものなど多数のピットが密集しており、掘立柱建物の分布は南西側へ広がるものと想定される。また各建物を構成する柱穴から若干の土器細片を検出しているが、時期決定の決めとなり難しく、SB-02、03については古墳時代中後期の赤彩高杯片や須恵器片、竈片を出土していること、周辺ピットの状況や検出面などを考慮して、古墳時代中・後期と推測される。SB-01と02は同様の軸をもつことからほぼ並存する建物と思われる。SB-02と切り合い関係にあるSB-04は少なからず上部削平を受けており、現状では梁行1間であるが2間であった可能性が考えられる。また建物西側の桁行にSD-09が重なり本来同一で布掘構造をもつと考えられよう。この布掘構造をもつ建物については昭和48年度の久末40区<sup>②</sup>(弥生中期後葉あるいは古墳時代前期)や六部山5号墳丘下(弥生時代後期後半)の調査<sup>③</sup>で規模も同様な掘立柱建物が出土されており、SB-04も柱穴の出土遺物から弥生時代後期後半期が推定されることからある時期、地域的な特色の可能性も考えられる。

土坑9基のうち、隅丸方形あるいは隅丸長方形の平面形をもつものが目立ち、SK-01、02をはじめSK-06、07、08とみられる。この方形のプランをもつ土坑については、弥生時代後期後葉～古墳時代前期に多いことが既に指摘されており<sup>④</sup>、古墳時代中期では円形、楕円形の平面形をもつ土坑が多くなる。今回検出された土坑も、SK-01、02は弥生時代後期後半、SK-06、07は古墳時代中期にあたり、古墳時代中期においても規模は縮小されるものの系譜的に継承されているようである。長楕円形の平面形をとるSK-03、04、05については、同様な主軸をとることから造り替えを含め同様な時期とみられ、出土した土器細片から一応弥生時代後期後半期が与えられる。ただ、長楕円形の平面形をもつ土坑は弥生中期に多くみられ久末40区でも検出されており、土壌墓かなど性格の検討も必要である。これら平面の異なる土坑は、系譜、性格、時期の問題など多くの課題を合わせ持つ。

なお、今回土坑として扱ったSK-08であるが、中央の柱痕跡をもつしっかり掘り込まれたピット、排水溝とみられるSD-17の存在などから十分に竪穴住居としての可能性を残す。ただこの時期、それほど広大な自然堤防が形成されていた様子は窺えず、竪穴住居からなる居住域がこの地で営まれたとは考え難い。おそらく工房など、ある特定の用途として利用された建物であったと考えられよう。すぐ西側に配置する井戸SE-01についても、調査区断面からSK-08埋没後の時期とみられるが、井戸側(井筒)

掘立柱建物一覽表

調査区	遺構名	桁×梁 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	平均柱間		面積 (m <sup>2</sup> )	主軸方向	出土遺物等	時期
					桁行 (m)	梁行 (m)				
平成14年度調査区	S B-0 1	3×1	5.20	2.15	1.73	2.09	11.2	N-57°-W	土器細片	(古墳時代中・後期)
〃	S B-0 2	(2×1)	3.00	3.00	1.53	3.00	9.0以上	N-34°-E	土器細片、高杯片、(須)高杯片	(古墳時代中・後期)
〃	S B-0 3	(2×2)	3.30	3.15	1.62	1.58	10.4	N-57°-E	高杯片、甍片、柱根	(古墳時代中・後期)
〃	S B-0 4	2×1	3.50	2.90	1.74	2.90	10.2	N-15°-E	弥生甍片、蓋片、鼓形器台片	(弥生時代後期後半)

( ) は遺存値、推定

井戸・土坑・溝状遺構一覽表

調査区	遺構名	法 量 (cm)			底部標高(m)	平面形	断面形	主軸方向	出土遺物等	時期
		長軸	短軸	深さ						
平成14年度調査区	S E-0 1 (旧S K-0 9)	333	316	178	8.92	不整円形	不整形	—	井筒、壺、甍、高杯、器台	(古墳時代中期後半)
平成14年度調査区	S K-0 1	227	170	35	10.39	隅丸長方形	不整逆台形	N-3°-W	甍、鼓形器台片	弥生時代後期後半
	0 2	238	190	36	10.33	隅丸長方形	不整逆台形	N-79°-W	甍、底部片	弥生時代後期後半
	0 3	142	90	19	10.52	不整長楕円形	不整碗形	N-47°-W	胴部片、器台片	(弥生時代後期)
	0 4	200	57	34	10.36	不整長楕円形	不整逆台形	N-59°-W	胴部片、底部片	(弥生時代後期)
	0 5	254	60	31	10.38	長楕円形	不整碗形	N-59°-W	胴部片	(弥生時代後期)
	0 6	101	101	9	10.63	不整隅丸方形	不整皿状	N-57°-W	甍、高杯	古墳時代中期前半
	0 7	138	133	19	10.38	不整隅丸方形	不整碗形	N-16°-E	壺、甍、高杯、角礫	古墳時代中期前半
	0 8	435	412	19	10.42	不整隅丸長方形	皿状	N-18°-E	壺、高杯片	(古墳時代中・後期)
	1 0	204	149	42	10.15	不整楕円形	不整碗形	N-27°-E	甍片	(古墳時代中・後期)
平成14年度調査区	S D-0 1	(1660)	195	27	10.58	溝状	不整皿状	N-89°-E	壺、器台片	弥生時代後期中葉
	0 2	(1023)	125	29	10.47	溝状	不整すり鉢状	N-39°-E	壺、甍、高杯、鉢、底部片	弥生時代中期後葉
	0 3	(1580)	(185)	93	9.63	溝状	不整碗状	N-10°-E	須惠器片、陶磁器	近世～近代
	0 4	220	65	13	10.43	溝状	不整皿状	N-10°-E	土器細片	
	0 5	(1218)	53	12	10.52	溝状	不整碗状	N-17°-E	—	(近世～近代)
	0 6	(1770)	(248)	18	10.47	溝状	皿状	N-12°-E	高杯片	(近世～近代)
	0 7	(760)	49	12	10.42	溝状	不整碗状	N-17°-E	—	(近世～近代)
	0 8	703	56	6	10.60	溝状	皿状	N-18°-E	高杯片、土器細片	(近世～近代)
	0 9	(313)	33	5	10.70	溝状	皿状	N-17°-E	土器細片	
	1 0	514	66	14	10.53	溝状	碗状	N-33°-E N-53°-E	甍、鉢、底部片	弥生時代後期後半
	1 1	488	35	5	10.62	溝状	皿状	N-49°-E N-67°-E	—	(弥生時代中期後半)
	1 2	486	72	16	10.61	溝状	碗状	N-23°-E N-58°-E	脚、裾部片、底部片	弥生時代後期後半
	1 3	117	33	8	10.67	溝状	不整皿状	N-83°-E	口縁部片	(弥生時代中期後半)
	1 4	(585)	43	5	10.71	溝状	皿状	N-69°-W N-88°-W	高杯、土器細片	古墳時代中期
	1 5	460	45	10	10.71	溝状	不整碗状	N-68°-W	高杯、土器細片	古墳時代中期
	1 6	210	41	14	10.52	溝状	不整皿状	N-50°-W	高杯、土器細片	古墳時代中期
	1 7	(216)	42	6	10.60	溝状	不整皿状	N-31°-E N-55°-E	胴部片	古墳時代中・後期
平成14年度調査区	土器溜 1	180	75	(12)	10.66	—	—	(N-46°-E)	甍、器台、脚台部	弥生時代後期後半
	土器溜 2	140	91	8	10.67	不整楕円形	不整皿状	N-12°-E	壺、甍、高杯、器台、脚台部	弥生時代後期後半
平成14年度調査区	集石遺構	162	110	19	10.49	長楕円形	不整形	N-18°-E	甍、土器細片	(近世)
平成15年度調査区	S K-0 1	134	91	10	10.66	不整隅丸長方形	皿状	N-18°-W	高杯脚柱部片、土器細片	古墳時代中期
	0 2	199	133	42	10.40	隅丸長方形	逆台形状	N-77°-W	—	(近世)
	0 3	98	68	6	10.33	不整楕円形	皿状	N-38°-W	底部片	(弥生時代後期)
平成15年度調査区	S D-0 1	(2160)	66	59	10.03	溝状	U字状	N-8°-W	土器細片	古墳時代中期
	S D-0 2	(1228)	283	70	9.47	溝状	不整V字状	N-31°-E	壺、甍、高杯、脚台部、自然木、板	弥生時代中期後葉
	S D-0 3	(1450)	120	54	9.99	溝状	不整V字状	N-33°-E	土器細片	(弥生時代中期後半)
	S D-0 4	(1220)	510	77	9.78	溝状	碗状	N-10°-E N-25°-E	壺、甍、(須)杯身、板、杭	古墳時代後期前半
	S D-0 5	(1110)	670	152	9.07	溝状	不整碗状	N-31°-E	壺、甍、高杯、鉢、自然木、板、木槌、舟形木製品	古墳時代前期前半

( ) は遺存値、推定

下位の礫層から古墳時代前期あるいは中期後半の年代が与えられる。近くに河川があるに係らず丸太を剥り抜いた井戸側（井筒）をもつ大規模な井戸がみられることで、神聖な水を得るためあるいは手工業用水等として効率的に水を用立てる必要あったとも考えられよう。ただ、工房域とするには関連するような未製品、鉾滓などの遺物は今回検出されていない。

今回、平成14年度調査区東側の大路川近くでは近世・近代にかけて河川地帯であり、元々大路川の自然堤防にあたることから活発な開発があったとみられる。この地に人の手が加わったのは弥生中期と推定されるSD-02（あるいはSD-01もか）で、この時期この一帯は生業活動の対象とならなかったとみられる。その後、複数期の遺物を含む包含層が遺構面を覆い、あたかも上流からの遺物が礫混じりとなって堆積、客土されたような状況であった。よって便宜上、遺構面2面を検出したものの、純粋な単一期の面とはならず、削平などの可能性も考慮に入れて、遺構に純粋に伴うものとそうでない遺物との判別が難しい部分もあり、遺構埋土の遺物だけでは一概に時期の判定ができない遺構も多々みられる。

また、弥生時代中期の面に関しては、残念ながら基盤層を断ち割るなどの確認がやや不十分で、平成15年度調査区の状況を加味すれば、調査区西側下層に若干の遺構が内包する可能性もあったのではないかと思われる。ただ地形的に、SB-01・04、SE-01およびSK-08などが立地する部分が今回遺跡の主要部分とみられ、弥生時代後期にここに地盤を築き、その後古墳時代中期になって本格的にこの地で活発な開発活動が行われたと言えよう。

#### 平成15年度の調査

平成15年度調査区では、標高10.54～10.86mで土坑3基、溝状遺構5条、ピット35基を検出した。遺物はコンテナ（容量54×34×20cm）約25箱分に相当する量が出土している。弥生土器、土師器、須恵器、石庖丁、木槌、舟形木製品、梯子、杭などである。時期的には弥生時代中期後葉、後期後半～古墳時代前期、中・後期の遺構、遺物である。平成15年度の調査区は、一言でその特徴を記すなら「溝状遺構帯」と言えよう。弥生時代中期後葉SD-02を皮切りに、SD-03、時期を置いて古墳時代前期のSD-05、古墳時代中期のSD-01、後期のSD-04と並存する時期もあろうが大雑把にその変遷をたどることができる。地形的にも平成14年度調査区中位から北西方向へ徐々に地盤を下げ、平成15年度調査区では更に北西へ向けて標高を下げていく様子が黒褐色粘土やその下層の緑灰色粘土の状況から窺える。また、調査区断面や掘り下げの際、随所に砂礫層の広がり確認され、SD-02埋土および上層の堆積状況、SD-05の埋没状況などからも、この地では少なくとも弥生時代中期後葉、古墳時代前期前葉期の2度に渡って、礫の流出を伴う大規模な自然災害があったと考えられる。それは、SD-05にみられる人工的に手が加えられた急傾斜の壁面、礫層上層での地鎮祭祀と考えられる赤彩壺、甕の完形土器群の存在から窺える。弥生後期後半にこの一帯に進出したものの氾濫原であることを思い知らされ、この地が落ち着いた古墳中期前半になってみたび低地へ向けて活動を始めたとの推測が得られる。

#### 古郡家遺跡の概観

今回の調査で、現古郡家集落が立地する台地から下位の北へ広がる低地は度重なる礫層、砂層の存在から氾濫原であり、立地的に居住に適さない一帯とみられる。唯一大路川によって形成された小規模な自然堤防上が低地への開発の足がかりとなり、そこから活用を場を広げたと考えられる。

古郡家周辺の遺跡の調査は、昭和48～50年度にかけて久末・古郡家地区<sup>6)</sup>、伊勢谷、湯谷地区<sup>6)</sup>、大路川左岸部<sup>7)</sup>で行われている。報告書によれば、昭和48年度の久末・古郡家地区の調査では、明確な遺構があったのは久末地区の38区と40区で、ともに大路川の右岸自然堤防上に立地する。また、翌年度行われた古郡家・美和地区の境界谷部に位置する伊勢谷・湯谷地区で、谷底を臨む段丘状の斜面で遺存するクロボクの下から掘立柱建物や多数のピットが検出され、古墳、奈良・平安期の遺物が出土、古墳期から谷の開発行為が始まったとの見解が示されている。また、古郡家集落南東400mに位置する六部山3号墳の西丘陵先端部では古墳墳丘下で弥生時代後期の掘立柱建物、土坑が検出されている<sup>8)</sup>。これら

の調査では今回の調査同様に弥生時代中期の長楕円形をもつ土坑や古墳時代前期の隅丸方形・長方形のプランをもつ土坑、掘立柱建物に布掘り状の溝を伴う例が検出されている。時期・地域的な特徴なのかなど今後の課題であるが、古郡家遺跡の性格を裏付けるもう一つの特徴として北近畿系の土器の出土を挙げることができる。今回も土器溜1（挿図なし）や包含層遺物（第38図1ほか）から北近畿系の土器が出土している。胎土や赤っぽい色調・焼成などから在地で製作されたとは考え難く、北近畿からの搬入かどこか中継地を経由したものなのか等はこれからの確認となる。古郡家から北1km弱にそびえる標高105mの大路山の山裾には大路山遺跡、西大路土居遺跡が知られており、特に調査の行われた西大路土居遺跡では弥生時代後期後半に畿内第五様式系甕や北近畿系の大量の土器が出土しており<sup>9)</sup>、ある面特殊な集落としての位置付けが成されている。しかし、北近畿系の土器、特に甕については千代川右岸地域では点々と出土がみられ、六部山古墳群下層遺跡の弥生時代後期後半の土坑SK-02で丹後型高杯、器台数点が相伴しており、六部山3号墳出土のいわゆる丹後型円筒埴輪の存在を考慮すると、この地域が北近畿地域と深く繋がっていた可能性が大きい。大路山西裾に展開する西大路土居遺跡はあくまで前衛的な集落であったと理解することもできよう。

古郡家遺跡の背後丘陵には鳥取平野地域での古墳時代初頭の要となる美和32号墳をはじめ、因幡地域最古の前方後円墳と言われる六部山3号墳、その系譜を引く全長90mを測る古郡家1号墳が控えており、それらの築造の基盤となった集落の所在は明らかとなっていない。これらの前段として越路谷果樹園で出土した横帯二区流水文をもつ外縁紐2式に分類される高さ44.5cmの越路銅鐸、西大路土居遺跡の包含層中から出土した中細形B類とみられる銅剣のもつ意義をもっと深く考えていく必要もあろう。今回の調査で古郡家遺跡では弥生時代後期後半、古墳時代中期前半に平野部での活動が活発となり、次第に平野部へ活動の場を広げていった状況が明らかとなった。それ以前の集落は低地の状況からあくまで丘陵からそう遠くない台地上、および自然堤防上に展開していたと考えられる。津ノ井丘陵でこれまでに複数の住居の調査が行われてはいるが、あくまで背後の古墳群の存在を考えた場合、古郡家遺跡周辺にその基盤を置く勢力を重要視しなければならない。いずれにせよ、古郡家遺跡が鳥取平野南部において重要な位置を占めることについては誰も異論の余地はないであろう。立地的に丘陵裾部に展開する地盤のしっかりした台地上に居住域が存在したとしか考えられず、現集落の存在からその内容の把握は困難ではあろうが、今後小規模な調査の積み重ねにより明らかにしていくしかないのではと考える。古郡家遺跡の初源や盛期、集落を特徴付けるものなど、今後の地道な調査成果の積み重ねを待ちたい。

## 註

- (1) 豊島吉則「地質及び地形について」『鳥取市文化財報告書Ⅱ 伊勢谷・湯谷遺跡発掘調査報告書』1975年
- (2) 鳥取市教育委員会『鳥取市文化財報告書Ⅰ 久末・古郡家遺跡発掘調査報告書』1974年
- (3) 鳥取市教育委員会『六部山古墳群発掘調査報告書—六部山5・41・42・43・44号墳の調査』1991年
- (4) (財)鳥取市教育福祉振興会『西大路土居遺跡Ⅱ』1997年
- (5) (2)と同
- (6) 鳥取市教育委員会『鳥取市文化財報告書Ⅱ 伊勢谷・湯谷遺跡発掘調査報告書』1975年
- (7) 鳥取市教育委員会『鳥取市文化財報告書Ⅲ 松原谷田遺跡Ⅱ・大路川遺跡調査概報』1976年
- (8) 鳥取市教育委員会『六部山古墳群発掘調査報告書—六部山5・41・42・43・44号墳の調査』1991年  
六部山5・42・44号墳築造前の遺構として、標高30～33mの丘陵上に弥生時代後期後半期、古墳時代前期（報告による）の掘立柱建物、土坑が検出されている。古墳の築造により墳丘外の遺構については削平された可能性もあり、一部布掘状のピットをもつ溝や隅丸長方形の土坑を伴う掘立柱建物の存在など、特殊な性格付けの必要があろうが、ある時期継続的に使用された地域でもある。丘陵地先端付近が古墳築造以前に利用されていた証でもあろう。
- (9) (財)鳥取市教育福祉振興会『西大路土居遺跡』1993年



圖

版



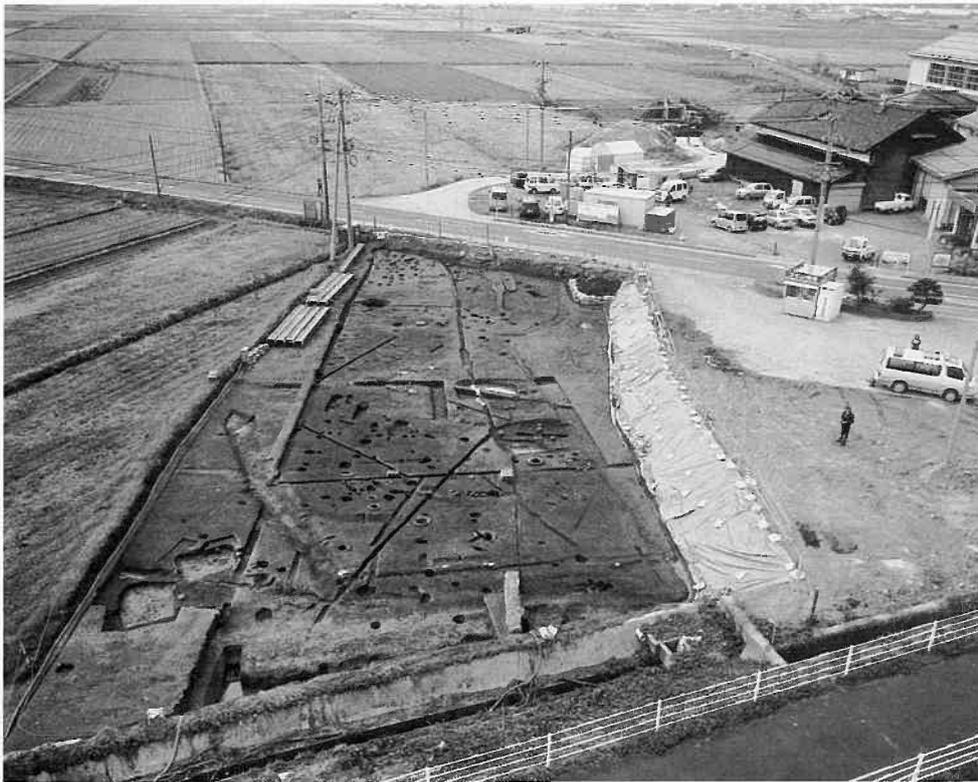


調査地遠景（北東上空から大路川および久末・古郡家集落を望む）



平成14年度調査区全景（南西上空から）

図版 2



平成14年度調査区  
全景  
(南東上空から)



平成15年度調査区  
全景  
(北西上空から)



平成14年度調査区  
断面C1杭周辺  
(北東から)



平成14年度調査区  
断面C2～C3杭周辺  
(北東から)



平成14年度  
Tr-1 北東壁面  
(南西から)

図版 4



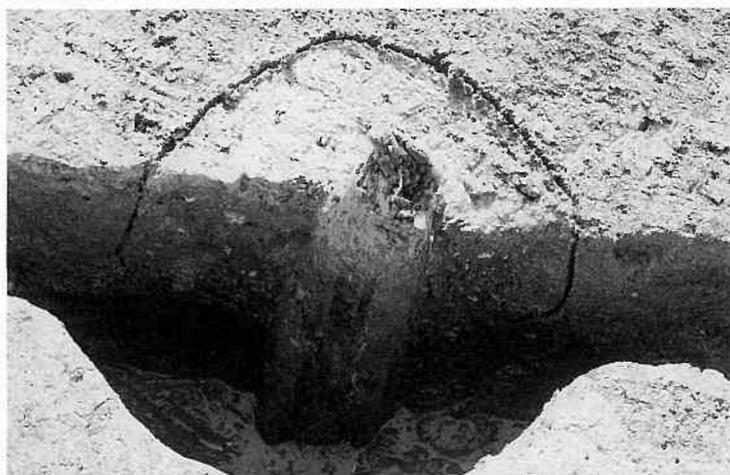
平成14年度  
SB-01検出状況  
(北西から)



平成14年度  
SB-02検出状況  
(南東から)



平成14年度  
SB-03検出状況  
(北東から)



平成14年度  
SB-03内P-193断面  
(北から)

平成14年度  
SB-03内P-207  
検出状況（北東から）



平成14年度  
SB-04検出状況  
（西から）

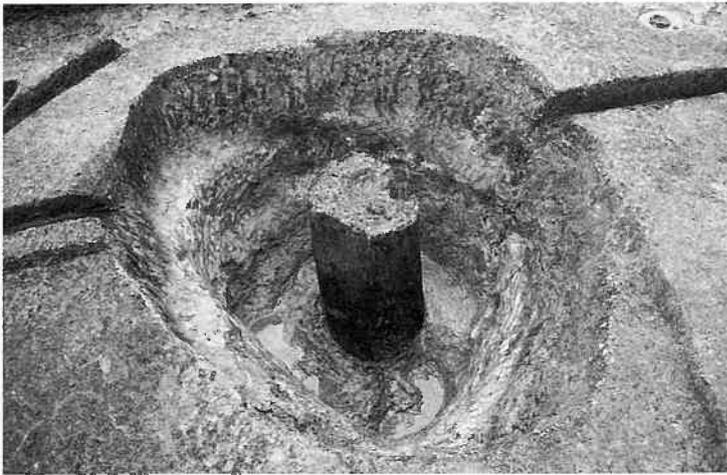


平成14年度調査区南西端部ピット検出状況（北西から）

図版 6



平成14年度  
SE-01断面  
(北西から)



平成14年度  
SE-01井筒検出状況  
(北東から)

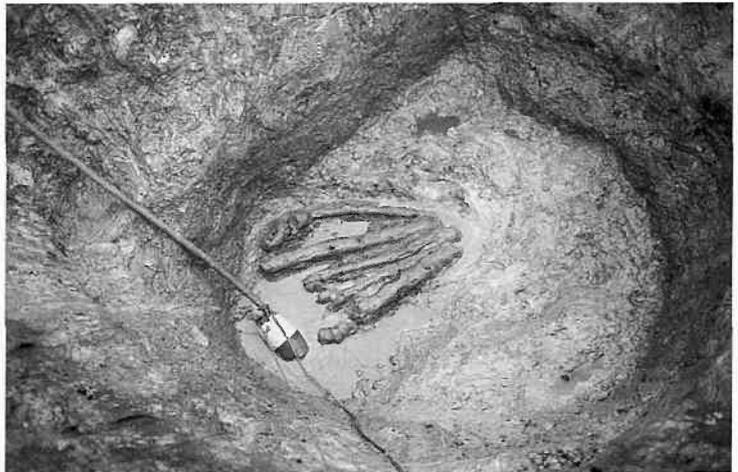


平成14年度 SE-01井筒検出状況 (北西から)

平成14年度  
SE-01井筒下部  
(南西から)



平成14年度  
SE-01井筒下溜木  
検出状況  
(北西から)



平成14年度 SE-01完掘状況 (北東から)

図版 8



平成14年度  
SK-01検出状況  
(西から)



平成14年度  
SK-02検出状況  
(北から)

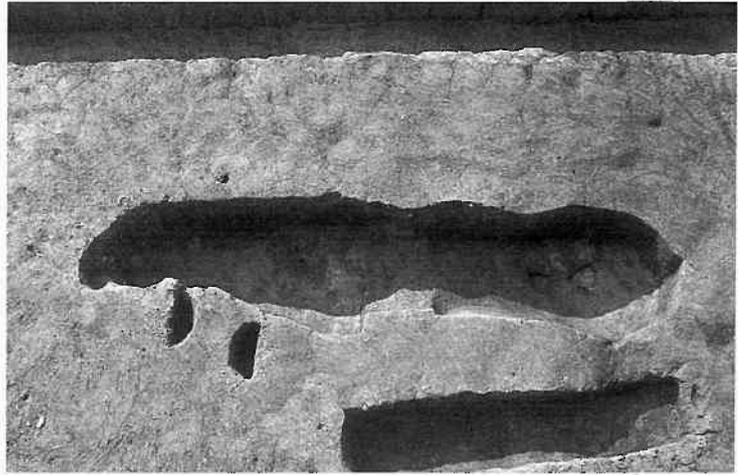


平成14年度  
SK-03検出状況  
(北東から)

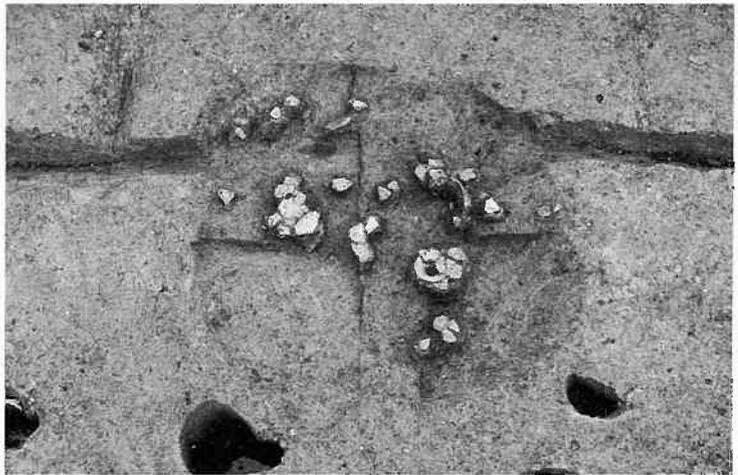


平成14年度  
SK-04検出状況  
(北東から)

平成14年度  
SK-05検出状況  
(北東から)



平成14年度  
SK-06検出状況  
(南東から)



平成14年度  
SK-07遺物出土状況  
(南東から)



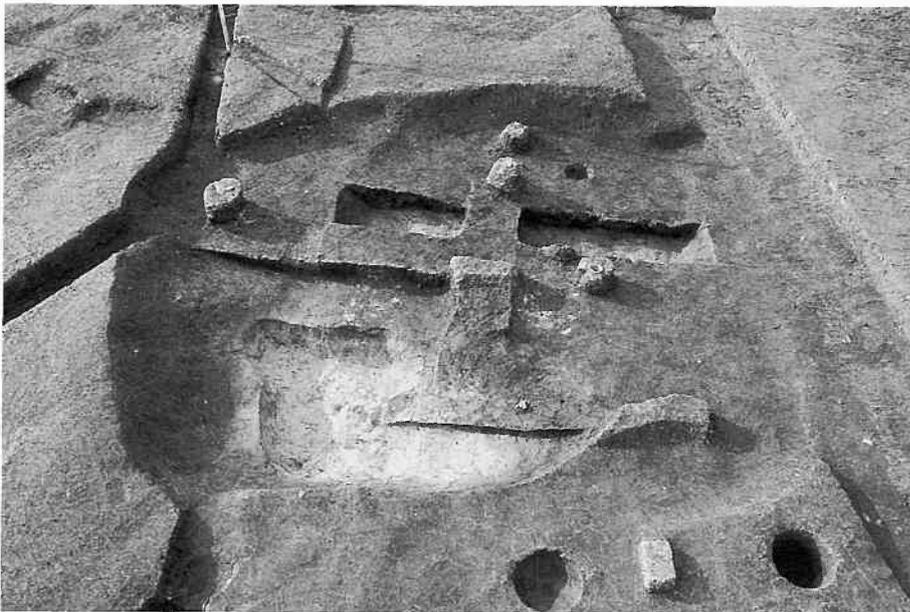
平成14年度  
SK-07完掘状況  
(南東から)



図版10



平成14年度  
SK-08断面  
(南西から)



平成14年度  
SK-08遺物出土状況  
(南東から)



平成14年度  
SK-08完掘状況  
(南東から)



平成14年度  
SK-08完掘状況  
(北東から)

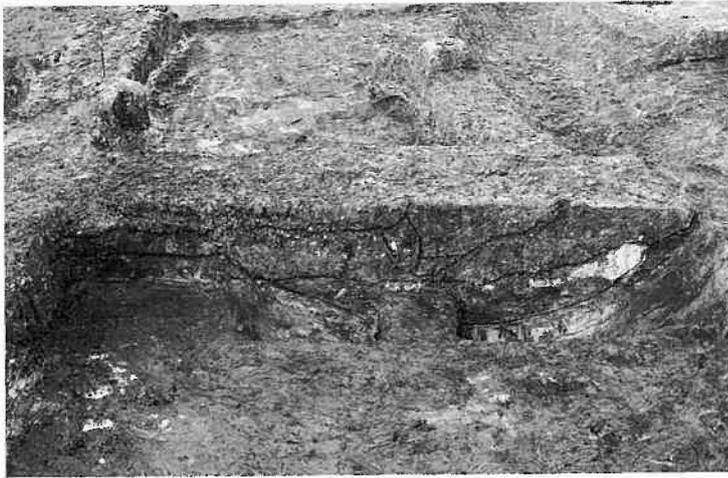


平成14年度  
SK-08内P-238断面  
(南東から)



平成14年度  
SK-08内P-239断面  
(南東から)

図版12



平成14年度  
SK-10断面  
(南西から)



平成14年度  
SK-10検出状況  
(南東から)



平成14年度  
SD-01検出状況  
(南西から)



平成14年度  
SD-02検出状況  
(北東から)



平成14年度 SD-03検出状況（南から）



平成14年度  
SD-04検出状況  
（北から）



平成14年度  
SD-05～08検出状況  
（北東から）

図版14



平成14年度  
SD-09検出状況  
(南西から)



平成14年度  
SD-10検出状況  
(南東から)

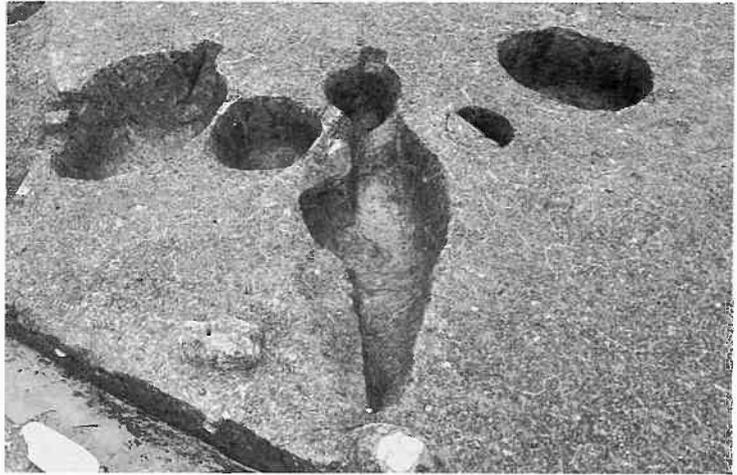


平成14年度  
SD-11検出状況  
(北東から)



平成14年度  
SD-12検出状況  
(南西から)

平成14年度  
SD-13検出状況  
(南西から)



平成14年度  
SD-14・15検出状況  
(南東から)



平成14年度  
SD-16検出状況  
(北西から)



平成14年度  
SD-17検出状況  
(北東から)





平成14年度  
土器溜 1 検出状況  
(南東から)



平成14年度  
土器溜 2 検出状況  
(南東から)



平成14年度  
土器溜 2 遺物出土状況  
(南東から)



平成14年度  
集石遺構検出状況  
(北西から)



平成15年度調査区全景（北から）



平成15年度  
市道東調査区全景  
（北西から）



平成15年度  
市道西調査区全景  
（南東から）

図版18



平成15年度  
市道東調査区断面  
C7N10杭周辺  
(北東から)

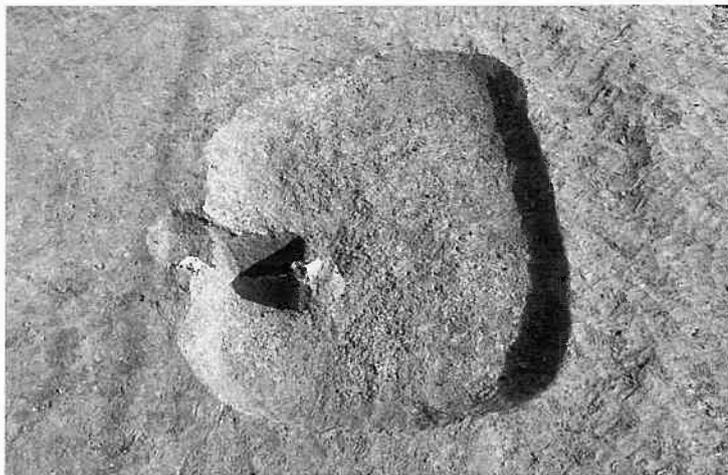


平成15年度  
市道西調査区断面  
C10N10杭周辺  
(北東から)



平成15年度  
市道西調査区  
Tr-1東壁面  
(北西から)

平成15年度  
SK-01検出状況  
(北西から)



平成15年度  
SK-02断面  
(北東から)



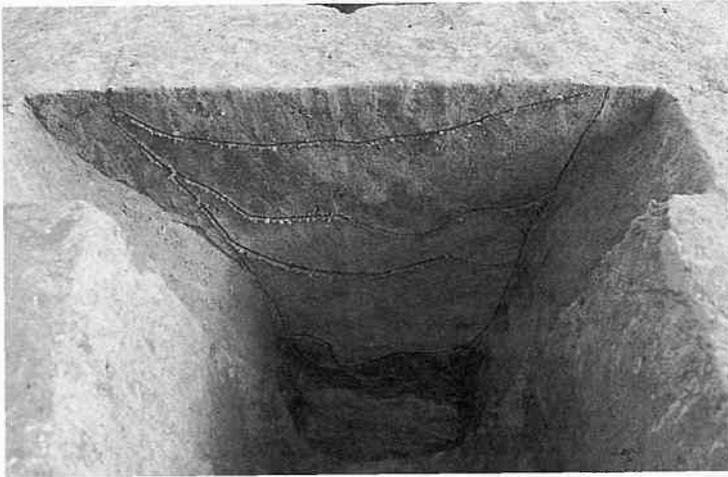
平成15年度  
SK-02検出状況  
(北西から)



平成15年度  
SK-03検出状況  
(北東から)



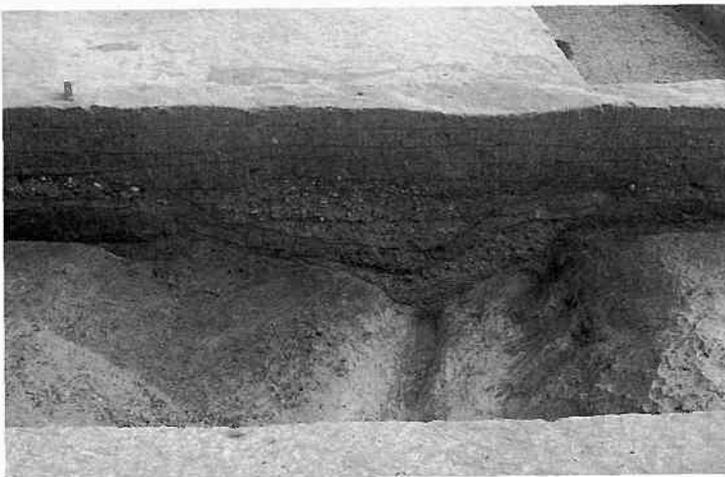
図版20



平成15年度  
SD-01断面C-C1'  
(南東から)



平成15年度  
SD-01検出状況  
(北から)



平成15年度  
SD-02断面  
(北東から)



平成15年度 SD-02 (南部分) 検出状況 (南西から)



平成15年度  
SD-02遺物出土状況  
(北東から)



平成15年度  
SD-03断面b-b'  
(南西から)

図版22



平成15年度  
SD-03(南部分)検出状況  
(南西から)



平成15年度  
SD-04断面  
(南西から)



平成15年度  
SD-04検出状況  
(北東から)



平成15年度  
SD-04遺物出土状況  
(北東から)



平成15年度  
SD-05断面  
(北から)



平成15年度  
SD-05上層  
遺物出土状況  
(南西から)

図版24



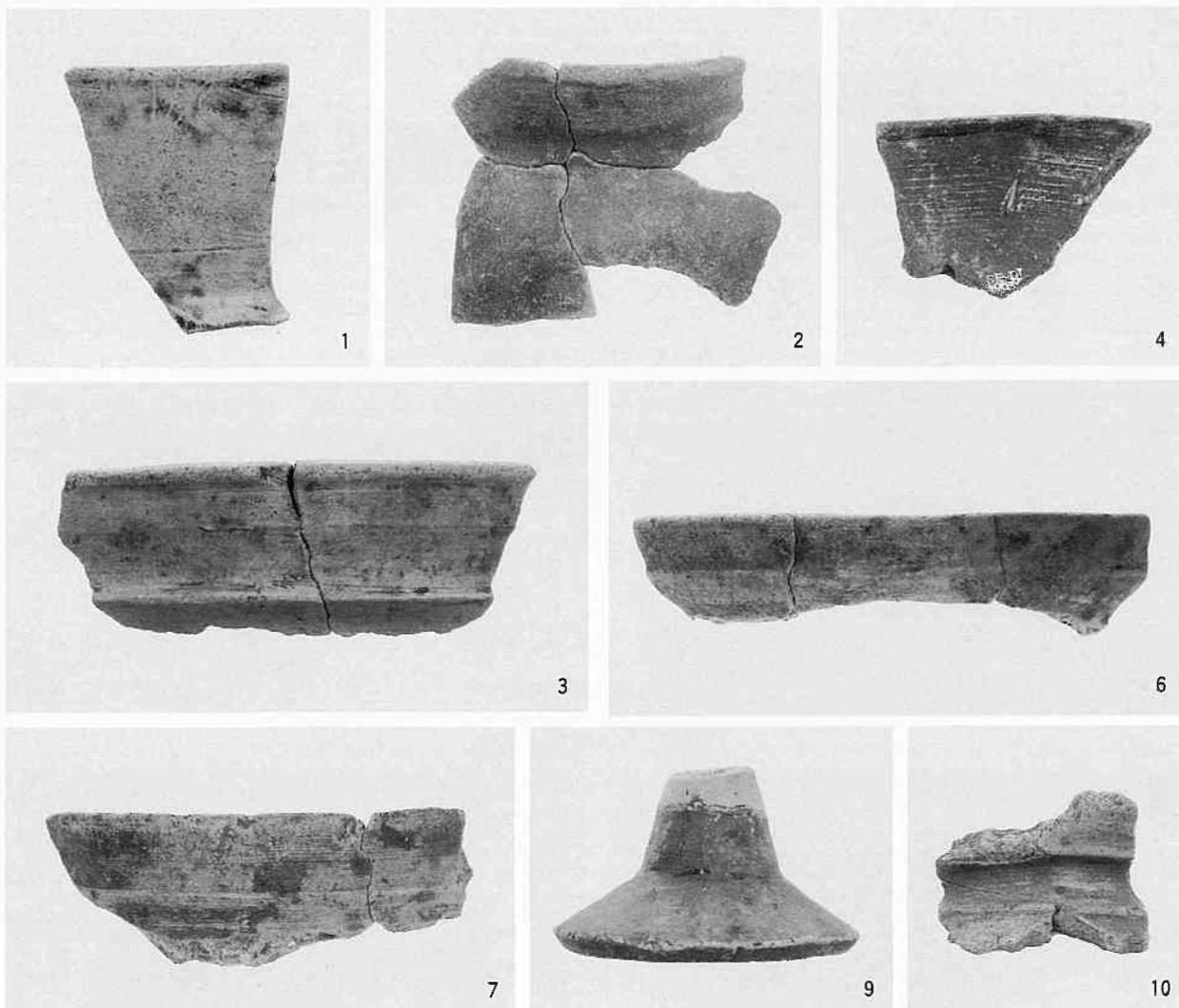
平成15年度  
SD-05上層  
遺物出土状況  
(南東から)



平成15年度  
SD-05上層遺物  
壺出土状況  
(南東から)



平成15年度  
SD-05  
完掘状況  
(北東から)



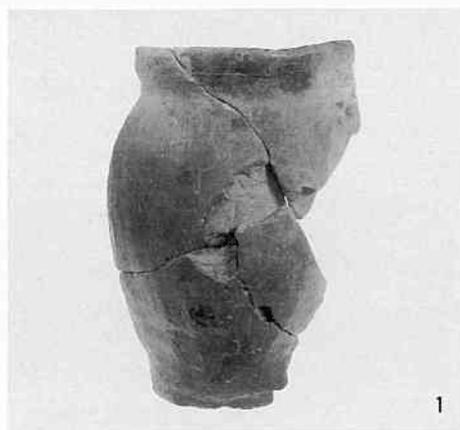
(H.14) SE-01出土遺物



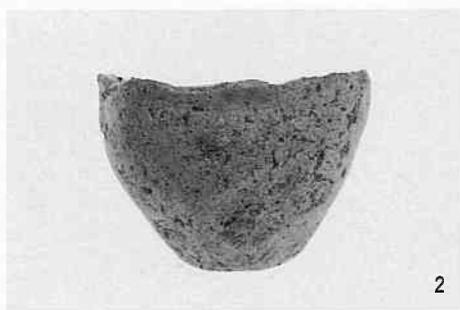
(H.14) SK-02出土遺物



(H.14) SK-06出土遺物

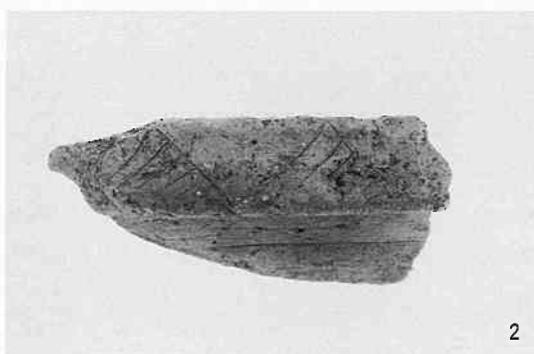
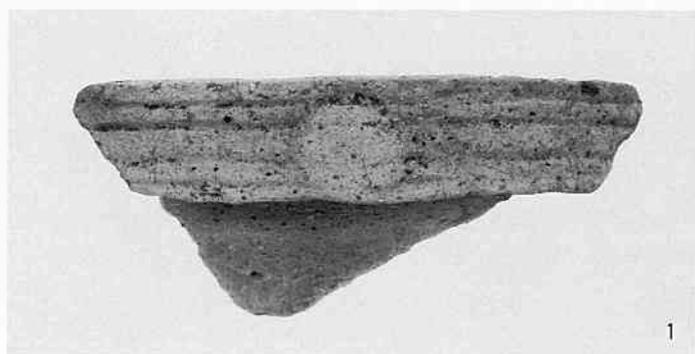


(H.14) SK-07出土遺物

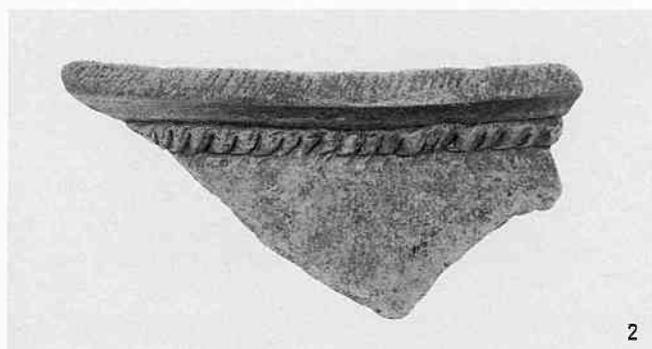
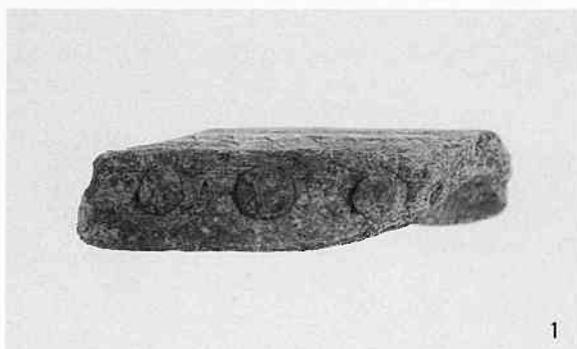


(H.14) SK-08出土遺物

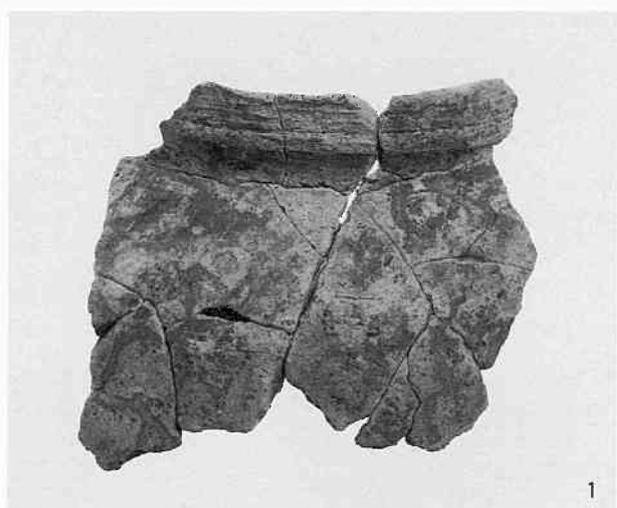
図版26



(H.14) SD-01出土遺物



(H.14) SD-02出土遺物



(H.14) SD-03出土遺物

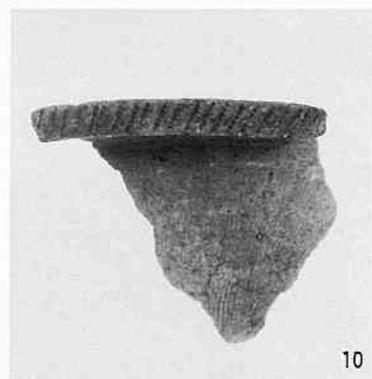
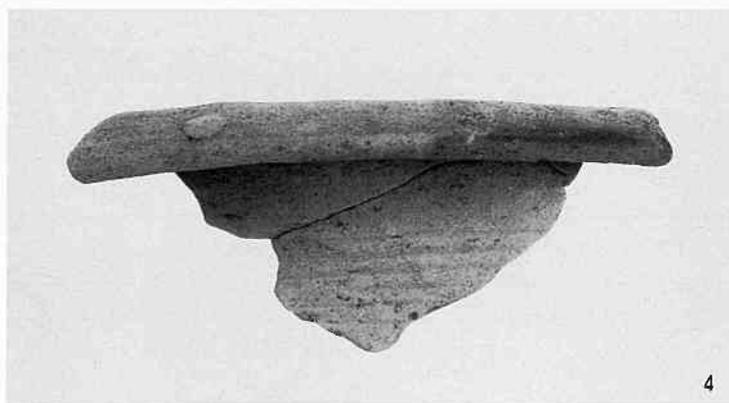
(H.14) 土器溜 1 出土遺物



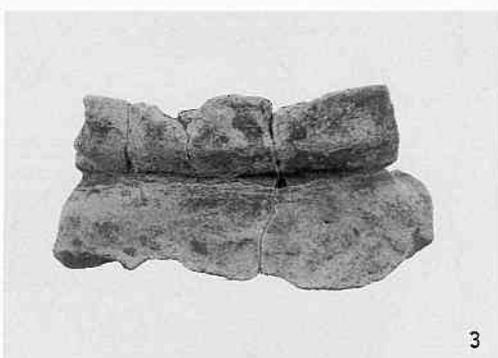
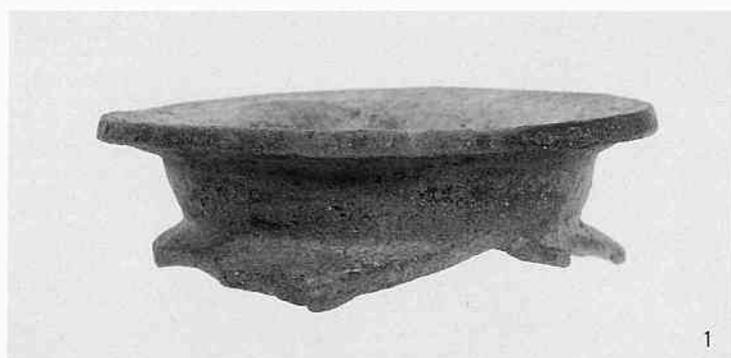
(H.14) 遺構外出土遺物



(H.15) SD-02出土遺物



(H.15) SD-02出土遺物

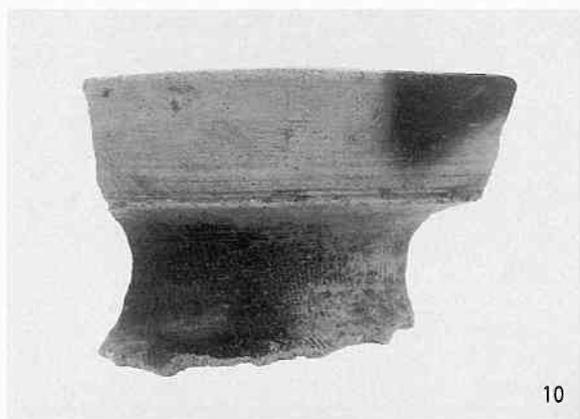
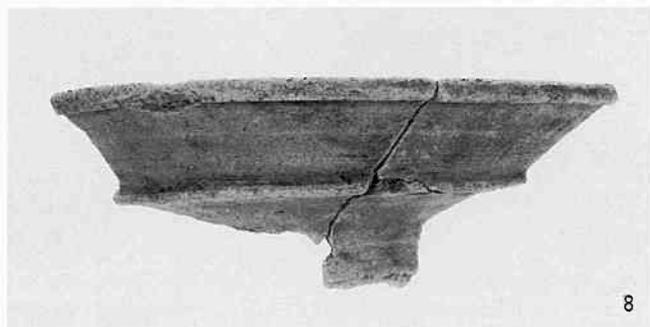
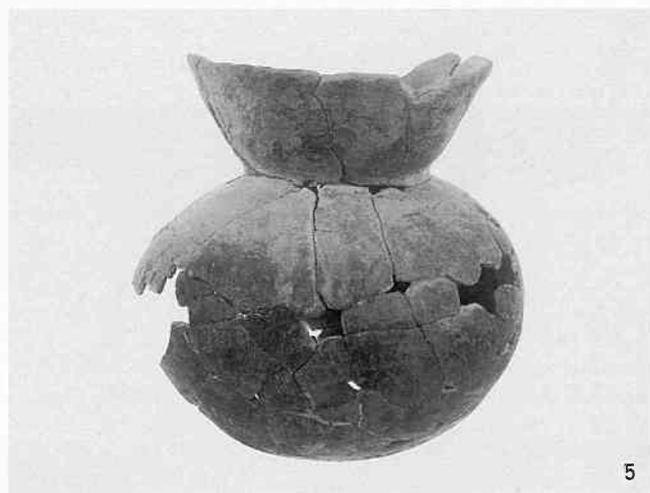


(H.15) SD-04出土遺物

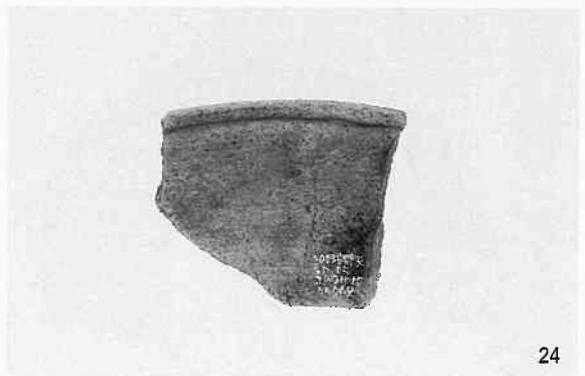
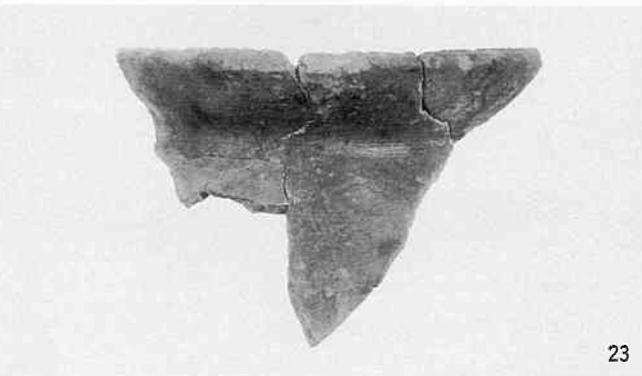
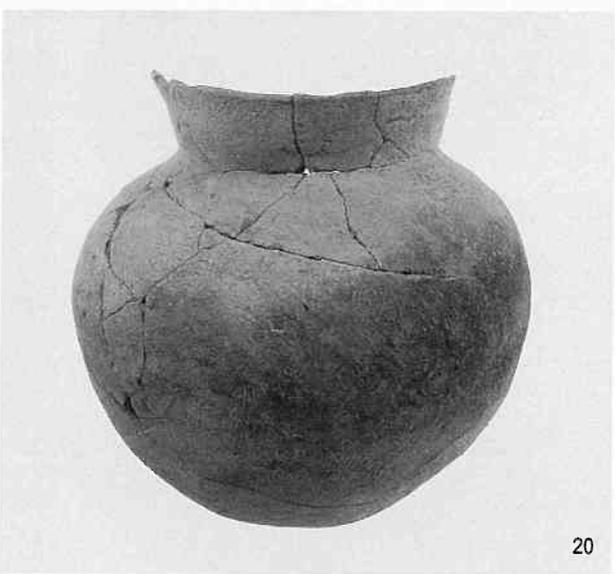
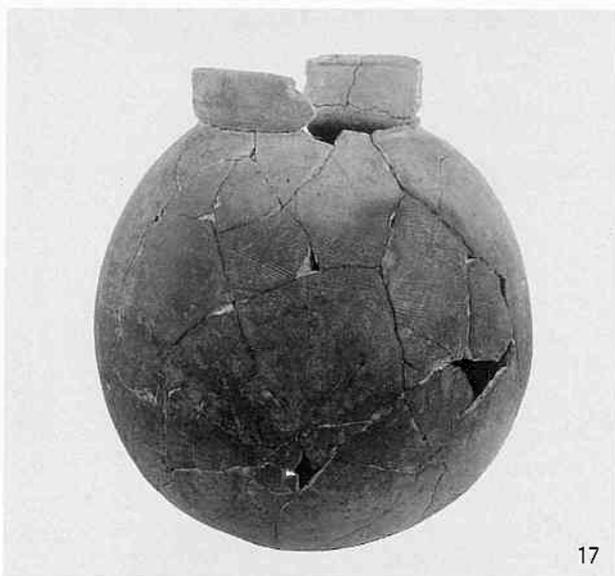
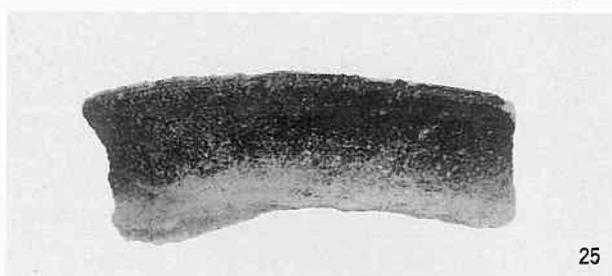
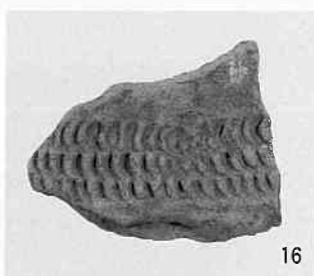


(H.15) SD-05出土遺物



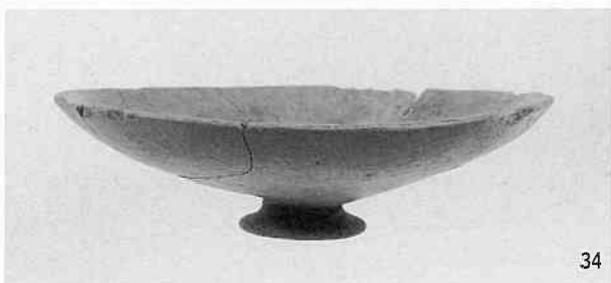
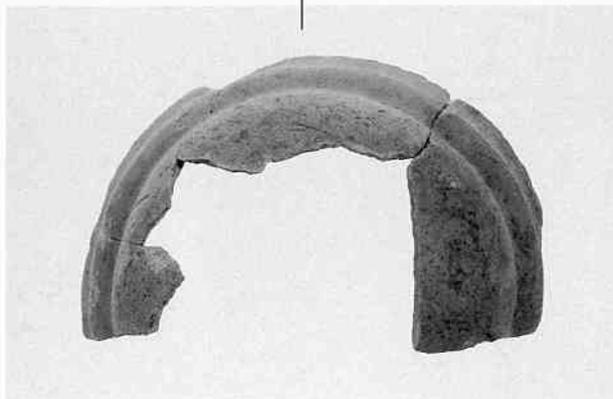
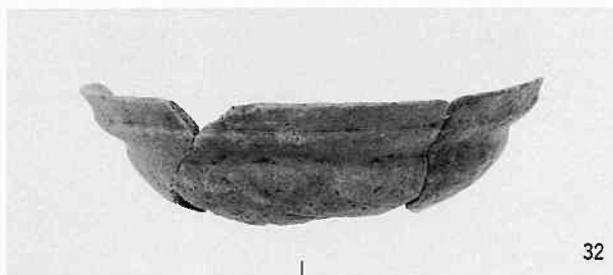
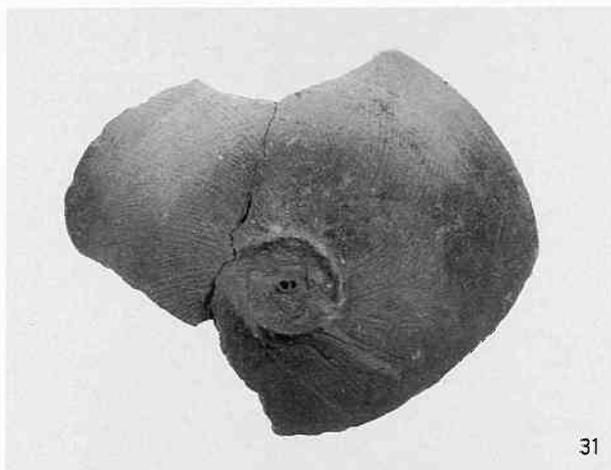
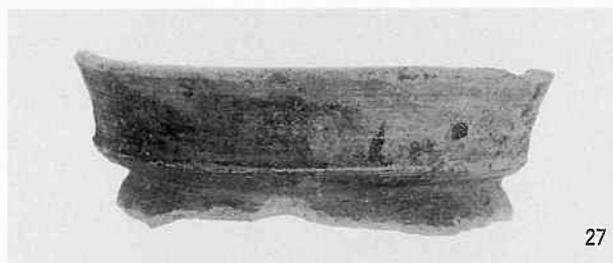
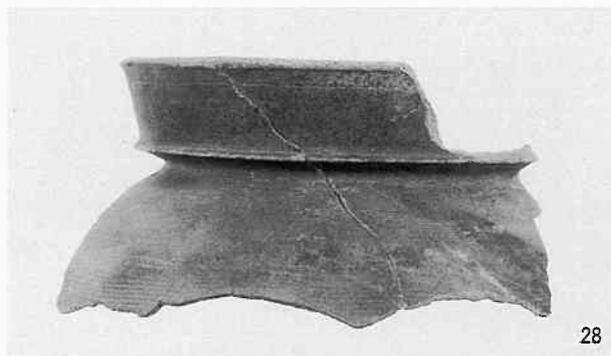


(H.14) SD-05出土遺物

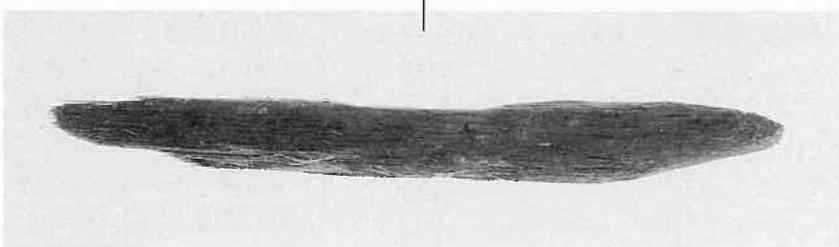
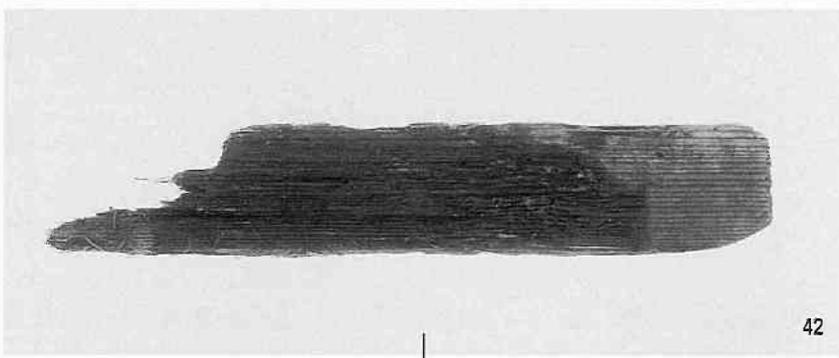
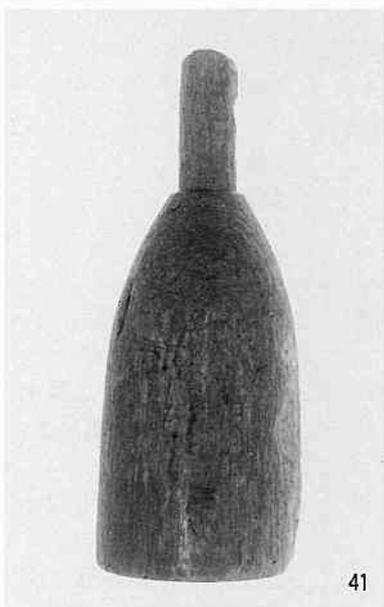
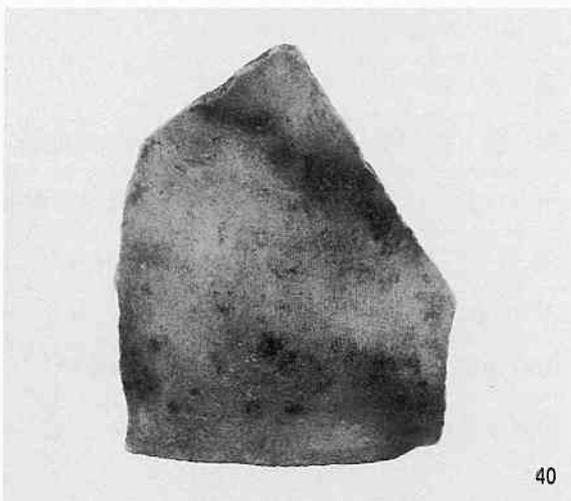
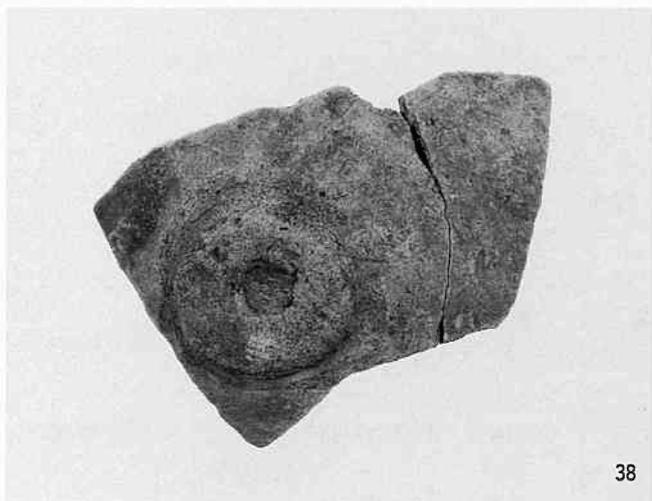
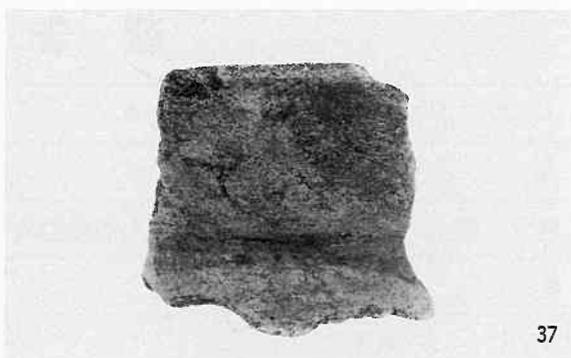


(H.15) SD-05出土遺物

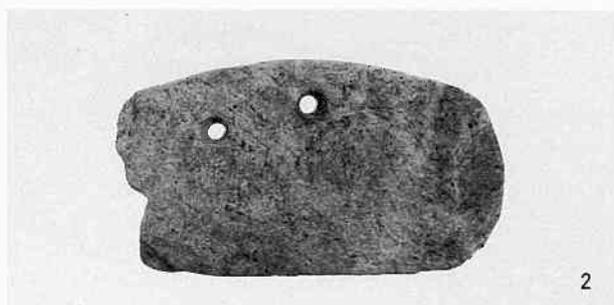
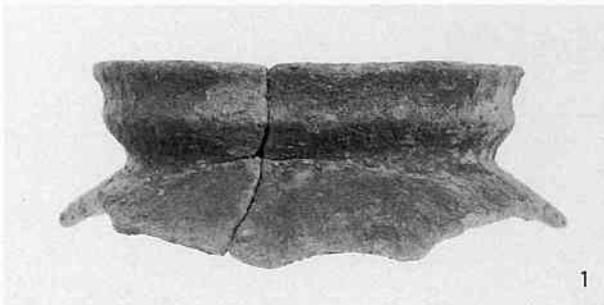
图版30



(H.14) SD-05出土遺物



(H.14) SD-05出土遺物



(H.15) 遺構外出土遺物

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ここおげいせき							
書名	古 郡 家 遺 跡							
副書名	一般県道国安桂木線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	谷口 恭子							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL (0857) 23-2140							
発行年月日	西暦 2004年 7月30日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ' "	° / ' "			
ここおげいせき 古郡家遺跡	とっとりしここおげ 鳥取市古郡家	31 201		35° 27' 19"	134° 14' 27"	20020924 ～ 20030131  20030722 ～ 20031114	のべ 1149.75 m <sup>2</sup>  のべ 992m <sup>2</sup>  合計 2141.75 m <sup>2</sup>	県道整備
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
古郡家遺跡	集 落	弥生時代 中期 後期  古墳時代 前期 中期 後期  平安時代 鎌倉時代	掘立柱建物 井戸 土坑 溝状遺構 土器溜 集石遺構 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 瓦質土器 陶磁器 石庖丁 木槌 舟形木製品 井筒 柱根	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 外径75cm、高さ1.34mの丸太刳抜き井筒出土。</li> <li>・ 幅6.70m、深さ1.52mの溝状遺構を検出。埋土の大半は砂礫で上層に壺・甕の土器群を検出。地鎮祭祀か。</li> <li>・ 北近畿系土器出土。</li> </ul>			

---

---

## 古 郡 家 遺 跡

— 一般国道国安桂木線緊急地方道路整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査 —

平成16年7月30日 印刷・発行

編集・発行 財団法人 鳥取市文化財団

印刷所 株式会社 矢谷印刷所

---

---